



かたりて、物など喰ひてその夜はやすみて、翌朝疾く起きて手洗ひて、何時も讀み奉る經を讀まんとて引き開けたれば、あの谷にて蛇の背に突き立てし刀、この御經に弘誓深如海の所に立ちたり。見るに、いと淺ましなどはおろかなり。こはこの經の蛇に變じて、我を助けおはしましけりと思ふに、あはれにたふとくかなし。いみじと思ふ事かぎりなし。そのあたりの人々、これを聞きて見あざみけり。今さら申すべきことならねど、觀音を頼み奉らん、その驗なしといふことあるまじきことなり。

### 賀茂の社より御幣紙米等たまふ事

今は昔、比叡山に僧ありけり。いと貧しかりけるが、鞍馬に七日参りたりけり。夢などや見ゆるとて参りけれど、見えざりければ、今七日とて参れども猶見えねば、七日をのべのべして百日参りけり。その百日といふ夜の夢に、我はえしらす、清水へ参れと仰せらるゝと見ければ、明くる日より又清水へ百日まるるに、又我はえこそ知らね、賀茂に参りて申

うちまきの米一  
洗米にて、神前  
に供へうちまき  
よりいふ  
あり、くしてと  
どのつまりに

さりとも一まさ  
か  
きらくしから  
ねど一立派とい

せと夢に見てければ、又賀茂にまゐる。七日と思へども、例の夢見んくくと参るほどに、百  
日といふ夜の夢に、わ僧がかく参るいとほしければ、御幣紙うちまきの米ほどのもの、慥  
に取らせんと仰せらるよと見て、うち驚きたる心地、いと心憂く哀にかなし。所々参りあ  
りきつるに、ありくしてかく仰せらるよよ、うちまきの代ばかり賜はりて何にかはせん、  
我山へかへりのほらんも人目はづかし、賀茂川にや落ち入りなましなど思へども、又さ  
すがに身をもえ投けず、いかやうに計らはせ給ふべきにかと、ゆかしきかたもあれば、も  
との山の坊にかへりて居たるほどに、知りたる所より、物申し候はんといふ人あり。誰ぞ  
とて見れば、白き長櫃ながびつを荷ひて、椽に置きてかへりぬ。いと怪しく思ひて、使を尋ねれど  
大かたなし。これを開けて見れば、白き米と善き紙とを一長櫃入れたり。これは見し夢  
のまよなりけり、さりともとこそ思ひつれ、こればかりを誠に賜びたると、いと心憂く思  
へどもいかどはせんと、この米を萬に使ふに、唯同じおほさにて盡くることなし。紙も同  
じごと使へど、失することなくて、いと別にきらくしからねど、いとたのもしき法師に

ふほどにはまら  
ねど

○今昔十九、備  
國國王極觀音出  
家語参照

ふしぐる一節を  
削らぬ竹にて編  
みたる籠  
葦毛一白毛に黒  
き葦毛あるをい  
ふ

なりてぞありける。猶心長く物まうではすべきなり。

信濃國筑摩の湯に觀音沐浴の事

今は昔、信濃の國筑摩つぐまの湯といふ所に、萬の人の浴みける藥湯あり。その邊なる人の夢に  
見るやう、明日の午の時に觀音湯浴み給ふべしといふ。いかやうにてかおはしまさんす  
ると問ふに、答ふるやう、年三十ばかりの男の鬚黒きが、綾あや蘭らん笠がさきて、ふしぐるなる籠かご  
皮かわ卷きたる弓持ちて、紺こんの襖あはせ著たるが、夏毛なつげの行いか騰はきて、葦毛あしげの馬うまに乗りてなん來べ  
き、それを觀音と知り奉るべしといふと見て、夢さめぬ。驚きて夜明けて、人々に告げ  
まはしければ、人々聞きつきて、その湯に集る事がぎりなし。湯を代へ周圍まわりを掃除し、  
注連しづめを引き花香を奉りて、居あつまりて待ち奉る。やうく午の時過ぎ、未なるほどに、  
唯この夢に見えつるに、露達はす見ゆる男の、顔より始め著たるもの馬何かに至るまで、  
夢に見しに違はず、萬の人俄に立ちて額ひたいを突く。この男大に驚きて、心もえざりければ

ゆてんー湯治せ  
ん

覺朝一覺越の誤  
か、括本には假  
名にて「かてうこ  
とあり

萬の人に問へども、唯拜みに拜みて、その事といふ人なし。僧のありけるが、手をすりて額にあてて、拜み入りたるが許へ寄りて、こはいかなる事ぞ、おのれを見てかやうに拜み給ふはと、よこなまりたる聲にて問ふ。この僧、人の夢に見えけるやうを語る時、この男いふやう、おのれさいつころ狩をして、馬より落ちて右の腕をうち折りたれば、それをゆでんとて参うで來たるなりといひて、とゆきかう行きするほどに、人々しりに立ちて拜みのよしる。男しわびて、我身はさは観音にこそありけれ、こよは法師になりなんと思ひて、弓、箆、太刀、刀、切り棄てて法師になりぬ。かくなるを見て、萬の人泣きあはれがる。さて見知りたる人出で來ていふやう、あはれかれは上野の國におはするばとうぬしにこそいましけれといふを聞きて、これが名をば馬頭觀音とぞいひける。法師になりて後横川にのほりて、覺朝僧都の弟子になりて、横川に住みけり。その後は土佐の國にいにけりとなん。

○今昔六、孔子  
遺逸傳榮辱期間  
言語參照

心をゆかさんー  
心を慰めん

帽子叟孔子と問答の事

今は昔、唐土に孔子、林の中の岡だちたるやうなる所にて逍遙し給ふ。我は琴を弾き、弟子どもは書を読む。こよに船に乗りたる叟の帽子したるが、船を蘆に繋ぎて陸にのほり、杖をつきて琴の調の終るを聞く。人々怪しきものかなと思へり。この翁孔子の弟子どもを招くに、一人の弟子招かれてよりぬ。叟いふ、この琴弾き給ふは誰ぞ、もし國の王かといふ。さもあらずといふ。さは國の大臣か。それにもあらず。國のつかさか。それにもあらず。さは何ぞと問ふに、唯國の賢き人として、政をし、悪しき事をなほし給ふ賢人なりと答ふ。翁あざわらひて、いみじき痴者かなといひて去りぬ。御弟子不思議に思ひて、聞きしまよにかたる。孔子聞きて、賢き人にこそあなれ、疾く呼び奉れ。御弟子走りて、今船漕ぎ出づるを呼びかへす、呼ばれて出で來たり。孔子の給はく、何わざし給ふ人ぞ。翁のいはく、させる者にも侍らず、唯船に乗りて、心をゆかさんがため

に罷りありくなり、君は又何人ぞ。世の政を直さんために罷りありく人なり。翁のいはく、きはまりてはかなき人にこそ、世にかけを厭ふ者あり、はれに出でて離れんと走る時、影はなるよことなし、陰に居て心のどかに居らば、影離れぬべきに、さはせずして、はれに出でて離れんとする時には、力こそつくれ、影離るよことなし、又犬の骸屍の水に流れてくだる、これを取らんと走る者は、水に溺れて死ぬ、かくのごとくの無益の事をせらるよなり、唯しかるべき居所しめて、一生をおくられん、これ今生ののぞみなり、この事をせずして、心を世にそめて騒がるよ事は、極めてはかなき事なりといひて、返答も聞かで歸り行き、船に乗りて漕ぎ出でぬ。孔子その後を見て二度拜みて、棹の音せぬまで拜み入りて居給へり。音せずなりてなん、車に乗りて歸り給ひにけるよし、人のかたりしなり。

僧伽多羅刹の國に行く事

○今昔五、僧伽多羅刹五百商人共至羅刹國語參照

伽多一多は羅のあやまりかかねのつ一金の津にて、金多き島の意なるべし

ちうたき事一愛らしき事

昔、天竺僧伽多といふ人あり。五百人の商人を船に載せて、かねのつへ行くに、俄にあしき風吹きて、船を南の方へ吹きもて行くこと矢を射るがごとし。知らぬ世界に吹き寄せられて、陸によりたるをかしこき事にして、左右なく皆惑ひおりぬ。暫しばかりありて、いみじくをかしけなる女房、十人ばかり出で来て、歌をうたひてわたる。知らぬ世界に来て心細く覺えつるに、かゝるめでたき女どもを見つけて、喜びて呼び寄す、呼ばれてより來ぬ。ちかまさりしてらうたき事物にも似ず。五百人の商人目をつけて、めでたがる事かぎりなし。商人女に問うていはく、我等實を覚めんために出でにしに、あしき風に逢ひて知らぬ世界に來たり、堪へがたく思ふ間に、人々の御有様を見るに憂のころ皆失せぬ、今は速に具しておはして、我等を養ひたまへ、船は皆損じたれば、歸るべきやうなしといへば、この女ども、さらばいざさせ給へといひて、前に立ちて導きて行く。家につきて見れば、白く高き築土を遠く築きまはして、門を厳しく立てたり、その内に具して入りぬ。門の錠をやがて鎖しつ。内に入りて見れば、様々の屋どもへだてく

によふこゑす  
時吟する聲す

日の食一日マ  
の食の誤か

作りたり、男ひとりもなし。さて商人ども、皆々とりぐに妻にして住む。互に思ひ合ふ事限なし。片時も離るべき心地せずして住む間、この女日ごとに晝寢をする事ひさし。顔をかしけながら、寢入るたびに少しけうとく見ゆ。僧伽多、このけうときを見て心えず、怪しく覺えければ、やはら起きて片方を見れば、様々のへだてくあり、こよに一つのへだてあり、築地を高くつきめぐらしたり。戸に錠を強く鎖せり。側より上りて内を見れば、人おほくあり、或は死に或はによふこゑす。又白き屍赤き屍おほくあり。僧伽多、一人の生きたる人を招き寄せて、これはいかなる人のかくてはあるぞと問ふに、答へていはく、我は南天竺のものなり、商のために海をありきしに、悪しき風にはなたれて、此島に來たれば、世にめでたけなる女どもにたばかられて、歸らんことも忘れて住む程に、うみと産む子は皆女なり、限なく思ひて住むほどに、又他商人船より來ぬれば、もとの男をばかくの如くして、日の食に充つるなり、御身どもも又船來なば、かよる目をこそは見給はめ、如何にもして疾く逃け給へ、この鬼は晝三時ばかりは晝寢

よぼる一編なり

補陀落世界一觀  
音の所在

ばひしちがひ  
響ひ合ひ

をするなり、この間よく逃げば逃ぐべきなり、この籠められたる四方は、鐵にてかためたり、その上よほろすぢを絶たれば、逃ぐべきやうなし、と泣く言ひければ、怪しとは思ひつるにとて、かへりて、のこりの商人どもにこのよしを語るに、皆あきれ惑ひて、女の寢たるひまに、僧伽多をはじめとして濱へ皆行きぬ。遙に補陀落世界の方へ向ひて、諸共に聲を揚げて觀音を念じけるに、沖の方より大なる白馬、浪の上を泳ぎて、商人等が前に來てうつぶしに伏しぬ。これ念じ參らす験なりと思ひて、あるかぎり皆取りつきて乗りぬ。さて女どもは寢起きて見るに、男ども一人もなし。逃けぬるにこそとて、あるかぎり濱へいでて見れば、男皆葦毛なる馬に乗りて、海を渡りて行く。女ども忽に長一丈ばかりの鬼になりて、十四五丈高く躍り上りて叫び罵るに、この商人の中に、女の世にありがたかりし事を、思ひ出づる者一人ありけるが、取りはづして海に落ち入りぬ。羅刹ばひしらがひて、これを破り喰ひけり。さてこの馬は、南天竺の西の濱に至りてふせりぬ。商人ども喜びておりぬ。その馬かき消つやうに失せぬ。僧伽多深く恐し

と思ひて、この國に来て後、この事を人に語らず、二年を経て、この羅刹女の中に、僧伽多（僧伽多）が妻にてありし、僧伽多（僧伽多）が家に來たりぬ。見しよりも猶いみじくめでたくなりて、いはん方なく美しく、僧伽多（僧伽多）にいふやう、君をばさるべき昔の契にや、殊に睦（睦）じく思ひしに、かく棄てて逃け給へるはいかにおほすにか、我國にはかよるものの、時々出で來て人を喰ふなり、されば錠をよく鎖し、築土を高く築きたるなり、それにかく、人の多く濱に出で罵る聲を聞きて、かの鬼どもの來て、怒れるさまを見せて侍りしなり、あへて我等が所爲（しわざ）にあらず、かへり給ひて後、あまりに戀しく悲しくおほえて、殿は同じ心にも思さぬにやとて、さめくくと泣く。おほろけの人の心にはさもやと思ひぬべし。されども僧伽多（僧伽多）大にいかりて、太刀を抜きて殺さんとす。かぎりなく怨みて、僧伽多（僧伽多）が家を出でて、内裏に参りて申すやう、僧伽多（僧伽多）は我年比（わがとしごほ）の夫なり、それに我を棄ててすまぬこととは、誰にかは訴へ申し候はん、帝王これをことわり給へと申すに、公卿殿上人これを見て、限なくめでまどはぬ人なし。帝聞し召して覗きて御覽するに、いはんかたなく美

ことわり給へ  
判決し給へ

すまぬ一妻とせ  
ぬにて夫婦とな  
らぬをいふ  
みうち一内裏

よるのちとど  
裏所

しう、若干（そこはく）の女御（にようご）后を御覽じくらぶるに、皆土塊（つちくわい）のごとし、これは玉のごとし。かよるものにするまぬ僧伽多（僧伽多）が心、いかならんと思召しければ、僧伽多（僧伽多）を召して問はせ給ふに僧伽多（僧伽多）申すやう、これはさらにみうちへ入れ見るべきものにあらず、返すく恐しきものなり、ゆよしき僻事（ひがこと）出で來候はんすると申して出でぬ。帝このよし聞召して、この僧伽多（僧伽多）はいひがひなきものかな、よしく後（うしろ）の方より入れよと、藏人して仰せられければ、夕暮方に参らせつ。帝近く召して御覽するに、けはひすがたみめありさま、香（かう）しく懐（なつか）しき事かぎりなし。さて二人臥させ給ひて後、二日三日まで起きあがり給はず、世の政事（まつりごと）をも知らせ給はず。僧伽多（僧伽多）まるりて、ゆよしき事出で來たりなんす、淺ましきわざかな、これは速に殺され給ひぬると申せども、耳に聞き入るゝ人なし。かくて三日になりぬる朝、御格子もいまだあがらぬに、この女よるのおとどより出でて、立てるを見れば、まみも變りて世に恐しけなり、口に血つきたり。暫し世の中を見まはして、軒（のき）より飛ぶが如くして雲に入りて失せぬ。人々このよし申さんとて、よるのおとどにまゐり

たれば、御帳の内より血流れたり。怪みて御帳の中を見れば、赤き首ひとつのこれり。その外はものなし。さて宮の内罵る事譬へんことなし。臣下男女泣き悲む事かぎりなし。御子の東宮、やがて位につき給ひぬ。僧伽多を召して、事の次第を召し問はるゝに、僧伽多申すやう、さ候へばこそ、かゝるものにて候へば、速に追ひ出さるべきやうを申しつるなれ、今は宣旨を蒙りて、これを討ちて參らせんとまうすに、申さんまよに仰せ賜ふべしとありければ、劍の太刀佩きて候はん武士百人、弓矢帶したる百人、はや船に乗りて出し立てらるべしと申しければ、そのまよに出し立てられぬ。僧伽多この軍兵を具して、かの羅刹の島へ漕ぎ行きつゝ、まづ商人のやうなるものを、十人ばかり濱に下したるに、例の如く玉女どもうたひを歌ひて来て、商人を誘ひて女の城へ入りぬ。その後しうごに立ちて、二百人の兵士亂れ入りて、この女どもをうち斬り射るに、暫しは怨みたるさまにて、哀けなる氣色を見せけれども、僧伽多大なる聲を放ちて、走りまはつておきてければ、その時鬼の姿になりて、大口を開きてかゝりけれども、太刀にて頭をわり、手

玉女—美人をいふ、時經に、有女如玉

足うち斬りなどしければ、空を飛びて逃ぐるをば弓にて射落しつ、一人も残るものなし。家には火をかけて焼き拂ひつ、空しき國となしはてつ。さてかへりて、おほやけにこのよし申しければ、僧伽多にやがてこの國を賜ひつ。二百人の軍兵を具して、その國にぞ住みける。いみじくたのしかりけり。今は僧伽多が子孫、かの國の主にてありとなん申し傳へたる。

## 宇治拾遺物語 卷第七

## 五色鹿の事

これも昔、天竺に身の色は五色にて、魚の色は白き鹿しかひとつありけり。深山みやまにのみ住みて人に知られず。その山の邊ほとりに大なる川あり、その山にまた鳥あり、このかせきを友として過す。或時この川に男一人流れて、既に死なんとす、我を人助けよとさげぶに、このかせき、この叫ぶ聲を聞きて、悲みに堪へずして、河を泳ぎよりてこの男を助けてけり。男命の生きぬる事を喜びて、手をすりて鹿に向ひていはく、何事もちてかこの恩を報い奉るべきといふ。かせきのいはく、何事を持ちてか恩をばむくいん、たゞこの山に我ありといふことを、ゆめく人にかたるべからず、わが身の色五色なり、人知りなば皮を取らんとて必ず殺されなん、この事をおそるとによりて、かゝる深山に隠れてあへ

○今昔五、身色  
九色鹿住山出河  
邊助人語參照

かせき一鹿

その國一其國

て人に知られず、しかるを汝が叫ぶ聲を悲みて、身の行末を忘れて助けつるなりといふ時に、男、これまことに道理ことわりなり、更にもらす事あるまじと、返すく契りて去りぬ。もとの里に歸りて月日を送れども、更に人にかたらず。かゝるほどに、國の後夢に見給ふやう、大なるかせきあり、身の色は五色にて角しろし。夢覺めて大王に申し給はく、かかる夢をなん見つる、このかせき定めて世にあるらん、大王必ずたづね取りて、我に與へ給へと申し給ふに、大王宣旨を下して、もし五色のかせき尋ねて奉らんものは、金銀珠玉などの寶、並に一國などを賜ふべしと仰せふれらるゝに、この助けられたる男、内裏に参りて申すやう、尋ねらるゝ色のかせきは、その國の深山にさぶらふ、あり所を知れり、狩人を賜うて取りて参らすべしと申すに、大王大に喜び給ひて、自ら多くの狩人を具して、この男を先導しんどうに召し具して行幸ゆきなりぬ。その深山に入り給ふ。このかせきあへて知らず、洞ほらの中に臥せり。かの友とする鳥これを見て、大に驚きて聲をあけて鳴き、耳をくひてひくに、鹿驚きぬ。鳥告げていはく、國の大王多くの狩人を具して、この山



をとり巻きて、既に殺さんとし給ふ。今は逃ぐべき方なし、いかどすべきといひて泣く泣く去りぬ。かせき驚きて、大王の御輿みこの許へ歩み寄るに、狩人ども矢をはけて射んとす。大王の給ふやう、かせき恐るゝ事なくして來たれり、定めてやうあるらん、射ることなかれ。その時狩人ども矢をはづして見るに、御輿の前に跪きて申さく、我毛の色を恐るゝによりて、この山に深く隠れ住めり、しかるに大王いかにして、我住所をば知り給へるぞやと申すに、大王の給ふ、この輿の側そばにある顔に痣あざのある男、告げ申したるによりて來たれるなり。かせき見るに、顔に痣ありて御輿の傍かたはらに居たり。わが助けたりし男なり。かせきかれに向ひていふやう、命を助けたりし時、この恩何にても報じ盡し難きよしいひしかば、こゝに我あるよし人に語るべからざるよし、かへすく契りし所なり、しかるに今その恩を忘れて、殺させ奉らんとす、いかに汝水に溺れて死なんとせし時、わが命をかへりみず、泳ぎよりて助けし時、汝限なく喜びし事は覺えずやと、深く怨みたる氣色にて涙を垂れて泣く。その時に大王、同じく涙を流しての給はく、汝は畜生ちくじやうな



人倫一人間

れども慈悲をもて人を助く、かの男は慾に耽りて恩を忘れたり、畜生といふべし、恩を知るをもて人倫とすとて、この男をとらへて、鹿の見る前にて頸を斬らせらる。又の給はく、今より後國の中にかせきを狩ることなかれ、若しこの宣旨を背きて、鹿の頭にも殺すものあらば、速に死罪に行はるべしとてかへり給ひぬ。その後より天下安全に、國土ゆたかなりけりとぞ。

播磨守爲家の侍佐多の事

○今昔二十四、  
播磨國郡司家女  
讀和歌語參照

今は昔、播磨守爲家といふ人あり。それが内にさせる事もなき侍あり。宇さたとなんいひけるを、例の名をば呼ばずして、主も朋輩もたどさたとのみ呼びける。さしたる事はなけれども、まめに使はれて年比になりければ、あやしの郡の收納などせさせければ、喜びてその郡に行きて、郡司の許に宿りにけり。爲すべきものの沙汰などいひきたして、四五日ばかりありて上りぬ。この郡司が許に京よりうかれて、人にすかされて來

きりかけ一板を  
柄に幾枚も疊み  
重ねたる垣  
かなしうせん一  
寵愛せん

たりける女房のありけるを、いとをかしがりて養ひ置きて、物縫はせなど使ひければ、さやうの事なども心得てしければ、哀なるものに思ひて置きたりけるを、このさたに従者がいふやう郡司が家に、京のめなどいふものの、容貌よく髪長きがさぶらふを隠しすゑて、殿にも知らせ奉らで置きて候ふぞと語りければ、ねたきことかな、わ男かしこにありし時はいはず、此所にてかくいふは、にくき事なりといひければ、そのおはしましと傍に、きりかけの侍りしを隔てて、それがあなたにさぶらひしかば、知らせ給ひたるらんとこそ思ひ給へしかといへば、この度は暫しいかじと思ひつるを、暇申して疾く行きて、その女房かなしうせんといひけり。さて二三日ばかりありて、爲家に沙汰すべき事どもの候ひしを、沙汰しさせて参りて候ひしなり、暇賜はりて罷らんと言ひければ、事を沙汰しさせて、何せんに上りけるぞ、疾く往けかしといひければ、喜びて下りけり。行きつきけるまよに、とかくの事もいはず、もとより見馴れなどしたらんにてだに、うとからん程はさやあるべき、従者などにせんやうに、著たりける水干の怪しけな

りけるが、ほころびたえたるを、きりかけの上より投げこして、高やかに、これがほころび縫ひて遣せよといひければ、程もなく投げ返したりければ、物縫はせごとせさすと聞くが、實に疾く縫ひて遣せたる女人かなと、荒らかなる聲して譽めて取りて見るに、ほころびは縫はで、檀紙の文をそのほころびのもとに結びつけて、投げ返したるなりけり。怪しと思ひてひろけて見れば、かく書きたり。

われが身は竹の林にあらねどもさたが衣をぬぎかくるかな

と書きたるを見て、哀なりと思ひ知らん事こそ悲しからめ、見るまよに大に腹を立てて、目つぶれたる女人かな、ほころび縫ひに遣りたれば、ほころびの絶えたる所をば見だにえ見つけずして、さたのところそいふべきに、かけまくも畏き守殿だにも、またこそよらの年月ごろまだしか召さね、などわ女がさたがと言ふべきことか、この女人に物習はさんといひて、世にあさましき所をさへ、何せんかせんとのり詛ひければ、女房は物も覺えずして泣きけり。腹立ちちらして郡司をさへ罵りて、いでこれ申して事に合せんとい

われが身は云々  
—金光明經捨身  
品薩摩王子の故  
事にて薩摩太子  
虎に身を與ふる  
ことあり  
悲しからめ—今  
昔には「かたか  
らめ」とあり、其  
方よるし  
またが—當時の  
習慣に名の下に  
「が」をつけてい  
ふは卑めたる時  
也  
物習はさん—思  
ひ知らせん  
世にあさましき  
所—陰部

その徳には—あ  
かげで

さぶらひ—侍所

名だて—不名譽

ひければ、郡司もよしなき人を哀み置きて、その徳には、はては勘當蒙るにこそあなれといひければ、かたぐ女恐しう侘しく思ひけり。かく腹立ち叱りて、かへり上りてさぶらひにて、安からぬ事こそあれ、物も覺えぬくさり女に悲しういはれたる、かうの殿だにさたところ召せ、この女めさたがといふべきゆゑはと、たゞ腹立ちに腹立てば、聞く人どもえ心得ざりけり。さても如何なる事をせられて、かくはいふぞと問へば、聞き給へよ申さん、かやうの事は誰もおなじ心に守殿にも申し給へ、君達の名だてにもありといひて、ありのまよの事を語りければ、さてくといひて笑ふ者もあり、にくがる者もおほかり。女をば皆いとほしがり、やさしがりけり。この事を爲家聞きて、前に呼びて問ひければ、我うれへ成りにたりと喜びて、ことごとくしく伸びあがりていひければ、能く聞きて後、その男をば追ひ出してけり。女をばいとほしがりて、物取らせなどしけり。心から身を失ひける男とぞ。

○今昔二十八、  
三條中納言食水  
飯前參照  
三條中納言朝  
成にて父は定方  
おしからだちて  
押し強いのこ  
と

三條中納言水飯の事

今は昔、三條中納言といふ人ありけり、三條右大臣の御子なり。才賢くて、唐土の事この世の事みな知り給へり。心ばへ賢く肝ふとく、おしからだちてなんおはしける。又笙の笛をなん極めて吹き給ひける。長高く大にふとりてなんおはしける。ふとりのあまりせめて苦しきまで肥え給ひければ、薬師重秀を呼びて、かくいみじうふとるをばいかとせんとする、立居などするが身の重く、いみじう苦しきなりとの給へば、重秀申すやう、冬は湯づけ夏は水づけにて、物をめすべきなりと申しけり。そのまよにめしけれど、唯同じやうに肥えふとり給ひければ、せんかたなくて、又重秀を召して、言ひしまよにすれどその驗もなし、水飯喰ひて見せんとの給ひて、男ども召すに、侍一人参りたれば、例のやうに、水飯して持て來といはれければ、暫しばかりありて、御臺持て参るを見れば、御臺かたよそひ持て來て御前に据ゑつ。御臺に箸の臺ばかり据ゑたり。續きて御盤

かたよそひの  
物の一方  
御盤一食

御まかなひ給  
仕人  
すしあゆみ酢に  
つけて押したる  
鮎  
あせくく一不  
詳、今昔「おほ  
く」に作る  
御物一食物

やくとめすとも  
一投として食ふ  
とも

捧けて参る。御まかなひの臺に据うるを見れば、御盤に白き干瓜、三寸ばかりに切りて十ばかり盛りたり。又すしあゆみのおせくくにひろらかなるが、尻頭ばかりおして三十ばかり盛りたり。大なる金碗を具したり。皆御臺にとり据ゑたり。今一人の侍、大なる銀の提に銀の匙をたてて、重たけに持て参りたり。中納言、金碗をとりて侍に賜ひて、これに盛れとの給へば、侍かひに御物をすくひつと、高やかに盛り上げて、側に水を少し入れて参らせたり。殿臺を引き寄せ給ひて、金碗を取らせ給へるに、さばかり大におはする殿の御手に大なる金碗かなと見ゆるは、けしうはあらぬ程なるべし。干瓜三切ばかりに喰ひ切りて、五つ六つばかり参りぬ。次に鮎を二切ばかりに喰ひ切りて、五つ六つばかり安らかに参りぬ。次に水飯を引き寄せて、二度ばかり箸を廻し給ふと見る程に、食物皆失せぬ。またとてさしたまはず。さて二三度に提の物みななれば、又提に入れて持てまゐる。重秀これを見て、水飯をやくとめすとも、このぢやうに食さば、更に御ふとりなほるべきにあらずとて、逃けていにけり。さればいよく相撲などのやうにてぞお

○今昔十九、檢  
非違使忠明、清  
水值敷存命斷參  
照

はしける。

檢非違使忠明の事

これも今は昔、忠明といふ檢非違使ありけり。それが若かりける時、清水の橋の許にて、京童どもいさかひをしけり。京童手ごとに刀を抜きて、忠明を立ち籠めて殺さんとしければ、忠明も太刀を抜いて御堂さまに上るに、御堂の東のつまにも、數多立ちて向ひあひたれば、内へ逃けて、郡のもとを脇にはさみて、前の谷へをどりおつ。郡風にしぶかれて、谷の底に、鳥の居るやうにやをら落ちにければ、それより逃げていにけり。京童ども谷を見おろして、あさましがり立ちなみて見けれども、すべきやうもなくして止みにけりとなん。

○今昔十六、參  
長谷男依觀音助  
得富語參照

長谷寺參籠の男利生にあづかる事

ひじに死なん  
— 飢死せん

今は昔、父母も主もなく、妻も子もなくして唯一人ある青侍ありけり。すべき方もなかりければ、觀音助け給へとて、長谷に參りて御前にうつぶし伏して申しけるやう。この世にかくてあるべくは、やがてこの御前にてひじに死なん、もし又おのづからなる便もあるべくは、そのよしの夢を見ざらんかぎりは、出づまじとてうつぶし伏したりけるを、寺の僧見て、こはいかなる者のかくては候ふぞ、物くふ所も見えず、かくうつぶしうつぶしたれば、寺の爲けがらひ出で來て、大事になりなん、誰を師にはしたるぞ、何所にてか物は喰ふなど問ひければ、かく便なきものは、師もいかでか侍らん、物賜はる所もなく、あはれと申す人もなければ、佛の賜はん物をたべて、佛を師と頼み奉りて候ふなりと答へければ、寺の僧ども集りて、此事いと不便のことなり、寺のために悪しかりなん、觀音をかこち申す人にこそあんなれ、これ集りて養ひて候はせんとて、かはるがはる物を喰はせければ、もて來る物を喰ひつよ、御前を立ち去らず候ひける程に、三七日になりけり。三七日はてて、明けんとする夜の夢に、御帳より人の出でて、この男

あるにもあらず  
一覺えず

ふめきて一ブン  
ブンと飛びぬぐ  
るさまなり

前世の罪の報をば知らで、観音をかこち申して、かくて候ふこといと怪しきことなり、さはあれども申す事のいとほしければ、聊の事はからひ給はりぬ、まづ速に罷り出でよ、罷り出でんに、何にもあれ手に當らん物を取りて、棄てずして持ちたれ、疾くく罷り出でよと追はるよと見て、匍ひ起きて約束の僧のがり行きて、物をうち喰ひて罷り出でける程に、大門にて蹴躓きてうつぶしに倒れにけり。起きあがりたるに、あるにもあらず手に握られたる物を見れば、薬やぐさといふもの唯一筋握られたり。佛の賜ふ物にてあるにやあらんと、いとほかなく思へども、佛の計らはせ給ふやうあらんと思ひて、これを手まさぐりにしつゝ行く程に、蛇へび一つふめきて顔のめぐりにあるを、うるさければ、木の枝を折りて拂ひ棄つれども、猶唯同じやうにうるさくふめきければ、捕へて腰をこの薬すぢにて引き括りて、枝のさきにつけて持たりければ、腰を括られて、外へはえいかでふめき飛びまはりけるを、長谷はせに参りける女車の、前の簾すだれをうち被かぶきて居たる兒こゝろの、いとうつくしけなるが、あの男の持ちたる物は何ぞ、かれ乞ひて我に賜べと、馬に乗りて

はたご馬一旅行  
用の物をつけた  
る馬  
ほとくしきさま  
ま一死になんな  
んとするをいふ

供にある侍にいひければ、その侍その持ちたるもの、若君の召すに参らせよといひければ、佛の賜たまびたる物に候へど、かく仰せ事候へば、参らせ候はんとて取らせたりければ、この男いと哀なる男なり、若君のめす物を、易く参らせたる事といひて、大柑子だいかんじを、これ喉乾のどかわくらんたべよとて、三ついと香かほしき、檀紙たんしに包みて取らせたりければ、侍取り傳へて取らす。薬一筋が大柑子三つになりぬる事と思ひて、木の枝に結むすひつけて、肩にうち掛けて行く程に、由縁よしづかある人の忍びて参るよと見えて、侍など數多あまた具して、徒かちより参る女房の歩み困こまじて、唯立ただてりに立てり居たるが、喉のどの乾けば水飲ませよとて、消え入るやうにすれば、供の人々手まどひをして、近く水やあると、走り騒さわぎ覺おぼむれど水もなし。こはいかどせんずる、御はたご馬にや、もしあると問へば、遙とほに後れたりと見えす、ほとくしきさまに見ゆれば、誠に騒さわぎ感あひてしあつかふを見て、喉乾のどかわきて騒さわぐ人よと見ければ、やはら歩み寄りたるに、こよなる男こそ水のあり所は知りたらめ、この邊近く水の清き所やあると問ひければ、この四五町が内には清き水候はじ、如何なる

目を見あけて一  
氣絶したるが漸  
く目を開きて

事の候ふにかと問ひければ、歩み困こぜさせ給ひて、御喉の乾かせ給ひて水ほしがらせ給ふに、水のなきが大事なれば、尋ねぬるぞといひければ、不便ふびんに候ふ御事かな、水の所は遠くて、汲みて参らば程経候ひなん、これはいかどとて、包みたる柑子を三つながら取らせたりければ、喜び騒ぎて喰はせたりければ、それを喰ひてやうく目を見あけて、こはいかなりつる事ぞといふ。御喉乾かせ給ひて、水飲ませよと仰せられつるまよに、御殿籠り入らせ給ひつれば、水覚もめ候ひつれども、清き水の候はざりつるに、此所こに候ふ男の思ひかけぬに、その心を得て、この柑子を三つ奉りたりつれば、参らせたるなりといふに、この女、我はさは喉乾きて絶え入りたりけるにこそありけれ、水飲ませよといひつるばかりは覺ゆれど、その後の事はつゆ覺えず、この柑子えざらましかば、この野中にて消え入りなまし、嬉しかりける男かな、この男いまだあるかと問へば、彼所かに候ふと申す。その男暫しあれといへ、いみじからん事ありとも、絶え入りはてなば、かひなくてこそやみなまし、男の嬉しと思ふばかりの事は、かゝる旅にてはいかどせんずる

かはご馬一皮箱  
をつけたる馬

夫ども一人夫ど

むち一布帛を若  
干の袋に詰した  
るを一卷にせる  
を敷ふる語

ぞ、食物くものは持ちて來たるか、喰はせて遣れといへば、あの男暫し候へ、御はたご馬など参りたらんに、物など喰ひてまかれといへば、承りぬとて居たる程に、はたご馬、かはご馬など來つきたり。なかく遙に後れては参るぞ、御はたご馬などは、常に先立つこそよけれ、頓とんの事などもあるに、かく後ろよは善き事かはなどいひて、やがて幔ま引き疊など敷きて、水遠かんなれど、困こぜさせ給ひたれば、めしものは此所こにて参らすべきなりとて、夫ども遣りなどして、水汲ませ食物し出したれば、この男に清けにして喰はせたり。物をくふくありつる柑子何にかならんずらん、観音計らはせ給ふ事なれば、よも空しくてはやまじと思ひ居たる程に、白くよき布を三おむら取り出でて、これあの男に取らせよ、此柑子のよろこびは、言ひ盡すべき方もなければ、かゝる旅の道にては、嬉しと思ふばかりの事はいかどせん、これは唯志のはじめを見するなり、京のおはしまし所はそこくになん、必ず参れ、この柑子のよろこびをばせんずるぞといひて、布三反ぬののみ取らせられたれば、喜びて布を取りて、薬一筋が布三反になりぬる事と思ひて、脇わきに挟みて

千貫がけ一錢千貫かけたる馬

罷る程に、其日は暮れにけり。道つらなる人の家に留りて、明けぬれば、鳥と共に起きて行く程に、日さしあがりて、辰の時ばかりに、えもいはずよき馬に乗りたる人、この馬を愛しつと、道も行きやらすふるまはする程に、誠にえもいはぬ馬かな、これをぞ千貫がけなどは云ふにやあらんと見る程に、この馬俄に倒れて、唯死にに死ぬれば、主我にもあらぬ氣色にて、下りて立ち居たり。手感ひして、従者共も鞍おろしなどして、いかどせんするといへども、かひなく死にはてぬれば、手を打ちあさましがり泣きぬばかりに思ひたれど、すべき方なくて、あやしの馬のあるに乗りぬ。かくて此所にありともすべきやうもなし、我はいなん、これともかくもして引き隠せとて、下種男を一人留めていぬれば、この男見て、この馬我馬にならんとて死ぬるにこそあめれ、薬一筋が柑子三つになりぬ、柑子三つが布三反になりたり、この布の馬になるべきなめりと思ひて、歩み寄りて、この下種男にいふやう、こはいかなりつる馬ぞと問ひければ、陸奥國よりえさせ給へる馬なり、萬の人のほしがりて、價も限らず買はんと申しつるをも、

長谷の御方一長谷の觀音の方

惜みて放ち給はずして、今日かく死ぬれば、その價少分をも取らせ給はずなりぬ、おのれも皮をだに剥がばやと思へど、旅にてはいかどすべきと思ひて、守り立ちて侍るなりといひければ、そのことなり、いみじき御馬かなと見侍りつるに、はかなくかく死ぬる事、命ある者はあさましき事なり、誠に旅にては、皮剥ぎ給ひたりとも、え乾し給はまじ、おのれはこの邊に侍れば、皮剥ぎて使ひ侍らん、えさせておはしねと、この布一反取らせたれば、男思はずなる所得したりと思ひて、思ひ返すとや思ふらん、布を取るまに、見だにも返らず走り去ぬ。男よくやりはてて後、手播き洗ひて、長谷の御方に向ひて、この馬を生けて賜はらんと念じ居たる程に、この馬目を見あくるまよに、頭をもたけて起きんとしければ、やはら手をかけて起しぬ、嬉しき事かぎりなし。後れて來る人もぞある、又ありつる男もぞ來るなど危く覺えければ、やうくかくれの方に引き入れて、時移るまでやすめて、もとのやうに心地もなりにければ、人の許に引きてゆきて、その布一反して、轡やあやしの鞍に代へて馬に乗りぬ。京さまにのほる程に、宇治わた



かはりぎぬ一代  
朝にて、此朝は  
金のかはり朝  
を用ひたるなり

りにて日暮れにければ、その夜は人の許に泊りて、今一反の布して、馬の草我食物などに代へて、その夜は泊りて、翌朝いと疾く京さまに上りければ、九條邊なる人の家に、物へ往かんずるやうにて立ち騒ぐ所あり。この馬京に率て行きたらんに、見知りたる人ありて、盗みたるかなと言はれんもよしなし、やはらこれを賣りてばやと思ひて、かやうの所に馬など用なる物ぞかして、下り走りてよりて、若し馬などや買はせ給ふと問ひければ、馬がなと思ひける程に、この馬を見て、いかどせんと騒ぎて、只今かはりぎぬなどはなきを、この鳥羽の田や米などには代へてんやと言ひければ、なか／＼きぬよりは第一の事なりと思ひて、絹や錢などこそ用には侍れ、おのれは旅なれば、田ならば何にかはせんずると思ひ給ふれど、馬の御用あるべくは、唯仰せにこそ隨はめといへば、此馬に乗り試み馳せなどして、唯思ひつるさまなりといひて、この鳥羽の近き田三町、稻少し米など取らせて、やがてこの家を預けて、おのれ若し命ありて歸り上りたらば、その時返しえさせ給へ、上らざらん限はかくて居給へれ、若し又命絶えてなくもなりな

風の吹きつくる  
やうに風の物  
を吹き寄するや  
うに徳のつくこ  
と

○今昔二十四、  
小野宮大饗九條  
大臣得打衣語書  
照  
小野宮一實類

ば、やがて我家にして居給へ、子も侍らねば、とかく申す人も侍らじといひて、預けてやがて下りにければ、その家に入り居て、得たりける米稻など取り置きて、唯一人なりけれど、食物ありければ、傍その邊なりける下種など出でてきて、使はれなどして、唯ありつき居つきにけり。二月ばかりの事なりければ、その得たりける田を、半分は人に作らせ、今半分は我料に作らせたりけるが、人の方のもよけれども、それは世の常にて、おのれが分とて作りたるは、殊の外多く出で來たりければ、稻多く蒔り置きて、それよりうちはじめ、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき徳人にてぞありける。その家あるじも音せずなりにければ、その家も我物にして、子孫など出で來て、殊の外に榮えたりけるとか。

小野宮大饗の事附西宮殿富小路大臣等大饗の事

今は昔、小野宮殿の大饗に、九條殿の御贈物にし給ひたりける女の装束に、添へられた

九條殿—師範  
細長—女服の名  
御前—侍者

西宮殿—高明  
尊者—大饗の時  
の客人の上座の  
ものをいふ  
庭の拜—尊者門  
に入れば主客の  
間に挨拶の禮を  
をいふ

りける紅の打ちたる細長を、心なかりける御前の取りはづして、遺水に落し入れたりけるを、即ち取り上げて打ち振ひければ、水は走りて乾きにけり。その濡れたりける方の袖の、つゆ水に濡れたるとも見えで、同じやうに打目などもありける。昔は打ちたる物は、かやうになんありける。又西宮殿の大饗に、小野宮殿を尊者におはせよとありければ、年若い腰痛くて、庭の拜えすまじければ、えまうづまじきを、雨降らば庭の拜もあるまじければ参りなん、降らずばえなん参るまじきと、御返事のありければ、雨降るべきよし、いみじく祈り給ひけり。その験にやありけん、その日になりてわざとはなくて、空曇り渡りて雨そよぎければ、小野宮殿は、脇より上りておはしけり。中島に大に木高き松一本立てりけり。その松を見と見る人、藤のかよりたらしかばとのみ見つゝ言ひければ、この大饗の日は正月の事なれども、藤の花いみじくをかしく作りて、松の梢より隙なうかけられたるが、時ならぬものはすさまじきに、これは空の曇りて雨のそほふるに、いみじくめでたうをかしう見ゆ。池の面に影の移りて風の吹けば、水の上も一つ



富小路の大臣一  
時平の男願忠  
しつちひ一装束  
などをいふ

八き一四尺の上  
に出づるをすと  
いふ、四尺八寸  
なり  
かいかみ髪一額  
髪を掻き籠め編  
みあげしなるべ  
し  
こゝはと見ゆる  
所なく一こゝは  
わろしといふ所  
なく

に靡きたる、誠に藤波といふことは、これを云ふにやあらんとぞ見えける。後の日富小路の大臣の大變に、御家のあやしくて、所々のしつらひもわりなく構へてありければ、人々も見苦しき大變かなと思ひたりけるに、日暮れて事やうくはて方になるに、引出物の時になりて、東の廊の前にひきたる幕の内に、引出物の馬を引き立ててありけるが、幕の中ながら嘶きたりける聲、空を響かしけるを、人々いみじき馬の聲かなと聞きける程に、幕柱を蹴折りて、口取を引きさけて出で来るを見れば、黒栗毛なる馬の、長八きあまりばかりなる、ひらに見ゆるまで身太く肥えたる、かいかみ髪なれば、額の十五月のやうにて白く見えければ、見て譽め罵りける聲、かしがましきまでなん聞えける。馬のふるまひおもだち、尻ざし足つきなどの、こゝはと見ゆる所なくつきくしかりければ、家のしつらひの見苦しかりつるも、消えてめでたうなんありける。さて世の末までも語り傳ふるなりけり。

参られよ一「参  
らせよ」の眼か  
参られり一「参  
らせり」の眼か  
いたつき一熊の  
さきを平にした  
る種古箭  
三手一矢一雙を  
一手といふ 三  
手は六本

式成源滿則員等三人瀧口弓藝の事

これも今は昔、鳥羽院位の御時、白河院の武者所の中に、宮道式成、源滿、則員、殊に的弓の上手なりと當時きこえありて、鳥羽の院位の御時の瀧口に、三人ながら召されぬ。こゝろみあるに、大かた一度もはづさず、これをもてなし興せさせ給ふ。或時三尺五寸の的を賜びて、これが第二の黒目、射落して持て参られよと仰せあり。巳の時に賜はりて、未の時に射落して参られり。いたつき三人の中に三手なり。矢とりて、矢取の歸らんを待たば程經ぬべしとて、残の輩我と矢を走り立ちてとりくして、立ち代りく射るほどに、未の時のなからばかりに、第二の黒目を射廻らして、射落して持て参れりけり。これ既に養由がごとしと、時の人譽めのよしりけるとか。

宇治拾遺物語 卷第八

大膳大夫以長前駈問ふ事

これも今は昔、橘大膳亮大夫以長といふ藏人の五位ありけり。法勝寺千僧供養に、烏羽院御幸ありけるに、宇治左大臣参り給ひけり。前に公卿の車行きけり、後より左府参り給ひければ、車を抑へてありければ、御前の隨身下りて通りけり、それにこの以長一人下りざりけり。如何なる事にかと見るほどに、歸らせ給ひぬ。さて歸らせ給ひて、如何なることぞ、公卿逢ひて禮節して車を抑へたれば、御前の隨身皆下りたるに、未練の者こそあらめ、以長下りざりつるはと仰せらる。以長申すやう、こは如何なる仰せにか候ふらん、禮節と申し候ふは、前に罷る人後より御出なり候はば、車を遣りかへして、御車に迎ひて牛をかけはづして、櫛に梘を置きて通し参らするをこそ禮節とは申し候ふに、さきに

宇治左大臣一頼  
千僧供養一千人  
の僧に齋食を與  
ふる佛事  
御前一前驅

梘一牛の頸の所  
にかくる櫛の横  
木



抑へて一差控へ

行く人車を抑へ候ふとも、後を向けて参らせて通し参らするは、禮節にては候はで、無禮を致すに候ふところ見えつれば、さらん人には、なんでふおり候はんずるぞと思ひて、下り候はざりつるに候ふ、誤りてさも候はど、うち寄せて一言まうさばやと思ひ候ひつれども、以長年老い候ひにたれば、抑へて候ひつるに候ふと申しければ、左大臣殿、いさこの事いかどあるべからんとて、あの御方にかゝる事こそ候へ、如何に候はんずる事ぞと申させ給ひければ、以長ふるさぶらひに似けりとぞ仰せ事あり。昔はかきはづして、榻をば轎の中におりんずるやうに置きけり、これぞ禮節にてあなるとぞ。

下野武正大風雨の日法性寺殿にまゐる事

法性寺殿一圓白  
忠通  
あかかう一赤香  
にて赤に黄色を

これも今は昔、下野武正といふ舍人は法性寺殿に候ひけり。ある折大風大雨ふりて、京中の家皆毀れ破れけるに、殿下近衛殿におはしましけるに、南面の方に言る者の聲しけり。誰ならんと思召して見せ給ふに、武正あかかうのかみしもに笠笠を著て、笠の上に繩

帯びたる染色  
かみしも一直垂  
の上下なり  
鹿杖一其の頭の  
楯木形せるもの

を帯にして、楯笠の上を、又願に繩にてからけつけて、鹿杖をつきて走りまはりて行ふなりけり。大かたその姿夥しく似るべきものなし。殿南面へ出でて御簾より御覽するに、あさましく思召して、御馬をなんたびける。

信濃國聖の事

○赤香山縁起及  
び今昔十一參照

今は昔、信濃國に法師ありけり。さる田舎にて法師になりければ、まだ受戒もせで、いかで京に上りて、東大寺といふ所にて受戒せんと思ひて、とかくして上りて受戒してけり。さて本の國へ歸らんと思ひけれどもよしなし。さる無佛世界のやうなる所に歸らじ、此所に居なんと思ふ心つきて、東大寺の佛の御前に候ひて、何處に發行して、長閑に住みぬべき所あると、萬の所を見廻しけるに、坤の方に當りて山かすかに見ゆ。そこに行ひて往まんと思ひて行きて、山の中にえもいはず行ひて過す程に、すどろに小さやかなる厨子佛を行ひ出したり、毘沙門にてぞおはしましける。其所に小き堂を建てて据

ふつつきき一貫  
欲なら

ふ奉りて、えもいはず行ひて年月経るほどに、この山の麓にいみじき下種徳人ありけり。そこに聖の鉢は常に飛び行きつゝ、物が入りて来けり。大なる校倉のあるをあけて物取り出す程に、この鉢飛びて例の物乞ひに來たりけるを、例の鉢來にたり、ゆよしくふくつけき鉢よとて、取りて倉の隅へ投げ置きて、頓に物も入れざりければ、鉢は待ち居たりける程に、物ども認めはてて、この鉢を忘れて、物も入れず取りも出さず、倉の戸をさして主歸りぬる程に、とばしりありて、この倉すゞろにゆさくゆさくとゆるぐ。いかにいかにと見騒ぐ程に、震ぎくゝて土より一尺ばかり震ぎあがる時に、こは如何なる事ぞと怪しがりて騒ぐ。まことにありつる鉢をわすれて、取り出でずなりぬる、それがしわざにやなどいふ程に、この鉢倉より洩り出でて、この鉢に倉乗りて、たゞのほりに空ざまに一二丈ばかり登る。さて飛び行く程に、人々見罵りあざみ騒ぎあひたり。倉の主も更にすべきやうもなければ、この倉のいかん所を見んとて、後に立ちて行く、その邊の人人も皆走りけり。さて見れば、やうく飛びて、河内國にこの聖の行ふ山の中に飛び行

初はしく一多忙  
に紛れ

きて、聖の坊の傍にどうと落ちぬ。いとどあさましと思ひて、さりとてあるべきならねば、この倉主聖の許に寄りて申すやう、かゝるあさましき事なん候ふ、この鉢の常にまうで来れば、物入れつゝ參らするを、今日紛はしく候ひつる程に、倉にうち置きて忘れて、取りも出さずで錠を鎖して候ひければ、この倉唯震ぎに震ぎて、此所になん飛びてまうで落ちて候ふ、この倉返し賜ひ候はんと申す時に、誠に怪しき事なれど、飛びて來にければ、倉はえ返し取らせじ、此所にかやうの物もなきに、おのづから物をも置かんによし、中ならんものはさながら取れとの給へば、主のいふやう、いかにしてか忽には運びとり返さん、千石積み候ふなりといへば、それはいと易き事なり、樋に我運びて取らせんとて、この鉢に一俵を入れて飛ばすれば、雁などの續きたるやうに残りの俵ども續きたる、群雀などのやうに飛び續きたるを見るに、いとどあさましく尊ければ、主のいふやう、暫し皆なつかはしそ、米二三百石は留めて使はせ給へといへば、聖あるまじき事なり、それこゝに置きては何にかはせんといへば、唯使はせ給ふばかり、十二十をも

僧貫一 大和國生駒郡にあり、河内志紀といふ所あるより混同せしにや

奉らんといへば、さまでも入るべき事のあらばこそとて、主の家に慥に皆おちるにけり。かやうに尊く行ひて過す程に、その頃延喜の帝重く煩はせ給ひて、様々の御祈禱ども御修法御讀經など萬にせらるれど、更にえ慰らせ給はず。或人の申すやう、河内の國信貴と申す所に、この年比行ひて、里へ出づる事もせぬ聖候ふなり、それこそいみじく尊ぐ驗ありて鉢を飛ばし、さて居ながら萬あり難き事をし候ふなれ、それを召して祈禱せさせ給はば、慰らせ給ひなんかしと申せば、さらばとて、藏人を御使にてめしに遣はす。往きて見るに、聖のさま殊に尊くめでたし。かうく宣旨にて召すなり、疾くく参るべきよしへば、聖何しに召すぞとて、更に動きけもなければ、かうく御惱大事におはします、祈禱参らせ給へといへば、それは参らずとも、此所ながら祈り参らせ候はんといふ。さてもし慰らせおはしましたりとも、いかでか聖の驗とは知るべきといへば、それが誰が驗といふ事知らせ給はずとも、御心地だに慰らせ給ひなばよく候ひなんといへば、藏人さるにても、いかでか數多の御祈の中にも、其驗と見えんこそよからめといふに、

護法一 神佛に仕ふる天童

山階寺一 興福寺まうれんこらん

さらば祈り参らせんに、劔の護法を参らせん、おのづから御夢にも幻にも御覽せば、さては知らせ給へ、劔を編みつゝ衣にきたる護法なり、我は更に京へはえ出でじといへば、敕使歸り参りてかうくと申すほどに、三日といふ晝つ方、ちとまどろませ給ふともなきに、さらくとある物の見えければ、如何なる物にかとて御覽すれば、あの聖のいひけん劔の護法なりと思召すより、御心地さわくとなりて、聊か心苦しき御事もなく、例ざまにならせたまひぬ。人々喜びて、聖を尊がりめであひたり。帝も限なく尊く思召して、人をつかはして、僧正僧都にやなるべき、又その寺に庄などや寄すべきと仰せつかはす。聖うけ給はりて、僧都僧正更に候ふまじき事なり、又かゝる所に庄など寄りぬれば、別常なにくれなど出で来て、なかくむつかしく罪得がましく候ふ、唯かくて候はんとて止みにけり。かゝるほどに、この聖の姉ぞ一人ありける。この聖受戒せんとてのほりしまゝ見えず、かうまで年比見えぬはいかになりぬるやらん、覺束なきに尋ねて見んとてのほりて、東大寺山階寺の邊をまうれんこらんといふ人やあると尋ねれど、知

命運又は明細  
小院

ふくたい一不  
群、僧服の一種  
なるべし  
かみぎぬ一紙

らすとのみいひて、知りたるといふ人なし。尋ね侘びて、如何にせん、これが行方聞き  
てこそ歸らめと思ひて、その夜東大寺の大佛の御前にて、このまうれんが在處教へ給へ  
と夜一夜申して、うちまどろみたる夢に、この佛仰せらるゝやう、尋ぬる僧のあり所は、  
これより未申ひつじまの方に山あり、その山に雲たなびきたる所を歩き尋ねよと、仰せらるゝと  
見て覺めければ、曉方になりけり。いつしか疾く夜の明けよかしと思ひて見居たれ  
ば、ほのくくと明方になりぬ。未申の方を見遣りければ、山かすかに見ゆるに、紫の雲  
たなびきたり。嬉しくてそなたをさして行きたれば、誠に堂などありと見ゆる所へ寄り  
て、まうれんころんやいまするといへば、誰ぞとて出でて見れば、信濃なりし我姉なり。  
こは如何にして尋ねましたるぞ、思ひかけずといへば、ありつる有様を語る。さていか  
に寒くておはしつらん、これを著せ奉らんとて、持たりつる物なりとて、引き出でたる  
を見れば、ふくたいといふものを、なべてにも似ず太き糸して、厚々と細に強けにした  
るを持て來たり。喜びて取りて著たり。もとはかみぎぬ一重をぞ著たりける。さてい

やれく一破れ  
破れ

と寒かりけるに、これを下に著たりければ、暖かにてよかりけり。さて多くの年ごろ行ひ  
けり。さてこの姉の尼君も、もとの國へ歸らず留まり居て、其所に行ひてぞありける。  
さて多くの年比としごみこのふくたいをのみ著て行ひければ、終にはやれくくと著なしてありけ  
り。鉢に乗りて來たりし倉を飛倉とぞいひける。その倉にぞ、ふくたいのやれなどはを  
さめてまだあなる。そのやれの端を露ばかりなど、おのづから縁にふれて得たる人は  
まもりにしけり。その倉も朽ち破れていまだあなり。その木の端を、露ばかり得たる  
人はまもりにし、毘沙門を作り奉りて持ちたる人は、必ず徳つかぬはなかりけり。され  
ば聞く人縁を尋ねて、その倉の木の端をば買ひ取りけり。さて信貴とて、えもいはず驗  
ある所にて、今に人々明暮まるる。この毘沙門は、まうれん聖の行ひ出し奉りけるとか。

○今昔十四、橋  
敏行發願從冥途  
返請參照

敏行朝臣の事

これも今は昔、敏行といふ歌よみは手を能く書きければ、是彼がいふに隨ひて、法華經



しかく一然り  
然り  
うれへ一断

を二百部ばかり書き奉りたりけり。かゝるほどに俄に死にけり。我は死ぬるぞとも思はぬに、俄にからめて引きはりて出で行くは、我ばかりの人をおほやけと申すとも、かくせさせ給ふべきか、心得ぬわざかなと思ひて、からめて行く人に、これは如何なる事ぞ何事のあやまちにより、かくばかりのめをば見るぞと問へば、いさ我は知らず、慥に召して來と仰せを承りて率て參るなり、そこは法華經や書き奉りたると問へば、しかく書き奉りたりといへば、我ためにはいくらか書きたると問へば、我ためとも侍らず、唯人の書かすれば、二百部ばかり書きたるらんと覺ゆるといへば、その事のうれへ出で來て、沙汰のあらんするにこそあめれとばかり言ひて、又他事もいはで行くほどに、あさましく人の向ふべくもなく、恐しといへば愚なるものの、眼を見れば、電光のやうにひらめき、口はほむらなどのやうに恐しき氣色したる軍の鎧冑著て、えもいはぬ馬に乗り續きて二百人ばかり逢ひたり。見るに、肝惑ひ倒れ伏しぬべき心地すれども、我にもあらず引き立てられて行く。さてこの軍は先立ちていぬ。我からめて行く人に、あれは如何な

我も心も及ばず  
！今昔に「我心  
も及ばず」とあ  
り

る軍ぞと問へば、え知らぬか、これこそ汝に經誦へて書かせたるものどもの、その功德によりて、天にも生れ極樂にも參り、又人に生れかへるとも、よき身とも生るべかりしが、汝がその經書き奉るとて、魚をも喰ひ女にも觸れて、清まはる事もなくて、心をば女の許に置いて書き奉りたれば、その功德のかなはずして、かくいかう猛き身に生れて、汝を妬がりて、呼びて給はらん、その讎報せんとうれへ申せば、この度は道理にて召さるべき度にあらねども、この愁によりて召さるゝなりといふに、身も切るゝやうに心もしみこほりて、これを聞くに死ぬべき心地す。さて我をばいかにせんとて、かくは申すぞと問へば、おろかにも問ふかな、その持ちたりける太刀刀にて、汝が身はまづ二百に斬り裂きて、各一切づつ取りてんとす、その二百の切に、汝が心も切れて、切ごとに心のありて、責められんに隨ひて、悲しく侘しきめを見んずるぞかし、堪へがたき事譬へん方あらんやといふ。さてその事をば、如何にしてか助かるべきといへば、更に我も心も及ばず、まして助かるべき力はあるべきにあらずと言ふに、あゆむそらなし。又行けば

川にて一川とな  
りて  
心よく一心の  
きよくの眼なる  
べし

よろしき罪一替  
通の罪の鏡

くびかし一首伽

大なる川あり、その水を見れば、濃く摺りたる墨の色にて流れたり。怪しき水の色かなと見て、これは如何なる水なれば墨の色なるぞと問へば、知らずや、これこそ汝が書き奉りたる法華經の墨の、かく流るよよといふ。それはいかなればかく川にて流るよよと問ふに、心よく誠をいたして清く書き奉りたる經は、さながら王宮にをさめられぬ。汝が書き奉りたるやうに、心穢く身汚はしうて書き奉りたる經は、廣き野邊に棄て置きたれば、その墨の雨にぬれてかく川にて流るよなり、この川は、汝が書き奉りたる經の墨の川なりといふに、いとど恐しともおろかなり。さてもこの事は、如何してか助かるべきことある、教へて助け給へと泣くくいへば、いとほしけれども、よろしき罪ならばこそは、助かるべきかたをもかまへめ、これは心も及び、口にても述べべきやうもなき罪なれば、いかどせんといふに、ともかくも言ふべき方なうて往く程に恐しけなるもの走りあひて、遅く率て參ると誠めいへば、それを聞きて、先立てて率て參りぬ。大なる門にわがやうに引きはられ、又くびかしなどいふ物をはけられて、ゆひからめられて、

土もふまれず！  
愁しさに足も地  
につかず  
四卷經一金光  
經をいふ

堪へ難けなるめども見たる者どもの、數もしらず十方より出で來たり。集りて門に所なく入り充ちたり。門より見入るれば、逢ひたりつる軍ども、目を瞋かし舌なめづりをして、我を見つけて、疾く率て來かしと思ひたる氣色にて、立ちさまよふを見るに、いとど土もふまれず。さてもくいかに侍らんと云へば、そのひかへたるもの、四卷經書き奉らんといふ願をおこせと密にいへば、今門入るほどに、この答は四卷經書き供養して、贖はんといふ願をおこしつ。さて入りて、廳の前に引き据ゑつ。事沙汰する人、かれは敏行かと問へば、さに侍りと、この附きたるもの答ふ。愁どもしきりなるものを、など遅くは參りつるぞといへば、即ち挿りたるまよ、滯りなく率て參りて候ふといふ。娑婆世界にて何事かせしと問はるれば、仕りたることもなし、人のあつらへに隨ひて、法華經を二百部書き奉りて侍りつると答ふ。それを聞きて、汝はもと受けたる所の命は、今暫くあるべけれども、その經書き奉りし事の穢はしく、清からで書きたるうれへの出で來てからめられぬるなり、速にうれへ申す者どもに出し賜びて、彼等が思の儘にせさ

帳一帳簿

今はとする時  
今は帳面つき  
とする時

手をねぶりつる  
一手に睡して符  
も受けたる

すべきなりとある時に、ありつる軍ども、喜べる氣色にて請け取らんとする時、わなよ  
くわなよと四巻經書き供養せんと申す願の候ふを、其事をなんいまだ遂げ候はぬに、召  
されさぶらひぬれば、此罪重く、いとど諍ふ方候はぬなりと申せば、此沙汰する人聞  
き驚きて、さることやはある、誠ならば不便なりけることかな、帳を引き見て見よといへ  
ば、又人大なる文を取り出でて、引くく見るに、我せし事どもを一事も落さず記しつ  
けたる中に、罪の事のみありて、功德の事一つもなし。此門入りつる程に、おこしつる  
願なれば、奥のはてに記されにけり。文ひきはてて、今はとする時に、さる事はべり、  
この奥にこそ記されて侍れと申し上げければ、さてはいと不便の事なり、この度の暇を  
ば免したびて、この願遂げさせて、ともかくもあるべき事なりと定められければ、この  
目をいからかして、我を疾く得んと、手をねぶりつる軍ども失せにけり。儘に娑婆世界  
にかへりて、その願必ず遂げさせよとて、免さるよと思ふ程に生き返りにけり。妻子泣  
き合ひてありける二日といふに、夢の覺めたる心地して、目を見あけたりければ、生き返

勘へられつる事  
一勘問せられし  
事

日比經頃過ぎて  
一頃の上は月の  
字脱か

けしやう一語想

紀友則云々一古  
今集哀備一藤原  
敏行身まかりけ  
る時によみてか  
の家につかはし  
ける紀友則、ね  
ても見ゆねでも  
見てけり大かた  
はうつせみの世  
ぞ愛にはありけ  
る

りたりとて、喜びて湯飲ませなどするに、さは我は死にたりけるにこそありけれと心得  
て、勘へられつる事ども、ありつる有様、願を起してその力にて免されつる事など、明な  
る鏡に向ひたらんやうに覺えければ、いつしか我力つきて、きよまはりて心清く、四巻  
經供養し奉らんと思ひけり。やうく日比經頃過ぎて、例の様に心地もなりにければ、  
いつしか四巻經書き奉るべき紙、經師にうちつがせ、鐫かけさせて書き奉らんと思ひけ  
るが、猶もとの心の色めかしう、經佛の方に心の至らざりければ、この女の許に行き、  
あの女けしやうし、いかでよき歌詠まんなど思ひける程に、暇なくてはかなく年月過ぎ  
て、經をも書き奉らで、この受けたりける齡限にやなりにけん、遂に失せにけり。其後  
一二年ばかり隔てて、紀友則といふ歌よみの夢に見えけるやう、この敏行と思しき者に  
逢ひたれば、敏行とは思へども、容貌警ふべき方もなく、あさましく恐しうゆよしけに  
て、現にも語りし事をいひて、四巻經書き奉らんといふ願によりて、暫間の命を助けて  
返されたりしかども、猶心のおろか怠りて、その經を書かずして終に亡せにし罪により

心のおろか  
「心のおろか」  
の誤か

哀なる事あるか  
「哀なる事あるか」  
の誤か

て 醫ふべき方もなき苦みを受けてなんあるを、若し哀と思ひ給はど、その料の紙はいまだあるらん、その紙尋ね取りて、三井寺に某といふ僧にあつらへて、書き供養せさせたまへといひて、大なる聲をあけて泣き叫ぶと見て、汗水になりて驚きて、明くるや遅きとその料紙尋ね取りて、やがて三井寺に行きて、夢に見えつる僧の許へ行きたれば、僧見つけて、嬉しきことかな、只今人を参らせん、自らにても参りて申さんと思ふ事もありつるに、かくおはしましたる事の嬉しさといへば、まづ我見つる夢をばかたらで、何事ぞと問へば、今宵の夢に故敏行朝臣の見え給へるなり、四巻經書き奉るべかりしを、心の怠にえ書き供養し奉らずなりにし、その罪によりて、極まりたる苦みを受くるを、その料紙は、御前の許になん、その紙尋ね取りて四巻經書き供養し奉れ、事のやうは御前に問ひ奉れとありつる、大なる聲を放ちて叫び泣き給ふと見つると語るに、哀なる事おろかならず。さし向ひてさめくと二人泣きて、我もしかなく夢を見て、その紙を尋ね取りて、こゝに持ちて侍りといひて取らするに、いみじうあはれがりて、この僧誠を

いたして、手づから自から書き供養し奉りて後、又二人が夢に、この功德によりて、堪へ難き苦み少し免れたるよし、心地よけにて、容貌も初には變りてよかりけりとなん見ける。

東大寺華嚴會の事

○今昔卷十二、  
於東大寺行花嚴  
會語及び古事談  
卷三參照

本願の上皇一聖  
武天皇の御本願  
にて東大寺は建  
立したる也

これも今は昔、東大寺に恒例の大法會あり、華嚴會とぞいふ。大佛殿の内に高座を立てて、講師のほりて、堂の後よりかいけつやうにして逃けて出づるなり。古老傳へていはく、御堂建立のはじめ、鯖賣る翁來たる、こゝに本願の上皇、めし留めて大會の講師とす。賣る所の鯖を經机におく、變じて八十華嚴經となる。即ち講説の間梵語をさへづる。法會の中間に、高座にして忽に失せ終りぬ。又いはく、鯖を賣る翁杖を持ちて鯖をになふ。その鯖の數八十、即ち變じて八十華嚴經となる。件の杖の木、大佛殿の内東回廊の前に突き立つ。忽に枝葉をなす、これ白樺の木なり、今伽藍の榮え衰へんとするに隨ひて、

平家の炎上―治承四年重衡の焼きたるをさす

○今昔二十、愛宕山聖人被説野猪語参照

日比の覺東なま―久しく來たらざれば氣にかかりて覺東なく思ひ居たること

この木榮え枯るといふ。かの會の講師この頃までも、中間に高座より下りて後、戸よりかいつつやうにして出づる事、これをまなぶなり。かの鯖の杖の木、三十四年がさきまでは、葉は青くて榮えたり。その後猶枯木にて立てりしが、この度平家の炎上に焼け終りぬ、世の末ぞかしと口惜しかりけり。

獵師佛を射る事

昔愛宕の山に久しく行ふ聖ありけり。年比行ひて坊を出づることなし。西の方に獵師あり、この聖を尊みて、常にはまうでて物奉りなどしけり。久しく參らざりければ、餌袋に干飯など入れてまうでたり。聖よろこびて、日比の覺東なまなどの給ふ。その中に居寄りての給ふやうは、この程はいみじく尊きことあり、この年比他念なく、經を保ち奉りてあるしるしやらん、この夜比普賢菩薩象に乗りて見え給ふ、今宵留りて拜み給へといひければ、この獵師、世に尊き事にこそ候ふなれ、さらばとまりて拜み奉らんとて留

見奉る事―原本「見奉りつる事」とあり、一本に「よりて改む」

いかゞは―いかゞは拜み奉らざらんをい―感歎の辭

りぬ。さて聖の使ふ童のあるに問ふ、聖の給ふやう、いかなる事ぞや。おのれもこの佛をば拜みまらせたりやと問へば、童は五六度ぞ見奉りて候ふといふに、獵師われも見奉る事もやあるとて、聖の後にいねもせずして起き居たり。九月二十日の事なれば夜も長し、今や―と待つに、夜半過ぎぬらんと思ふ程に、東の山の嶺より月の出づるやうに見えて、嶺の嵐もすさまじきに、この坊の内、光さし入りたるやうにて明くなりぬ。見れば普賢菩薩白象に乗りて、やう―おはして坊の前に立ち給へり。聖なく―拜みて、いかに主殿は拜み奉るやといひければ、いかゞは、此童も拜み奉る、をい―いみじうたふととして、獵師思ふやう、聖は年比經をも保ち讀み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ、この童我身などは、經の向きたる方も知らぬに、見え給へる心得られぬことなりと、心のうちに思ひて、この事試みてん、これ罪得べき事にあらずと思ひて、尖矢を弓につがひて、聖の拜み入りたる上よりさしこして、弓を強く引きてひやうと射たりければ、御胸の程にあたるやうにて、火をうち消す如くにて光も失せぬ。谷へとどろめ



射密し射こる  
しと圖むべきか

○今昔十三、陽  
勝修行成仙人  
語參照

ほこ木―高欄の  
柱の牙の如く立  
てるをいふ

きて逃げ行く音す。聖これはいかにし給へるぞといひて、泣き感ふ事かぎりなし。男申しけるは、聖の目にこそ見え給はめ、我罪深き者の目に見え給へば、試み奉らんと思ひて射つるなり、誠の佛ならば、よも矢は立ち給はじ、されば怪しきものなりといひけり。夜明けて、血をとめて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に大なる狸、胸より尖矢を射通されて死にて伏せりけり。聖なれど無智なれば、かやうに化されけるなり。獵師なれども、慮おもんばかりありければ狸を射害し、そのばけたるをあらはしけるなり。

### 千手院僧正仙人に逢ふ事

昔、山の西塔千手院に住み給うける靜觀僧正じやうくわんそうじやうと申しける座主、夜更けて、尊勝陀羅尼そんしょうたらにを終夜見て明して、年比としごひになり給ひぬ。聞く人もいみじくたふとみけり。陽勝仙人と申す仙人、空を飛びてこの坊の上を過ぎけるが、この陀羅尼の聲を聞きて、下りて高欄たかねのほこ木の上に居給ひぬ。僧正怪しと思ひて問ひ給ひければ、蚊かの聲のやうなる聲して、

陽勝仙人にて候ふなり、空を過ぎ候ひつるが、尊勝陀羅尼の聲を承りて、参り侍るなりとの給ひければ、戸を開けて請しやうぜられければ、飛び入りて前に居給ひぬ。年比の物語して、今は罷りなんとて立ちけるが、人けにおされて、え立たざりければ、香かう爐の煙を近く寄せ給へとの給ひければ、僧正香爐を近くさし寄せ給ひける、その煙に乗りて空へ上りにけり。この僧正は年を経て、香爐をさしあけて、煙を立ててぞおはしける。この仙人はもと使ひ給ひける僧の、行ひして失せにけるを、年比あやしと思しけるに、かくして参りたりければ、あはれくと思してぞ、常に泣き給ひける。

宇治拾遺物語 卷第九

瀧口道則術を習ふ事

昔、陽成院位にておはしましける時、瀧口道則宣旨をうけ給はり、陸奥へ下る間、信濃國ひくうといふ所に宿りぬ。郡の司に宿をとれり。まうけしてもてなして後、あるじの郡司は郎等らうとうひき具して出でぬ。寝もねられざりければ、やはら起きて佇みありくに、見れば屏風を立てまはして、疊など清けに敷き、火燈かとうして萬よろづめやすきやうにしつらひたり。そらだきものするやらんと、かうばしき香しけり。いよく心にくと覺えて、よく覗きて見れば、年二十七八ばかりなる女一人ありけり。みめ事がら、姿有様殊にいみじかりけるが、唯一人臥したり。見るまよに、唯あるべき心地せず、あたりに人もなし。火は几帳の外そとに燈してあれば明あかくあり。さてこの道則思ふやう、世によく懇切けんせつにもてな

○今昔二十、陽成院御代瀧口金使行督外術語參照

ひくう一信濃伊那郡なる有良(イガラ)の觀なるべし

世にく一非常に

男のまへ—陽物  
くるめく—探偵  
する

して、志ありつる郡司の妻を、後めたなき心つかはん事いとほしけれど、この人の有様を見るに、たゞあらん事かなはじと思ひて、寄りて傍に臥すに、女けにくよも驚かず、口おほひをして笑ひ臥したり。言はん方なく嬉しく覺えければ、長月十日頃なれば、衣も數多著す、一襲ばかり男も女も著たり、香しき事かぎりなし。我衣をば脱ぎて、女の懷へ入るに、暫しは引き塞ぐやうにしけれども、あながちにけにくからず懷に入れぬ。男のまへのかゆきやうなりければ、探りて見るに物なし。驚き怪みてよくく探れども、願の鬚を探るやうにてすべて跡かたなし。大きに驚きて、この女のめでたけなるもわすられぬ。この男探りてあやしみくるめくに、女少しほとゑみてありければ、いよく心得ずおほえて、やはら起きて、我寢所へ歸りて探るに更になし。あさましくなりて、近く使ふ郎等を呼びて、かゝるとはいはで、こよにめでたき女あり、我も行きたりつるなりといへば、喜びてこの男いぬれば、暫しありて、世にくあさましけにて、この男出で来たれば、これもさるなめりと思ひて、又他男を勸めて遣りつ。これも又暫しあり

ありつる宿云々  
—前夜泊りたる  
宿に拾仕せし郎  
等

出で來ぬ。空を仰ぎて世に心得ぬ氣色にて歸りてけり。かくの如く七八人まで郎等を遣るに、同じけしきに見ゆ。かくするほどに、夜も更けぬれば、道則思ふやう、宵にあるじのいみじうもてなしつるを、嬉しと思ひつれども、かく心得ずあさましき事あれば、疾く出でんと思ひて、いまだ明けはてざるに急ぎて出づれば、七八町行くほどに、後よりよばひて馬を馳せて來る者あり。走りつきて、白き紙につよみたる物をさしあけてもて來。馬を扣へて待てば、ありつる宿に通ひしつる郎等なり。これは何ぞと問へば、これ郡司の參らせよと候ふ物にて候ふ、かゝる物をばいかで棄ててはおはし候ふぞ、かたの如く御まうけして候へども、御いそぎにこれをさへ落させ給ひてけり、されば拾ひ集めて參らせ候ふといへば、いで何ぞとて取りて見れば、松茸を包み集めたるやうにてあるもの九つあり。あさましく覺えて、八人の郎等どももあやしみをなして見るに、誠に九つのものであり、一度にさつと失せぬ。さて使はやがて馬を馳せて歸りぬ。その折我身より始めて、郎等ども皆ありくといひけり。さて奥州にて金請け取りて歸る時、又信濃



金馬鷲の羽一共に  
奥州の名産

さがたく一進  
れがたく

のありし郡司の許へ行きて宿りぬ。さて郡司に金馬鷲の羽など多く取らす。郡司よに  
よに喜びて、これはいかに思はせてかくぞはふし給と言ひければ、近く寄りていふやう、片  
腹痛き申し事なれども、初めこれに参りて候ひし時、怪しき事の候ひしは如何なる事にか  
といふに、郡司物を多く得てありければ、さがたく思ひて、ありのまゝにいふ。それ  
は若く候ひし時、この國のおくの郡に候ひし郡司の年よりて候ひしが、妻の若く候ひし  
に、忍びて罷りよりて候ひしかば、かくの如く失ひてありしに、怪しく思ひて、その郡  
司に、懇切に志を盡して習ひて候ふなり、若し習はんと思召さば、この度は公の御使な  
り、速に上り給ひて、又わざと下り給ひて、習ひ給へといひければ、その契をなして上  
りて、金など参らせて、又暇を申して下りぬ。郡司にさるべき物など持ちて下りて、取  
らすれば、郡司大に喜びて、心の及ばん限は教へんと思ひて、これはおほろけの心にて、  
習ふ事にては候はず、七日水をあみ精進をして、習ふ事なりといふ。そのまゝに清まは  
りて、その日になりて、唯二人連れて深き山に入りぬ。大なる河の流るゝ邊に行きて、

標々の事共を  
今昔比下に  
ての二字あり

かく口惜しき事  
かな一かくては  
口惜しき事かな  
の意か  
やを一八尺の眼  
寫か  
いぢかして一  
怒らして

様々の事共をえもいはす罪深き誓言ども立てさせけり。その郡司は水上へ入りぬ。そ  
の川上より流れこんものを、いかにもく鬼にてもあれ何にてもあれ、抱けといひて行  
きぬ。暫しばかりありて、水上の方より雨降り風吹きて、暗くなり水まさる。暫しあり  
て、川上より頭一抱ばかりなる大蛇の、目は金碗を入れたるやうにて、背は青く紺青を  
塗りたるやうに、頸の下は紅のやうにて見ゆるに、まづ來ん物を抱けと言ひつれども、  
せん方なく恐しくて草の中にふしぬ。暫しありて郡司來たりて、如何に取り給ひつやと  
いひければ、かうく覺えつれば、取らぬなりと言ひければ、かく口惜しき事かな、さ  
てはこの事はえ習ひ給はじといひて、今一度試みんといひて又入りぬ。暫しばかりあり  
て、やをばかりなる猪の出で來て、石をはらくと碎けば、火きらくと出づ。毛をい  
らよかして走りてかよる。せん方なく恐しけれども、これをさへと思ひきりて、走り寄  
りて抱きて見れば、朽木の三尺ばかりあるを抱きたり、妬く悔しき事かぎりなし。初め  
のもかよる物にてこそありけれ、なか抱かざりけんと思ふ程に、郡司きたりぬ。如何に

あらがひをして  
一術の成否を評  
論して後

と問へば、かうくといひければ、前の物失ひ給ふ事は、先習ひ給はずなりぬ、さて他  
事のはかなきものを、二物になす事は習ひぬめり、さればそれを教へんとて、教へられて  
歸り上りぬ。口惜しき事かぎりなし。大内に参りて、瀧口どものはきたる沓どもを、あ  
らがひをして、皆犬の子になして走らせ、古き薬杵を三尺ばかりなる鯉になして、臺盤  
の上に躍らす事などをしけり。帝このよしを聞召して、黒戸の方に召して習はせ給ひ  
けり。御几帳の上より、賀茂祭などわたし給ひけり。

寶志和尚影の事

寶志和尚一宋人  
影一畫像

昔、唐土に寶志和尚といふ聖あり。いみじく尊くおはしければ、帝かの聖の姿を影に書  
き留めんとて、繪師三人を遣はして、若し一人しては書き違ふる事もありとて、三人し  
て面々に寫すべきよし仰せ含められて遣はさせ給ふに、三人の繪師聖の許へ参りて、か  
く宜旨を蒙りてまうでたるよし申しければ、暫しといひて、法服の裝束して出で合ひ給

聖觀音一左手腕  
に當りて未開の  
蓮華をとり右手  
胸に當りて花鬘  
を開かんとする  
姿勢をなせり

へるを、三人の繪師各書くべき絹を廣げて、三人並びて筆を下さんとするに、聖、しばらく  
我誠の影あり、それを見て書き寫すべしとありければ、繪師左右なく書かずして、聖  
の御影を見れば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右へ引き退けてあるより、  
金色の菩薩の顔をさし出でたり。一人の繪師は十一面觀音と見る、一人の繪師は聖觀音  
と拜み奉りけり。各見るまよに寫し奉りて、持ちて参りたりければ、帝驚き給ひて、別  
の使を給ひて問はせ給ふに、かいけつやうにして失せ給ひぬ。それよりぞ、凡人にては  
おはせざりけりと申しあへりける。

越前敦賀の女觀音助け給ふ事

○今昔十六、越  
前國敦賀女觀  
音利益顯照

越前の國に、敦賀といふ所に住みける人ありけり。とかくして、身一つばかり侘しから  
ですぐしけり。女一人より外に又子もなかりければ、この女をぞまたなきものになし  
くしける。この女を、我あらん折たのもしく見置かんとて、男あはせけれど、男もたま

男もたまらざり  
ければ一男もそ  
を妻として居つ

かぞ家出するを  
いふ  
知る所一領地

いふばかりに！  
くふばかりにの  
思ひしかひあり  
て一今昔には  
「思ひあきてし  
驗ありて」とあ  
り

らざりければ、これやくと四五人まではあはせけれども、猶たまらざりければ、おもひわびて後にはあはせざりけり。居たる家の後に堂を建てて、この女助け給へとて、観音を据ゑ奉りける。供養し奉りなどして、幾何も経ぬほどに父うせにけり。それだに思ひ歎くに、引き續くやうに母も失せにければ、泣き悲めどもいふかひもなし。知る所などもなくて、構へて世を過しければ、孀なる女一人あらんには、いかにしてはかしくしきことあらん。親の物の少しありける程は、使はるゝ者四五人ありけれども、物失せはててければ、使はるゝ者一人もなかりけり。物喰ふ事難くなりなどして、おのづから求め出でたる折は、手づからいふばかりにして喰ひては、我親の思ひしかひありて助け給へと、観音に向ひ奉りて、泣くく申し居たる程に、夢に見るやう、この後の堂より老いたる僧の來て、いみじういとほしければ、男あはせんと思ひて呼びに遣りたれば、明日ぞ此所に來着かんする、それが言はん隨ひて、あるべきなりとの給ふと見て覺めぬ。此佛の助け給ふべきなめりと思ひて、水うちあみて、參りて泣くく申して、夢を頼み

うちはきなどし  
て一掃除などナ  
るをいふ  
あるべかしき事  
一相應に整頓せ  
る事  
速にみよ一速に  
入りて居よ

皮子蕨を乞ひて  
一乞ひては從者  
に請求する也  
今昔には「主人  
皮子つくみたる  
蕨を敷皮に重ね  
て敷きて」とあ  
り

て、その人を待つとて、うちはきなどして居たり。家は大きに造りたりければ、親うせて後は住みつきあるべかしき事なけれど、家ばかりは大きなりければ、片隅にぞ居たりける。敷くべき蕨だになかりけり。かゝる程にその日の夕方になりて、馬の足音どもして數多入り來るに、人ども覗きなどするを見れば、旅人の宿借るなりけり。速にるよといへば、皆入り來て、こよよかりけり、家ひろし、いかにぞやなど、物いふべき主人もなくて、我まよにも宿り居るかなと言ひあひたり。覗きて見れば、主人は三十ばかりなる男のいと清けなる也。郎等二三十人ばかりある、下種など取り具して七八十人ばかりあらんとぞ見ゆる。唯居に居るに、蕨疊を取らせばやと思へども、恥しと思ひて居たるに、皮子蕨を乞ひて、皮に重ねて敷きて、幕引き廻して居ぬ。そとめくほどに、日も暮れぬれども物喰ふとも見えぬは、物の無きにやあらんとぞ見ゆる。物あらば取らせてまじと思ひ居たる程に、夜うち更けて、この旅人のけはひにて、このおはします人寄せ給へ、物申さんといへば、何事にか侍らんとてるざり寄りたるを、何のさはりもなければ、ふと入

露違ふ所一以前の妻に違ふ所

衣も著せ置き一今昔には一衣も

り来て控へつ。こはいかにといへど、言はずべくもなきに合せて、夢に見し事もありしかば、とかく思ひいふべきにもあらず。この男は、美濃國に猛將ありけり、それが獨子にて、その親うせにければ、萬の物受け傳へて、親にも劣らぬ者にてありけるが、思ひける妻に後れて、やもめにてありけるを、此彼聲こんかへりこに取らん妻にならんといふ者數多あまたありけれども、ありし妻に似たらん人をも思ひて、やもめにて過しけるが、若狭に沙汰すべき事ありて行くなりけり。晝宿り居るほどに、片隅かたすみに居たる所も、何のかくれもなかりければ、如何なる者の居たるぞと覗きて見るに、唯ありし妻のありけると覺えければ、目もくれ心も騒ぎて、いつしか疾く暮れよかし、近からん氣色も試みんとて入り來たるなりけり。物うち言ひたるより始め、露違ふ所なかりければ、あさましくかよりける事もありけりとて、若狭へと思ひ立たざらましかば、この人を見ましやはと、嬉しき旅にぞありける。若狭にも十日ばかりあるべかりけれども、この人の心めたさに、明けば行き又の日歸るべきぞと、返すく契り置きて、寒けなりければ衣も著せ置き、郎等四五人

著せ置きて越えにけり一とあり

御厨子所一臺所よき男して一よき夫をもちて

御覽じ知れぬは一御覽じ知られぬはの意

ばかり、それが従者など取り具して、二十人ばかりの人のあるに、物喰はずべきやうなく、馬に草喰はずべきやうもなかりければ、如何にせましと思ひ歎きける程に、親の御厨子くしこ所に使ひける女の、娘のありとばかりは聞きけれども、來通ふ事もなくて、よき男して、事かなひてありとばかりは聞き渡りけるが、思ひもかけぬに來たりけるが、誰にかあらんと思ひて、如何なる人の來たるぞと問ひければ、あなこよろうや、御覽じ知れぬは我身の咎にこそさぶらへ、おのれは故上こづかみのおはしましよをり、御厨子所仕り候ひし者の娘に候ふ、年比いかで參らんなど思ひて過ぎ候ふを、今日は萬を捨てて參り候ひつるなり、かく便たよりなくおはしますとならば、怪しくともるて候ふ所にもおはしまし通ひて、四五日づつもおはしませかし、志は思ひ奉れども、他所よそながらは明暮とぶらひ奉らん事も、おろかなるやうに思はれ奉りぬべければなど、細々こまこまとかたらひて、この候ふ人々は如何なる人ぞと問へば、こよに宿りたる人の若狭へとて往ぬるが、明日こよへ歸りつかんずれば、その程とてこのある者どもを留め置きていぬるに、これにも喰ふべき物は具せ

しりあつかひ奉  
るべき一應待す  
べき  
わざと一特に

ざりけり、こよにも喰はずべき物もなきに、日は高くなれば、いとほしと思へども、す  
べきやうもなく居たるなりと言へば、しりあつかひ奉るべき人にやおはしますらんと  
いへば、わざとさは思はねど、こよに宿りたらん人の物喰はでるたらんを、見過さんも  
うたてあるべう、又思ひ放つべきやうもなき人にてあるなりと言へば、さていと易き事  
なり、今日しもかしこく参り候ひにけり、さらば罷りて、さるべきやうにて参らんとて  
立ちていぬ。いとほしかりつる事を、思ひかけぬ人の來て、たのもしけに言ひて往ぬる  
は、とかく唯觀音の導かせ給ふなめりと思ひて、いとど手をすりて念じ奉るほどに、即  
ち物ども持たせて來たりければ、食物どもなど多かり、馬の草まで拵へ持ちて來たり、  
言ふ限なく嬉しとおほゆ。此人々もて饗應し、物喰はせ酒飲ませはてて入り來たれば、こ  
はいかに、我親の生き返りおはしたるなめり、とにかくにあさましくて、すべき方な  
く、いとほしかりつる恥を隠し給へる事といひて、喜び泣きければ、女も打泣きていふや  
う、年比としなもいかでかおはしますらんと申う給へながら、世の中過し候ふ人は、心と違ふ

やうにて過ぎ候ひつるを、今日かよる折に参りあひて、いかでか疎おろかには思ひ参らせん、  
若狭へ越え給ひにけん人は、何時か歸り著き給はんど、御供人はいくらばかり候ふと問  
へば、いざ誠にやあらん、明日の夕さり此所にくべかなる、供にはこのある者ども具  
して、七八十人ばかりぞありしといへば、扱はその御まうけこそ仕るべかなれといへ  
ば、これだに思ひかけず嬉しきに、さまではいかどあらんといふ。いかなる事なりとも、  
今よりはいかでか仕らであらんするとて、たのもしく言ひ置きていぬ。この人々の、夕さ  
りつとめての食物まで沙汰し置きたり。覺えなくあさましきまよには、唯觀音を念じ奉  
る程にその日も暮れぬ。またの日になりて、このある者ども、今日は殿おはしますんず  
らんかしと待ちたるに、申まをの時ばかりにぞ著きたる。著きたるや遅きと、この女、物ど  
も多く持たせて來て申しのよすれば、ものたのもし。この男いつしか入り來て、覺束な  
かりつる事などいひふしたり。あかつきはやがて具して行くべきよしなどいふ。如  
何なるべき事にかなど思へども、佛の唯まかせられてあれと、夢に見えさせ給ひしを頼

この世ならざ  
二世かけて  
踊りて人の云々  
一偶然人の見る  
にも  
さそふ水あちば  
云々古今集小  
野小町「わびぬ  
れば身を浮草の  
ねをたえてさそ  
ふ水あちばいな  
んとぞあもふ」  
明日は知らねど  
一今後の善悪は  
知らねど

みて、ともかくも言ふに随ひてあり。この女、曉立たんまうけなどもしにやりて、急ぎくるめくがいとほしければ、何がな取らせんと思へども、取らすべきものなし。おのづから入る事もやあるとて、紅なる生絹の袴すてしの袴ぞ一つあるを、これを取らせてんと思ひて、我は男のぬぎたる生絹の袴を著て、この女を呼び寄せて、年比としひはさる人あらんとだに知らざりつるに、思ひもかけぬ折しも來合きあひて、恥がましかりぬべかりつる事を、隠しつることの、この世ならず嬉しきも、何につけてか知らせんと思へば、志ばかりに、これをとて取らすれば、あな心うや、誤りて人の見奉らせ給ふに、御さまなども心愛く侍れば、奉らんとこそ思ひ給ふるに、こは何しにか賜はらんとて取らぬを、この年比もさそふ水あらばと思ひ渡りつるに、思ひもかけず、具して往いなんとなこの人のいへば、明日は知らねども、随ひなんずれば、記念かたみともし給へとて猶取らすれば、御志のほどは、返す返すも疎かたみには思ひ給ふまじけれども、記念かたみなど仰せらるゝが辱ければとて、取りなんとするをも、程なき所なれば、この男聞きふしたり。鳥鳴きぬれば、急ぎ立ちて、この女

閉て納め一室の  
扉を閉て  
横目する事なく  
一他に心を移さ  
ず夫婦中よく

のしおきたる物喰ひなどして、馬に鞍置き引き出して、載せんとする程に、人の命知らねば、又拜み奉らぬやうもぞあるとて、旅装束しながら手洗ひて、後の堂うしろに参りて、観音を拜み奉らんとて見奉るに、観音の御肩に赤き物かよりたり。怪しと思ひて見れば、この女に取らせし袴なりけり。こはいかに、この女と思ひつるは、さはこの観音のせさせ給ふなりけりと思ふに、涙の雨あめと降りて、忍ぶとすれどふしまろび泣く氣色を、男聞きつけて、怪しと思ひて走り來て、何事ぞと問ふに、泣くさまおほろけならず。いかなる事のあるぞとて見廻すに、観音の御肩に赤き袴かよりたり。これを見るに、いかなる事にかあらんとて、有様を問へば、此女の思ひもかけず來て、しつる有様を細かに語りて、それを取らすと思ひつる袴の、この観音の御肩にかよりたるぞと、言ひもやらず聲を立てて泣けば、男も空そら寝して聞きしに、女に取らせつる袴にこそあなれと思ふが、悲しくて同じやうに泣く。郎等どもも、物の心知りたるは手を摺り泣きけり。かくて閉て納め奉りて、美濃へ越えにけり。その後思ひかはして、又横目よこめする事なくて住みけれ

死のわかれ云々  
一死に別れるま  
て捨むとげたり

ば、子ども産みつゞけなどして、この敦賀にも常に來通ひて、觀音に返すく仕うまつりけり。ありし女は、さるものやあるとて、近く遠く尋ねさせけれども、更にさる女なかりけり。それより後、又音づるゝ事もなかりければ、偏にこの觀音のせさせ給へるなりけり。この男女、互に七八十になるまで榮えて、男子女子産みなどして、死のわかれにぞわかれにける。

くうすけが佛供養の事

兵たつる一武勇  
だてする

くうすけといひて、兵たつる法師ありき。親しかりし僧の許にぞありし。その法師の佛を造り、供養し奉らばやと言ひ渡りければ、うち聞く人、佛師に物取らせて造り奉らざるにこそと思ひて、佛師を家に呼びたれば、三尺の佛造り奉らんとするなり、奉らざる物どもはこれなりとて、取り出でて見せければ、佛師よき事と思ひて、取りて往なんとするに、いふやう、佛師に物奉りて遅く造り奉れば、我身も腹だたく思ふ事も出

責めいはれ備  
促せらるる

でて、責めいはれ給ふ佛師もむつかしうなれば、功德つくるもかひなく覺ゆるに、この物どもはいとよき物どもなり、封つけてこよに置き給ひて、やがて佛をも此所にて造り給へ、造り出し奉り給へらん日、皆ながら取りておはすべき也といひければ、佛師うるさき事かなとは思ひけれど、物多く取らせたりければ、言ふまゝに佛造り奉る程に、佛師の許にて造り奉らましかば、其所にてこそは物は參らましか、こよにしまして、物喰はんとやはの給はましとて、物も喰はせざりければ、さる事なりとて、我家にて物うち喰ひては、早朝來て、一日造り奉りて、夜さりは歸りつゝ、日比經て造り奉りて、この得んする物を募りて、人に物を借りて漆塗らせ奉り、箔買ひなどして、えもいはず造り奉らんとす。かく人に物を借るよりは、漆の價の程は先得て、箔も著せ漆塗にも取らせんといひけれども、なかくの給ふぞ、初め皆申し認めたる事にはあらずや、物はむれらかに得たるこそよけれ、細々に得んとの給ふわろき事なりといひて、取らせねば、人に物をば借りたりけり。かくて造りはて奉りて、佛の御眼など入れ奉りて、物得て歸らんと

物を募りて一工  
賃を典物として

むれらかに一  
度にかためて

物して一馳走し

妻まぐ一妻を奪  
する  
やうくをうを  
うーヤア〜チ  
チ

かれ一物のれと  
いふにかなじ、  
輕蔑したる語な  
ねめかけて一け  
ちみつけて

言ひければ、いかにせましと思ひまはして、小女子どもの二人ありけるをば、今日だにこの佛師に物して参らせん、何も取りて來とて出しやりつ。我も又物取りて來んするやうにて、太刀引き佩きて出でにけり。唯妻一人、佛師に向はせて置きたりけり。佛師佛の御眼入れはてて、男の僧歸り來らば、物よく喰ひて、封じつけて置きたりし物ども見て、家に持て行きて、其物はかの事につかはん、かの物は其事につかはんと、仕度し思ひけるほどに、法師こそくとして入り來るまよに、目を瞋して人の妻まぐものあり、やうくをうくと言ひて、太刀を抜きて、佛師を斬らんとて走りかよりければ、佛師頭うちわられぬと思ひて、立ち走り逃げけるを追ひつきて、斬りはづしくつと追ひにがして、いふやうは、ねたきやつをにがしつる、しや頭うちわらんとしつるものを、佛師は必ず人の妻をまきけり、おれ後に逢はざらんやはとて、ねめかけてかへりにければ、佛師逃げ退きて息つきたちて思ふやう、かしこく頭をうちわられずなりぬる、後に逢はざらんやはとねめすばこそ、腹の立つ程かくしつるかとも思はめ。見え逢はど又頭わらん

物借りたりし人  
一物借したり  
し人の語なる  
べし

前一勝部

名簿云々一名列  
を出して敬意を  
表する也

ふみまけて一思  
ひ設けて笑ひて

ともこそいへ、千萬の物命にます物なしと思ひて、物具をだに取らず深く隠れにけり。箔漆の料に物借りたりし人、使をつけて責めければ、佛師とかくして返しけり。かくてくうすけかしこき佛を造り奉りたる、いかで供養し奉らんなどいひてければ、この事を聞きたる人々、笑ふもあり悪むもありけるに、よき日取りて佛供養し奉らんとて、主にも乞ひ知りたる人にも物乞ひ取りて、講師の前人にあつらへさせなどして、その日にたりて、講師呼びければ來にけり。下りて入るに、この法師出で迎ひて、出居をはきて居たり。こはいかにし給ふ事ぞといへば、いかでかく仕らではさぶらはんとて、名簿を書きて取らせたりければ、講師は思ひかけぬ事なりといへば、今日より後は仕うまつらんすれば参らせ候ふなりとて、よき馬を引き出して、他物は候はねば、この馬を御布施に奉り候はんするなりといふ。又鈍色なる衣の、いとよきを包みて取り出して、これは女の奉る御布施なりとて見すれば、講師ふみまけて、よしと思ひたり。まへの物まうけてすゑたり。講師喰はんとするに、いふやう、まづ佛を供養して後、物をめすべきな



心に入れて一隙  
心になりて  
手を摺りて  
「いふやうの上  
に置きて心得べ  
し

御まかり給仕

はしのり前庭

冬そうづ不  
詳、二説に、冬は  
おのれの誤(お  
のれ)の(おの)く  
一各(冬)にて、  
そうづ(御思)は  
講師をさすと  
妻にとび(夢)の  
中にて、富貴に  
なりたりとの譬

りといひければ、さることなりとて高座にのほりぬ。布施よきものどもなりとて、講師  
心に入れてしければ、聞く人もたふとがり、この法師もはらくと泣きけり。講果てて  
鐘うちて高座より下りて物喰はんとするに、法師寄り来ていふやう、手を摺りて、いみじ  
く候ひつるものかな、今日よりは長く頼み参らせんするなり、つかうまつり人となりた  
れば、御まかりに候ふ人は、御さがりたべ候ひなんとて、箸をだに立てさせずして、取  
りて持ちていぬ。これをだに怪しと思ふ程に、馬を引き出して、この馬はしのりに賜は  
り候はんとて、引き返していぬ。衣を取りてくれれば、さりともこれは得させんずらんと  
思ふ程に、冬そうづに給はり候はんとて取りて、さらば歸らせ給へといひければ、夢に  
とびしたるらん心地して出でていにけり。他所によぶありけれど、これはよき馬など布  
施に取らせんとすと、かねて聞きければ、人の呼ぶ所には往かずして、此所に来けると  
ぞ聞きし。かよりともしの功德は得てんや、いかどあるべからん。

白地一かりそめ  
の意

私の者一親類知  
人

恒政が郎等佛供養の事

昔、兵藤大夫恒政といふ者ありき。それは筑前の國山鹿の庄といひし所に住みし。又其  
所に白地に居たる人ありけり。恒政が郎等に、政行とてありし男の佛作り奉りて、供養  
し奉らんとすと聞き渡りて、恒政が居たる方に、物喰ひ酒飲み言るを、こは何事するぞ  
といはすれば、政行といふ者の佛供養し奉らんとて、しうの許にかう仕りたるを、かた  
への郎等どものたべのよしるなり、今日饗百膳ばかりぞつかうまつる、明日そこの御前  
の御料には、恒政やがて具して参るべく候ふなるといへば、佛供養し奉る人は、必ずか  
くやはする、田舎の者は佛供養し奉らんとて、かねて四五日より、かよる事どもをし奉  
るなり、昨日一昨日はおのが私に、里隣私の者ども呼び集めて候ひつるといへば、をか  
しかりつる事かなといひて、明日を待つべきなめりといひて止みぬ。明けぬれば、い  
つしかと待ち居たる程に、恒政出で來にたり。さなめりと思ふ程に、いづら、これ参ら

据う—原本「ナ  
ゆしとあり

せよといふ。さればよと思ふに、さる事はなけれど、高く大きに盛りたる物ども、持て  
来つと据うめり。侍の料とて、あしくもあらぬ饗一二膳ばかりするつ。雑色、女どもの  
料に至るまで、數多く持て來たり。講師の御ころみとて、古代なる物据ゑたり。講師  
には、この旅なる人の具したる僧をせんとしけるなりけり。かくて物喰ひ酒飲みなどす  
る程に、この講師に請ぜられんずる僧のいふやうは、明日の講師とは承れども、その佛  
を供養せんずるぞとこそ承らね、何佛を供養し奉るにかあらん、佛は數多おはします  
なり、承りて説經をもせばやといへば、恒政聞きて、さる事なりとて、政行や候ふとい  
へば、この佛供養し奉らんとする男なるべし、長高くおせぐみたるもの、赤鬚にて五十  
ばかりなる、太刀はき、股ぬきはきて出できたり。此方へ參れといへば、庭中に參りて  
居たるに、恒政、かのまうとは何佛を供養し奉らんずるぞといへば、いかでか知り奉らん  
ずるといふ。こはいかに誰が知るべきぞ、もし他人の供養し奉るを、唯供養の事の限を  
するかと問へば、さも候はず、政行まろが供養し奉るなりといふ。さてはいかでか何佛

かせぐみ—背の  
相みたる  
股ぬき—股實に  
て今の股引なり  
まうと—眞人に  
て、人を敬して  
いふ語

まるがしら—頭

とは知り奉らぬぞといへば、佛師こそは知りて候ふらめといふ。怪しけれど實にさもあ  
らん、この男佛の御名を忘れたるならんと思ひて、その佛師はいづくにかあると問へ  
ば、叙明寺にさぶらふといへば、さては近かなり、呼べといへば、この男歸り入りて  
呼びて來たり。平面なる法師の太りたるが、六十ばかりなるにてあり。物に心得たるら  
んかしと見えたり、いで來て政行に並びて居たるに、この僧は佛師かと問へば、さに候ふ  
といふ。政行が佛や造りたるかと問へば、造り奉りたりといふ。幾頭造り奉りたるぞと問  
へば、五頭造り奉れりといふ。さてそれは何佛を造り奉りたるぞと問へば、え知り候はず  
と答ふ。こはいかに、政行しらすといふ、佛師知らずば誰が知らんぞといへば、佛師は  
いかでか知り候はん、佛師の知るやうは候はずといへば、さは誰が知るべきぞといへば、  
講師の御房こそ知らせ給はめといふ。こはいかにとて、集りて笑ひのよければ、佛師は  
腹立ちて、物の樣體も知らせ給はざりけりと立ちぬ。こは如何なる事ぞとて尋ねれば、  
早うたど佛造り奉れといへば、たどまるがしらにて、齋の神の冠もなきやうなるものを、

五頭きざみ立てて、供養し奉らん講師して、その佛かの佛と名をつけ奉るなりけり。それを問ひ聞きて、をかしかりし中にも、同じ功德にもなればと聞きし、あやしのものどもこそ、かく希有の事どもをし侍りけるなれ。

歌詠みて罪を免るゝ事

今は昔、大隅守なる人、國の政を認め行ひ給ふ間、郡司のしどけなかりければ、召しに遣りて誠めんといひて、先々のやうにしどけなき事ありけるには、罪に任せて重く軽く誠むる事ありければ、一度にあらず、度々しどけなき事あれば、重く誠めんとて召すなりけり。此所に召して率て参りたりと人の申しければ、先々するやうにし伏せて、尻頭にのほり居たる人、楚を設けて、打つべき人まうけて、さきに人ふたり引きはりて、出で來たるを見れば、頭は黒髪もまじらず、いと白く年老いたり。見るに打せん事いとほしく覺えければ、何事につけてかこれを許さんと思ふに、事つくべきことなし。あやま

○今昔二十四、  
大隅國郡司讀和  
歌詠參照  
大隅守一櫻島忠  
信

事つくべきこと  
一托すべき理由



老をがうけ云々  
一葉家にて、老  
年をよき後立て  
として憐愍を乞  
ふ也

しもと一打たる  
る杖と霜とをか  
けていへるなり  
この歌拾遺集に  
見えたり  
なまき！風流の  
意

○今昔十九、大  
安寺別當娘許藏  
人通語參照

ちどもを片端より問ふに、唯老をがうけにていらへ居る。如何にしてこれを許さんと思ひて、おのれはいみじき盗人かな、歌は詠みてんやといへば、はかしくしからず候へども、詠み候ひなんと申しければ、さらば仕れといはれて、程もなくわなよき聲にてうちい出す。

年を経てかしらの雪はつもれどもしもと見るにぞ身はひそにける

といひければ、いみじう哀れがりて、感じて許しけり。人はいかにもなまきはあるべし。

大安寺別當の女に嫁する男夢見る事

今は昔、奈良の大安寺の別當なりける僧の女のもとに、藏人なりける人の忍びて通ふ程に、せめて思はしかりければ、時々晝もとまりけり。或時晝寝したりける夢に、俄にこの家の内に、上下の人とよみて泣き合ひけるを、如何なる事やらんとあやしければ、立ち出でて見れば、舅の僧妻の尼公よりはじめて、ありとある人、皆大なる土器を捧けて

鬼の飲ませんに  
だにも云々鬼  
に飲ませられて  
も飲むべくもな  
き銅の熱湯を飲  
み居るなり  
心と一われとわ  
がでに

泣きけり。いかなればこの土器を捧けて泣くやらんと思ひて、よくく見れば、銅の湯を土器ごとにもれり。うち入りて、鬼の飲ませんにだにも飲むべくもなき湯を、心と泣く泣くのむなりけり。辛くして飲みはてつれば、又乞ひそへて飲む者もあり、下腐に至るまでも飲まぬ者なし。我傍に臥したる君を、女房来て呼ぶ。起きていぬるを、覺束なさにまた見れば、この女も、大なる銀の土器に、銅の湯を一土器入れて、女房取らすれば、この女取りて、細くうたけなる聲をさしあけて泣くくのむ、目鼻より煙くゆり出づ。あさましと見て立てるほどに、又まう人に參らせよといひて、土器を臺に据ゑて女房持て來たり。我もかゝる物を飲まんずるかと思ふに、あさましくて、まどふと思ふほどに夢覺めぬ。驚きて見れば、女房食物を持て來たり。舅の方にも物喰ふ音してののしる。寺の物を喰ふにこそあるらめ、それがかくは見ゆるなりと、ゆよしく心憂く覺えて、女の思はしさも失せぬ。さて心地の悪しきよしをいひて、物を喰はずして出でぬ。その後は、遂にかしこへ行かずなりにけり。

かしづく一愛育  
する  
顔よしといふ  
顔よしといふが

人々しく一なる  
醜男なれど人な  
みに見えしさま  
なり  
ひし／＼一みし  
みしといふ足音  
の形容なり

博打掣入の事

昔、博打の子の年若きが、目鼻一所に取り寄せたるやうにて、世の人にも似ぬありけり、二人の親、これいかにして世にあらせんすると、思ひてありける所に、長者の家にかしづく女のありけるに、顔よからん掣取らんと、母の覚めけるを傳へ聞きて、天の下の顔よしといふ掣にならんと給ふといひければ、長者喜びて、掣に取らんとて日を取りて契りてけり。その夜になりて、装束など人に借りて、月は明かりけれど、顔見えぬやうにもてなして、博打ども集りてありければ、人々しく覺えて心にくと思ふ。さてよるよるいくに、晝寝るべきほどになりぬ。いかどせんと思ひ廻らして、博打一人、長者の家天井に上りて、二人寝たる上の天井を、ひし／＼と踏みならして、嚴めしく恐しけなる聲にて、天の下の顔よしと呼ぶ、家の内の者共、いかなる事ぞと聞き惑ふ。掣いみじくおちて、おのれをこそ世の人天の下の顔よしといふと聞け、いかなる事ならんとい

一こと一言

ナふ／＼一顔を  
吸ふ意にや

ふに、三度まで呼べば答へつ。これはいかに答へつるぞといへば、心にもあらで答へつるなりといふ。鬼のいふやう、この家の女は、我領して三年になりぬるを、汝いかに思ひてかくは通ふぞといふ。さる御事とも知らで通ひ候ひつるなり、唯御助け候へといへば、鬼いと／＼にくき事なり、一ことしてかへらん、汝命とかたちといづれか惜しきといふ。掣いかど答ふべきといふに、舅姑何ぞの御かたちぞ、命だにおはせば、唯かたちをとの給へといへば、教の如くいふに、鬼さらばすふ／＼といふ時に、掣顔をかよへて、あら／＼といひて伏しまろふ、鬼はあよびかへりぬ。さて顔はいかどなりたるらんとて、脂燭をさして人々見れば、目鼻ひとつ所に取り据ゑたるやうなり。掣は泣きて、唯命とこそ申すべかりけれ、かゝるかたちにて世の中においては何かはせん、かゝらざりつるさきに、顔を一度見え奉らで、大方はかく恐しきものに領せられたりける所に、参りける過なりとかこちければ、舅いとほしと思ひて、このかはりには、我持ちたる寶を奉らんといひて、めでたくかしづきければ、嬉しくてぞありける。所の悪しきかとして

別べつによき家を造りて住ませければ、いみじくてぞありける。

宇治拾遺物語 卷第十

伴大納言應天門を焼く事

今は昔、水尾の帝の御時に應天門焼けぬ。人のつけたるになんありける。それを伴善男といふ大納言、これは信まことの左大臣しやうだいじんの所爲しわざなりと、朝廷てうていに申しければ、その大臣おんせいを罪せんとせさせ給ひけるに、忠仁公世の政は、御弟の西三條の右大臣に譲りて、白川に籠り居給へる時にて、この事を聞き驚き給ひて、御烏帽子直垂おんかぶとすぢたれながら、移うつしの馬うまに乗り給ひて、乗りながら北の陣までおはして、御前に参り給ひてこの事申す。人の讒言ざんげんにも侍らん、大事になさせ給ふ事いと異様ことさまの事なり、かゝることは返すくよく糺ただして、實事まこと虚事うそ顯あらわはして、行はせ給ふべきなりと奏し給ひければ、誠にもと思召して糾させ給ふに、一定もなき事なれば、免し給ふよし仰せよとある宣旨承りてぞ、大臣は歸り給ひける。左の大

○三代實錄十三  
參照

水尾の帝一清和天皇  
信の左大臣一賴  
賴帝の皇子  
忠仁公一良房  
西三條の右大臣  
一良相  
移の馬一移鞍を  
置きたる馬  
北の陣一羽平門

日の装束—東帯

臣は過あやまちしたる事もなきに、かゝる横さまの罪に當るを思し歎きて、日の装束して、庭に荒薦あらかこもを敷きて出でて、天道に訴うたへ申し給ひけるに、ゆるし給ふ御使に、頭中將、馬に乗りながら馳せまうでければ、いそぎ罪せらるゝ使ぞと心得て、一家泣なみきのよしるに、免し給ふよし仰せかけて歸りぬれば、又喜び泣きおびたよしかりけり。免されたびたれど、朝廷てんていに仕う奉りては、横さまの罪出で來ぬべかりけりといひて、ことにもとのやうに宮仕もし給はざりけり。此事は過ぎにし秋の頃、右兵衛の舍人なる者、東の七條に住みけるが、府つかさに参りて夜更けて家にかへるとて、應天門の前を通りけるに、人のけはひしてさどめく。廊の腋わきに隠れ立ちて見れば、柱よりかゞりおるゝ者あり、あやしくて見れば伴大納言なり。次に子なる人おる、又次に雜色豊清といふ者おる。何業なにわざしておるゝにかあらんと、つゆ心も得で見ると、この三人おりはつるまゝに走ることかぎりなし。南の朱雀門さまに走りていぬれば、この舍人も家さまに行くほどに、二條堀河のほど行くに、大内の方に火ありとて大路のよしる。見かへりて見れば、内裏のかたと見ゆ。走り

府—兵衛府

かゞり—アザリ  
おるゝこと豊清—豊城の誤  
なるべし

出納—出納役

まうと—眞人  
もれ—もれの

かへりたれば、應天門の半分なつかばかり燃えたるなりけり。このありつる人どもは、この火つくとて上りたりけりなりけりと、心得てあれども、人の極めたる大事なれば、あて口より外ほかに出さず。その後左の大臣のし給へる事とて、罪蒙り給ふべしと言ひ罵る、あはれしたる人のあるものを、いみじきことかなと思へど、言ひ出すべきことならねば、いとほしと思ひありくに、おとど免されぬと聞けば、罪なきことは、終にのがるよものなりけりとなん思ひける。かくて九月ばかりになりぬ。かゝるほどに伴大納言の出納の家の幼せきき子と、舍人が小童と、諍論いさかひをして泣き言れば、出でてとりさへんとするに、この出納同じく出でて見るに、寄りてひき放ちて、我子をば家に入れて、この舍人が子の髪を取りて、うち伏せて死ぬばかり踏む。舍人思ふやう、我子も人の子も共に童いさかひなり、たどさてはあらで、我子をしもかくなさけなく踏むは、いとあしき事なりと腹だたしうて、まうとはいかでなさけなく幼き者をかくはするぞと問へば、出納いふやうおれは何事いふぞ、舍人たつるおればかりのおほやけ人を、我打わがうちたらんに何事のある

がうけ一筆家

べきぞ、我君大納言殿のおはしませば、いみじきあやまちをしたりとも、何事の出で來べきぞ、痴事いふ乞兒かなといふに、舍人大きに腹立ちて、おれは何事いふぞ、我主の大納言をがうけに思ふか、おのが主は我口によりて人にもおはするは知らぬか、わが口あけてはおのが主は人にてはありなんやといひければ、出納は腹立ちさして、家にはひ入りにけり。この評論を見ると、里隣の人市をなして聞きければ、いかにいふ事にかあらんと思ひて、或は妻子に語り、或は次々語り散らして言ひ騒ぎければ、世にひろごりて、朝廷まで聞召して、舍人を召して問はれければ、初めはあらがひけれども、我も罪蒙りぬべくといひければ、ありの件の事を申してけり。その後大納言も問はれなどして、事顯れての後なん流されける。應天門を焼きて、信の大臣におほせて、かの大臣を罪せさせて、一の大納言なれば、大臣にならんと構へけることの、かへりて我身罪せられけん如何にくやしかりけん。

○古事談卷六及び東實隨筆音聲類の部に此話あり  
 已講一僧の職名  
 野行幸一放鷹のため嵯峨野などへ行幸あるをいふ

○古事談卷六及び東實隨筆音聲類

聲達へず云々一調子を合せて聲をあぐる也

放鷹樂明暹に是季がならふ事

これも今は昔、放鷹樂といふ樂をば、明暹已講唯一人習ひ傳へたりけり。白河院野行幸明後日といひけるに、山階寺の三面の僧坊にありけるが、今宵は門なさしそ、尋ぬる人あるらんものかと言ひて待ちけるが、案の如く入り來たる人あり、これを問ふに是季なりといふ。放鷹樂習ひにかといひければ、しかなりと答ふ。即ち坊中に入れて件の樂を傳へけり。

堀河院明暹に笛ふかささせ給ふ事

これも今は昔、堀河院の御時、奈良の僧どもを召して、大般若の御讀經行はれけるに、明暹この中にまゐる、その時に主上御笛を遊はしけるが、やうくくに、調子を代へて吹かせ給ひけるに、明暹調子ごとに聲達へずあけければ、主上あやしみ給ひてこの僧を召





しければ、明暹跪きて庭に候ふ。仰せによりて上りて簀子すのこに候ふに、笛や吹くと問はせおはしましければ、かたの如く仕り候ふと申しければ、さればこそとて、御笛賜びて吹かせられけるに、萬歳樂ばんざいがくをえもいはず吹きたりければ、御感ありて、やがてその笛を賜びてけり。件の笛傳はりて、今八幡別當幸濟やわたが許にありとか。件笛幸濟進上當今、建保三年也

淨藏が八坂坊に強盜入る事

これも今は昔、天曆のころほひ、淨藏じやうざうが八坂やさかの坊に、強盜その數入り亂れたり。しかるに火を燈し、太刀を抜き目を見張りて、各立ちすくみて更にする事なし。かくて數刻を經、夜やうく明けんとする時、こゝに淨藏本尊じやうざうほんそんに啓白けいびやくして、早く免まぬし遣すべしと申しけり。その時に盜人ども、いたづらにて逃げ歸りけるとか。

○古事談卷六參  
照  
天曆一村上天皇  
の年號

淨藏一三善清行  
の子  
いたづらにて一  
空しく

○今廿二十七、  
河内前司牛爲盛  
被借語參照

類一異類

ひづめ一類爪、  
又火爪と書く、  
西淀にあり

いたはり一大切  
にする

播磨守佐大夫が事

今は昔、播磨守公行が子に佐大夫とて、五條わたりにありし者は、此頃ある顯宗といふ者の父なり。その佐大夫は阿波守里成が供に阿波へ下りけるに、道にて死にけり。其佐大夫は河内前司といひし人の類にてぞありける。その河内前司が許に、黄斑なる牛ありけり。その牛を人の借りて、車掛けて淀へ遣りけるに、ひづめの橋にて、牛飼悪しく遣りて、片輪を橋より落したりけるに、引かれて車の橋より下に落ちけるを、車の落つると心得て、牛の踏み廣ごりて立てりければ、鞅切れて車は落ちて碎けにけり。牛は一つ橋の上に留まりてぞありける。人も載らぬ車なりければ、損はるゝ人もなかりけり。えせ牛ならましかば、引かれて落ちて牛も損はれまし、いみじき牛の力かなとて、その邊の人言ひ譽めける。かくてこの牛をいたはり飼ふほどに、この牛如何にして、失せたるといふ事なくて失せにけり。こは如何なる事ぞと、覚めさわけどなし。離れて出でたるか

聞く人は一「聞く人の」とありたし

とて、近くより遠くまで尋ね覚めさすれども、無ければ、いみじかりつる牛を失ひつると歎く程に、河内前司が夢に見るやう、この佐大夫が來たりければ、これは海に落ち入りて死にけると聞く人は、如何に來たるにかと思ひく、出で合ひたりければ、佐大夫がいふやう、我はこの丑寅の隅にあり、それより日に一度、ひづめの橋のもとに罷りて、苦を受け侍るなり、それにおのれが罪の深くて、身の極めて重く侍れば、乗物の堪へずして、かちより罷るが苦しきに、この黄斑の御車牛の力の強くて乗りて侍るに、いみじく覚めさせ給へば、今五日ありて、六日と申さん巳の時ばかりにはかへし奉らん、いたくな覚め給ひそと見て覺めにけり。かゝる夢をこそ見つれといひて過ぎぬ。その夢見つるより六日といふ巳の時ばかりに、そとろにこの牛歩み入りたりけるが、いみじく大事したりけにて、苦しげに舌を垂れ、汗水にてぞ入りたりける。このひづめの橋にて車落ちいり、牛はとまりたりける折などに行き合ひて、力強き牛かなと見て、借りて乗りてありきけるにやありけんと、思ひけるもおそろしかりけりと、河内前司かたりしなり。

○今昔二十六、  
美作國神依禮師  
設止生曾語參照

怪しきをだにも  
三ヶ一ふつうか  
なる子をももる  
そかには思はず

叱り一怒る意  
枕草紙にも「い  
みじう腹立ち叱  
りて」と用ひた

吾孀人生贅を止むる事

今は昔、山陽道美作國に、中山、高野と申す神おはします。高野はくちなは、中山は猿丸にてなんおはする。その神年ごとの祭に、必ず生贅を奉る。人の女の容貌よく、髪長く色しろうく、身なりをかしげに姿らうたけなるをぞ、撰び求めて奉りける。昔より今に至るまで、その祭怠り侍らず。それにある人の女、生贅にさしあてられにけり。親ども泣き悲む事がぎりなし。人の親子となることは、前の世の契なりければ、怪しきをだにもおろかにやはおもふ。まして萬にめでたければ、身にも優りて疎ならず思へども、さりとて逃るべからねば、歎きながら月日を過すほどに、やうく命つとまるを、親子と逢ひ見ん事今幾許ならずと思ふにつけて、日を數へて、明暮は唯ねをのみ泣く。かよるほどに、東の人の狩といふ事をのみ役として、猪といふものの、腹立ち叱りたるはいと恐しきものなり、それをだに何とも思ひたらず、心にまかせて殺し、取り喰ふ事を役と

ものれが女とも  
申さじ一我女た  
るに似ず

するものの、いみじう身の力つよく、心猛くむくつけき荒武者のおのづから出で来て、そのわたりに立ちめぐる程に、この女の父母の許に來にけり。物語するついでに、女の父のいふやう、おのれが女の唯一人侍るをなん、かうくの生贅にさしあてられ侍れば、思ひ暮し歎き明してなん、月日を過しはべる、世にはかよる事も侍りけり、前の世に如何なる罪をつくりて、この國に生れてかよるめを見侍るらん、かの女子も心にもあらず、あさましき死をし侍りなんずるかなと申す。いと哀に悲しう侍るなり、さるはおのれが女とも申さじ、いみじう美しげに侍るなりといへば、東の人さてその人は、今は死に給ひなんずる人にこそはおはすれ、人は命にまさる事なし、身のためにこそ神もおそろしけれ、この度の生贅を出さずして、その女君を自らに預けたぶべし、死に給はんも同じ事にこそおはすれ、いかでか唯一人もち奉り給へらん御女を、目の前に生ながら膾につくり、切り廣げさせて見給はん、ゆよしかるべきことなり、さるめ見給はんも同じ事なり、唯その君を我に預け給へと、懇切にいひければ、實に目の前にゆよしきさまにて、

つらましげは  
イかしげ  
しな／＼しう  
上品に

死なんを見んよりはとて取らせつ。かくて東人、此女の許に行きて見れば、かたちすがたをかしけなり、あいぎやうめでたし。物思ひたる姿にて、寄りふして手習をするに、涙の袖の上にかよりてぬれたり。かよるほどに人のけはひのすれば、髪を顔にふりかくるを見れば、髪も濡れ顔も涙に洗はれて、思ひ入りたるさまなるに、人の來たれば、いとどつよましげに思ひたるけはひして、少しそばむきたる姿、誠にらうたけなり。凡<sup>おほ</sup>けだかくしなくしう、をかしけなる事、田舎人の子といふべからず。東人<sup>あづま</sup>これを見るに、悲しき事いはんかたなし。さればいかにもく我身なくならばなれ、たゞこれに代りなると思ひて、この女の父母にいふやう、思ひ構ふることこそ侍れ、若しこの君の御事によりて滅びなどし給はば、苦しとおほさるべきと問へば、このために、自らはいたづらにもならばなれ、更に苦しからず、生きても何にかはし侍らんずる、唯<sup>ただ</sup>思されんまよに、いかにもくし給へと答ふれば、さらばこの御祭の御きよめするなりとて、しめ引きめぐらして、いかにもく人な寄せ給ひそ、又これにみづから侍りと、な人にゆめく知

やく／＼やく  
の語をらん、即  
ち日々の役とし  
ての意也  
いちなきー太甚  
の意にて、この  
うへなしといふ  
に同じ  
ことぐさー言ひ  
草

らせ給ひそといふ。さて日<sup>ひ</sup>比籠り居て、この女房と思ひ住む事いみじ。かよるほどに、年比<sup>としごら</sup>山に使ひ習はしたる犬の、いみじき中<sup>なか</sup>に賢きを二つえりて、それに生きたる猿丸を捕へて、明暮やく／＼と食ひ殺させて習はず。さらぬだに猿丸と犬とは敵<sup>かたが</sup>なるに、いとかうのみ習はせば、猿を見ては、躍<sup>は</sup>りかよりて食ひ殺す事限なし。さて明暮はいらなき太刀をみがき、刀をとぎ、劔を設けつよ、唯このめの君とことぐさにするやう。あはれ前の世に如何なる契をして、御命に代りていたづらになり侍りなんとすらん、されど御かはりと思へば、命は更に惜しからず、唯別れ聞えなんずと思ひ給ふるが、いと心ほそく哀なるなどいへば、女も誠に如何なる人のかくおはして、思ひ物し給ふにか、と言ひ續けられて、悲しうあはれなることいみじ。さて過ぎ行く程に、その祭の日になりて宮司<sup>みやうじ</sup>よりはじめ、萬の人々こぞり集りて、迎へにのよしり來て、新しき長櫃を、此女の居たる所にさし入れていふやう、例のやうにこれに入れて、その生贄出されよといへば、この東人、唯このたびの事は、自らの申さんまよにし給へとて、この櫃<sup>ひつ</sup>に密<sup>ひそ</sup>に入りふして、左右の

かたがたに波  
につけ是につけ

側かたがたにこの犬どもを取り入れていふやう、おのれらこの日比、いたはり飼ひつるかひありて、この度の我命に代れ、おのれらよといひて、搔き撫つれば、うちうめきて、脇にかいそひて皆伏しぬ。又日比とき磨あきつる太刀、刀、皆取り入れつ。さて櫃の蓋を掩ひて、布してゆひて封つけて、我女わがむすめを入れたれるやうに思はせてさし出したれば、銚、櫛、鈴、鏡を振り合せて、前まへおひ言りて持てまるるさまいといみじ。さて女これを聞くに、我に代りてこの男のかくしていぬるこそいと哀なれと思ふに、又不意ふいに事出でこば、我親たちいかにおはせんと、かたがたに歎き居たり。されども父母のいふやうは、身のためにこそ神も佛も恐しけれ、死ぬる君の事なれば、今は恐しきこともなし、同じ事をかくてをなくなりなん、今は滅びんも苦しからずと言ひ居たり。かくて生贄を御社に持て参り、神主祝詞のぞいみじく申して、神の御前かみまへの戸を開けて、この長櫃をさし入れて、戸をもとのやうにさして、それより外の方に、宮司を始め、次々つぎつぎの司ども次第に皆列び居たり。さる程にこの櫃を刀の先して密ひそに穴を開けて東人見ければ、誠にえもいはず大なる猿の、長

をけ猿一をさ  
(長)猿の頭か、  
今昔には「大猿」とあり  
次々の一活本  
「次第々々」とあり

わものれ一汝

七八尺ばかりなる、顔と尻とは赤くして、むしり綿を著たるやうにいらなく白きが、毛は生ひあがりたるさまにて、横座により居たり。次々の猿ども、左右に二百ばかり並居て、様々に顔を赤くなし、眉を上げ、聲々になき叫びのよしる、いと大なる狙まいたに、長やかなる庖丁ばうぢやう刀を具して置きたり。めぐりには、酢、酒、鹽入りたる瓶どもなめりと見ゆる数多置きたり。さて暫しばかりある程に、此横座に居たるをけ猿寄り来て、長櫃の結緒むすぶを解きて、蓋を開けんとすれば、次々の猿ども皆寄らんとする程に、この男、犬どもに、食へおのれといへば、二つの犬躍り出でて、中に大なる猿を食ひて、打ち伏せて引きはりて、食ひ殺さんとするほどに、この男髪を亂りて櫃より躍り出でて、氷のやうなる刀を抜きて、その猿を俎の上に引き伏せて、首に刀を當てていふやう、わおのれが人の命を絶ち、その肉しむらを食ひなどするものはかくぞある、おのれ等うけたまはれ、慥まことにしやくび斬りて、犬に飼ひてんといへば、顔を赤くなし、目をしばたよきて、齒を眞白ましろに喰ひ出して、目より血の涙を流して、誠にあさましき顔つきして、手を摺り悲め

おのれが身さらば「おのれ神なれば」の御なすべし

あやまりて一俗に云ふマナガツテモの意にて、蛇度子孫の守りと成るべしと也  
御神に申るし給へ一許しやりに給へすかされそ一活本一ゆるされそとあり

ども、更にゆるさずして、おのれが若干の多くの年比、人の子どもを喰ひ、人の種を絶つかはりに、しやくび斬りて捨てん事、只今にこそあめれ。おのれが身さらば我を殺せ、更に苦しからずと言ひながら、さすがに首をば頓に切りやらず。さる程に此二つの犬どもに追はれて、多くの猿ども皆木の上に逃げ上り感ひ騒ぎ叫びのよするに、山も響きて地もかへりぬべし。かよるほどに、一人の神主に神つきていふやう、今日より後、更に更にこの生贄をせじ、長く留めてん、人を殺す事懲りとも懲りぬ、命を絶つ事今より長くし侍らじ、又我をかくしつとて、此男とかくし、又今日の生贄に當りつる人のゆかりを、領じ煩はすべからず、あやまりて其人の子孫の末々に至るまで、われ守りとならん、唯疾くくこの度の我命を請ひ受けよ、いとかなし、我を助けよとの給へば、宮司神主より始めて、多くの人共驚きをなして、皆社の内に入り立ちて、騒ぎあわてて手を揃りて、道理おのづからさぞ侍る、唯御神にゆるし給へ、御神もよくぞ仰せらるよといへども、この東人さなすかされそ、人の命を絶ち殺すものなれば、きやつに物の侘しさ知らせ

手懸一御惑

神もいへば一宮司につきたる神のいへば

んと思ふなり、我身こそあなれ、唯殺されん苦しからずといひて、更にゆるさず。かかる程に、この猿の首は斬り放たれぬと見ゆれば、宮司も手惑して誠にすべき方なければ、いみじき誓言どもを立てて、祈り申して、今より後はかよる事、更にくすべからずなど神もいへば、さらばよし、今より後はかよる事なせそと言ひ含めてつ免し。さてそれより後はすべて人を生贄にせずなりにけり。さて其男家に歸りて、いみじう男女あひ思ひて、年比の妻夫になりて過しけり。男は元より由縁ありける人の末なりければ、口惜しからぬさまにて侍りけり。その後はかの國に、猪鹿をなん生贄にし侍りけるとぞ。

豊前王の事

○今昔三十一、豊前大君知世中作法新参照  
柏原の帝一桓武天皇  
五の御子一今昔はけ一五郎の御

今は昔、柏原の帝の御子の五の御子にて、豊前の大王といふ人ありけり。四位にて、司は刑部卿大和守にてなんありありける。世の事を能くしり、心ばへすなほにて、おほや

子の御孫」とあ  
除目一人を叙  
任する式

さへの神云々  
さへの神の神託  
など信じてたは  
言ひよ也と

言ひけるをなん  
この「なん」は  
衝突なるべし  
田村水尾一文徳  
清和

○今昔三十一、  
藏人式部藤原貞  
高於殿上頓死語

けの御政をも善き悪しき能く知りて、除目のあらんとて、まづ國の數多あきたる望む人あるをも、國のほどにあてつよ、その人はその國の守にぞなざるらん、その人は道理たてて望むとも、えならじなど、國ごとに言ひるたりける事を、人聞きて除目の朝に、この大君の推量事に言ふ事はつゆ違はねば、この大君の推しはがり除目かしこしといひて、除目のさきには、この大君の家に往き集ひてなん、なりぬべしといふ人は、手を摺りて喜び、えならじといふを聞きつる人は、何事いひをるふる大君ぞ、さへの神祭りてくるふにこそあめれ、などつぶやきてなん歸りける。かくなるべしといふ人のならで、不慮に他人なりたるをば、悪しくなされたりとなん世には誹りける。さればおほやけも、豊前の大君は、いかど除目をば言ひけるとなん、親しく候ふ人には、行きて問へとなん仰せられける。これは田村水尾などの御時になんありけるにや。

藏人頓死の事

及び十訓抄参照

小野宮大臣殿  
實頼の孫實資

行ひ給ふ一相圖  
し給ふ

今は昔、圓融院の御時内裏焼けにければ、後院になんおはしましける。殿上の臺盤に人数多著きて物喰ひけるに、藏人貞孝、臺盤に額をあてて寝り入りて、駢をするなめりと思ふに、やと暫しになれば怪しと思ふ程に、臺盤に額を當てて、喉をくつくくとくつめくやうに鳴らせば、小野宮大臣殿、いまだ頭中將にておはしけるが、主殿司に、その式部丞のねざまこそ心得ね、それ起せとの給ひければ、主殿司寄りて起すに、すぐみたるやうにて動かす、怪しさに搔い探りて、はや死に給ひにたり、いみじきわざかなといふを聞きて、ありとある殿上人、藏人、物も覺えず物恐しかりければ、やがて向きたる方ざまに皆走りちる。頭中將、さりとてあるべき事ならず、これ諸司の下部召して昇き出でよと行ひ給ふ。何方の陣よりか出すべきと申せば、東の陣より出すべきなりとの給ふを聞きて、内の人あるかぎり東の陣に昇い出で行くを見んとて、集ひあつまりたるほどに、遠へて西の陣より、殿上のたよみながら昇き出でて出でぬれば、人々も見ずなりぬ。陣の口昇きいづる程に、父の三位來て迎へ取りて去りぬ。かしこく人々に見あはずなりぬる

ものかなとなん人々いひける。さて二十日ばかりありて、頭中將の夢に、ありしやうにて、いみじう泣きて寄りて物をいふ、聞けば、いとうれしく、おのれが死の恥を隠させ給ひたることは、世々に忘れ申すまじ、はかりごちて西より出させ給はざらましかば、多くの人に面をこそは見えて、死の恥にて候はましかとて、泣くく手を摺りて喜ぶとなん、夢に見えたりける。

小槻當平の事

○今昔二十四、  
以陰陽術殺人語  
參照  
奉親—今昔に  
奉親—とあり  
きしちふ—親守  
ナリ  
なりつた—りた  
る職—職は孫の  
職にや、父祖  
傳來の名門なり  
との意

今は昔、主計頭小槻當平といふ人ありけり。その子に算博士なる者あり、名は茂助となんいひける。主計頭忠臣が父、淡路守大夫史奉親が祖父なり。生きたらばやんごとくなくなりぬべき者なれば、いでなくもなりなん、これが出で立ちなば、主計頭、主税頭助、大夫史には、他人はきしろふべきやうもななめり、なりつたはりたる職なる上に、才賢く心ばへもうるせかりければ、六位ながら、世のおほえやうく聞え高くなりもてゆけ

さとし—神院

まじわざ—禁厭

げなくともありなんと思ふ人もあるに、此人の家にさとしをしたりければ、其時陰陽師に物を問ふに、いみじく重く慎むべき日どもを書き出でて、取らせたりければ、そのまよに門を強くさして、物忌して居たるに、敵の人隠れて、陰陽師に死ぬべきわざどもをせさせければ、そのまじわざする陰陽師のいはく、物忌して居たるは慎むべき日にこそあらめ、その日詛ひ合せばぞしるしあるべき、さればおのれを具して、其家におはして呼び出で給へ、門は物忌ならばよもあけじ、唯聲をだに聞きては、必ず詛ふしありなんといひければ、陰陽師を具して、それが家にいきて、門を夥しく叩きければ、下種出で来て、誰ぞこの門叩くはといひければ、某が頼の事にて参れるなり、いみじき堅き物忌なりとも、細目に開けて入れ給へ、大切の事なりといはずれば、この下種男かへり入りて、かくなんといへば、いとわりなきことなり、世にある人の身思はぬやはある、え入れ奉らじ、更に不用なり、疾く歸り給ひねといはずれば、又いふやう、さらば門をば開け給はずとも、その遺戸から顔をさし出で給へ、自ら聞えんといへば、死ぬべき宿



物も覚えぬ一心  
得のなき

身にふひける一  
身に罪を負ひけ  
るなり

世にやありけん、何事ぞとて、遣戸から顔をさし出でたりければ、陰陽師その聲を聞き顔を見て、すべきかぎり詛ひつ。この逢はんといふ人は、いみじき大事言はんといひつれども、言ふべき事も覚えねば、只今田舎へ罷れば、其由申さんと思ひて参うで來つるなり、はや入り給ひねといへば、大事にもあらざりける事により、かく人を呼び出でて、物も覚えぬ主かなといひて入りぬ。それよりやがて頭痛くなりて、三日といふに死にけり。されば物忌には、聲高くよその人には逢ふまじきなり。かやうにまじわざする人のためには、それにつけてかよるわざをすれば、いとおそろしきことなり。さてその呪詛事せさせし人も、幾程なくて殃に逢ひて死にけりとぞ。身におひけるにや、あさましき事なりとなん人のかたりし。

海賊發心出家の事

今は昔、攝津國にいみじく老いたる入道の、行ひうちしてありけるが、人の海賊に逢ひ

はかしくしき人  
一倍にいふれつ  
きとしたる人

この船を云々  
海賊船なりと知  
らぬよ

たりといふ物語する序にいふやう、我は若かりし折は、誠にたのもしくてありし身なり、著物食物に飽き充ちて、明暮海に浮びて世をば過しとなり、淡路の六郎追捕使となんいひし。それに安藝の島にて、他船も殊になかりしに、船一艘近く漕ぎ寄す、見れば、二十五六ばかりの男の濟けなるぞ、主とおほしくてある、若き男二三人ばかりにて僅に見ゆ、さては女どものよきなどあるべかし。おのづから簾の隙より見れば、皮子など數多見ゆ。物は能く積みたるに、はかしくしき人もなくて、唯この我船につきてありく。屋形の上にて、若き僧一人居て經讀みてあり、下れば同じやうに下り、島へ寄れば同じやうに寄る、とまれば又とまりなどすれば、この船をえ見も知らぬなりけり、怪しと思ひて、問ひてんと思ひて、こは如何なる人の、かくこの船にのみ具しておはするぞ、何處におはする人にかと問へば、周防の國より急ぐ事ありて罷るが、さるべきたのもしき人も具せねば、恐しくてこの御船を頼みて、かくつき申したるなりといへば、いとをこがましと思ひて、これは京に罷るにもあらず、こゝに人待つなり、待ちつけて周防の方へ下らんずるは、い

移してん―物品  
を移して此方へ  
移しとらん

かざりに煩ひ―  
重病

むざう―無類  
ひはつ―かよわ  
き意

かで具してとはあるぞ、京に上らん船に具してこそおはせめといへば、さらば明日こそはさも如何にもせめ、今宵は猶御船に具してあらんとて、島がくれなる所に具して泊りぬ。人々も只今こそ能き時なめれ、いざこの船移してんとて、この船に皆乗る時に、物も覺えずあきれ惑ひたり。物のあるかぎり我船に取り入れつ。人どもは皆男女海にとり入ると間に、あるじ手をこそく〜とすりて、水精の數珠の緒切れたらんやうなる涙を、はらはらとこぼしてはいはく、萬の物は皆取り給へ、唯我命のかぎりは助け給へ、京に老いたる親のかざりに煩ひて、今一度見んと申したれば、夜を晝にて告げにつかはしたれば、急ぎまかり上るなりともえ言ひやらで、我に目を見合せて、手をするさまいみじ。これかくないはせそ、例の如く疾くといふに、目を見合せて泣き感ふさま、いとく〜いみじ。哀にむざうに覺えしかども、さいひていかどせんと思ひなして海に入れつ。屋形の上二十ばかりにてひはつなる僧の、經袋頭にかけて夜晝讀みつるを、取りて海にうち入れつ。時に手まどひして、經袋を取りて水の上に浮びながら、手を捧けてこの經を捧けて、

あとまくら―前  
結―細枝

浮き出で〜する時に、希有の法師の今まで死なぬとて、船の權して頭をはたと打ち、背を突き入れなどすれど、浮き出で〜しつゝこの經をさよぐ。怪しと思ひてよく見れば、この僧の水に浮びたるあとまくらに、美しけなる童の鬢結ひたるが、白き襟を持ちたる二三人ばかり見ゆ。僧の頭に手をかけ、一人は經を捧けたる腕を捕へたりと見ゆ。片方の者どもに、あれ見よ、この僧につきたる童は何ぞといへば、いづらく〜更に人なしといふ。我目には慥に見ゆ、この童添ひて、あへて海に沈むことなし、うかびてあり。怪しければ見んと思ひて、これに取りつきてこととて、棹をさし遣りたれば、取りつきたるを引き寄せたれば、人々などかくはするぞ、よしなしわざすると言へど、さはれ、この僧一人は生けんとして船に載せつ。近くなればこの童は見えず。この僧に問ふ、われは京の人か、何處へおはするぞと問へば、田舎の人に候ふ、法師になりて、久しく受戒をえ仕らねば、いかで京に上りて受戒せんと申しよかば、いざ我に具して、由に知りたる人のあるに、申しつけてせさせんと候ひしかば、罷り上りつるなりといふ。わ僧の頭や

婆羅門のやうな  
る一廻魔外道の  
如き

十羅刹一羅刹は  
護土と譯す法  
華經に、十羅刹  
法華經を念持す  
る者を擁護せし  
事見ゆ

腕うでに取りつきたりつる兒こどもは誰たぞ、何ぞと問へば、何時いつかさる者候ひつる、更に覺え  
ずといへば、さて經捧けたりつる腕にも童添わらわひたりつるは、そもく何と思ひて只今死  
なんとするに、この經袋をば捧けつるぞと問へば、死なんずるは思ひ設けたれば、命は  
惜しくもあらず、我は死ぬとも經を暫しが程もぬらし奉らじと思ひて捧け奉りしに、腕  
たゆくもあらず、あまりに輕くて、腕も長くなるやうにて、高く捧けられさぶらひつれ  
ば、御經のしるしとこそ死ぬべき心地にも覺え候ひつれ、命生けさせ給はんは、嬉しき  
事とて泣くに、この婆羅門はらもんのやうなる心にも、哀に尊くおほえて、これより國へ歸らん  
と思ふ、又京に上りて受戒遂げんとの心あらば送らんといへば、更に受戒の心も今は  
候はず、唯歸りさぶらひなんといへば、これより返し遣りてんとす。さても美しかりつる  
童は、何にかかく見えつると語れば、この僧哀に尊く覺えてほろく泣かる。七つより法  
華經讀み奉りて、日比ひごとも他事たごころなく、物の恐しきまよにも讀み奉りたれば、十羅刹のおは  
しましけるにこそと言ふに、この婆羅門のやうなる者の心に、さは佛經はめでたく尊く

残りの物どもは  
知らず、其餘の  
品物は自ら領有  
せず

おはしますものなりけりと思ひて、この僧に具して、山寺などへ往いなんと思ふ心つきぬ。  
さてこの僧と二人具して、糧か少しを具して、残りの物どもは知らず、皆この人々に預け  
て行けば、人々物にくるふか、こはいかに、俄の道心世にあらじ、物のつきたるかとして、  
制とし留とむれども、聞かで、弓、簾、太刀、刀も皆捨てて、この僧に具して、これが師の  
山寺なる所に往いきて、法師になりて、其所そこにて經一部讀み參らせて行ひありくなり。か  
かる罪をのみつくりしが、むさうにおほえて、この男の手をすりて、はらくと泣き感  
ひしを、海に入れしより少し道心おこりにき。それにいとど、この僧に十羅刹の添そひて  
おはしましけると思ふに、法華經のめでたく讀み奉らまほしくおほえて、俄にかくなり  
てあるなりと語り侍りけり。

宇治拾遺物語 卷第十一

青常の事

○今廿二十八、  
左京大夫行鳥名  
語參照  
あてやか—優美  
あぶみがしら—  
銀頭  
まかぶら—目の  
縁  
身の—鼻は—の  
行か  
一うち—家中  
せめて—きはめ  
て

今は昔、村上の御時、古き宮の御子にて左京大夫なる人おはしけり。たけすこし細高にて、いみじうあてやかなる姿はしたれども、様體などもをこなりけり。かたくなはしきさまぞしたりける、頭のおぶみがしらなりければ、纒は背にもつかず離れてぞ振られける。色は露草の花をぬりたるやうに青白にて、まかぶら窪く、鼻のあざやかに高く赤し、唇薄くて色もなく、笑めば齒がちなるものの齒肉赤くて、鬚も赤くて長かりけり。聲は鼻聲にて高く、物言へば一うち響きて聞えける。歩めば身を振り、肩を振りてぞありきける。色のせめて青かりければ、青常の君とぞ殿上の君達はつけて笑ひける。若き人たちの立居につけて、安からず笑ひ罵りければ、帝聞召しあまりて、この男ども

さいなみ—戒め  
こらし  
したなき—心中  
に歎息すること  
あがひ—贈ひ  
あうなく—何の  
恩顧もなく

の、これをかく笑ふ便なきことなり、父の御子聞きて制せずとて、我を怨みざらんやなど仰せられて、まめやかにさいなみ給へば、殿上の人々したなきをして、皆笑ふまじきよし言ひあへりけり。さていひあへるやう、かくさいなめば、今より長く起請す、もしくは起請して後青常の君と呼びたらん者をば、酒菓物など取り出させて、あがひせんと言ひ固めて、起請して後幾もなく、堀河殿の殿上人にておはしけるが、あうなく立ちて行く後手を見て、わすれて、あの青常丸はいづち行くぞとの給ひてけり。殿上人ども、かく起請を破りつるはいと便なき事なりとて、言ひ定めたるやうに、速に酒菓物とりて、この事順へと集りて責め語りければ、あらがひて、せじとすまひ給ひけれど、まめやかにまめやかに責めければ、さらば明後日ばかり青常の君あがひせん、殿上人藏人、其日集り給へといひて出で給ひぬ。其日になりて、堀河中將殿の、青常の君のあがひすべしとて、参らぬ人なし。殿上人居並びて待つ程に、堀河中將直衣姿にて、容貌は光るやうなる人の、香はえもいはず香しくて、愛敬こほれにこほれて参り給へり。直衣のながやかにめ



出相下著の碧  
の出るやうにす  
ること  
こくは一擲殿班

日の御座一清涼  
殿にての玉座

でたき裾より、青き打ちたる出相いだしめして、指貫さしぬきも青色の指貫を著たり。隨身三人に青き狩衣袴著せて、一人には青く色取りたるをしきに、青磁あざじの皿にこくはを盛りて捧けたり、今一人は竹の枝に、山鳩を四つ五つばかりつけて持たせたり。又一人には青磁あざじの瓶に酒を入れて、青き薄うす様にて口を包みたり。殿上の前に持ち續きて出でたれば、殿上人ども見て、諸聲もろこゑに笑ひとよむ事おびたどし。帝聞かせ給ひて、何事ぞ殿上に夥しく聞ゆるはと問はせ給へば、女房、兼通が青常呼びてさぶらへば、その事によりて、男おとこどもに責められて、その罪贖あがひ候ふを笑ひ候ふなりと申しければ、いかやうに贖あがふぞとて、日の御座まじに出でさせ給ひて、小部こしやうよりのぞかせ給ひければ、われより初めて、隨身も皆ひた青なる装束にて、青き食物どもを持たせて贖あがひければ、これを笑ふなりけりと御覽じて、え腹立たせ給はでいみじう笑はせ給ひけり。その後はまめやかにさいなむ人もなかりければ、いよ／＼なん笑ひあざけりける。

保輔盗人たる事

保輔一前の特重  
保輔とは別人  
兵衛尉にて冠云  
云一兵衛尉は相  
當從六位下な  
り、それが特に  
五位に叙せらる  
る也

今は昔、丹後守保昌が弟に、兵衛尉にて冠賜はりて、保輔といふ者ありけり、盗人の長にてぞありける。家は姊小路の南、高倉の東に居たりけり。家の奥に藏を造りて、下を深う井のやうに掘りて、太刀、鞍、鎧、甲、絹、布など、萬の賣物呼び入れて、言ふままに買ひて、價を取らせよといひて、奥の藏の方へ具して行けといひければ、價賜はらんとて行きたるを、藏の内へ呼び入れつと、掘りたる穴へ突き入れくして、持て來たる物をば取りけり。この保輔がりもて入りたる者の返り行くなし。この事を物賣怪しう思へども、埋み殺しぬれば、この事をいふ者なかりけり。これならず京中をしありきてぬすみをして過ぎけり。この事おろく聞えたりけれども、いかなりけるにか、捕へ搦めらるゝ事もなくてぞ過ぎにける。

○今昔二十四、  
安倍晴明隱忠行  
習道語參照  
老いしらみたる  
一白髪になりた  
るをいふ

晴明を心みる僧の事付晴明蛙を殺す事

引きまきぐらん  
一玩ぶ意  
式神一陰陽師の  
使役する神  
呪一呪文

昔、晴明が土御門の家に、老いしらみたる老僧來たりぬ、十歳ばかりなる童二人具したり。晴明、何ぞの人にておはするぞと問へば、播磨の國の者にて候ふ、陰陽師を習はん志にて候ふ、この道に殊に勝れておはしますよしを承りて、少々習ひまゐらせんとて参りたるなりといへば、晴明が思ふやう、この法師は賢きものにこそあるめれ、我を試みんとて來たるものなり、それにわろく見えてはわろかるべし、この法師少し引きまきぐらんとおもひて、供なる童は、式神をつかひて來たるなめりかし、式神ならば召し隠せと心の中に念じて、袖の内にて印を結びて、密に呪をとなふ。さて法師にいふやう、疾く歸り給ひね、後に吉き日して、習はんと給はん事どもは教へ奉らんといへば、法師あらたふといひて、手をすりて額にあてて立ち走りぬ。今はいぬらんと思ふに、法師とまりて、さるべき所々、車宿など覗きありきて、又前に寄り來ていふやう、この供に候ひ

廣澤の僧正一寛朝

つる童の、二人ながら失せて候ふ、それ賜はりて歸らんといへば、晴明、御坊は希有の事いふ御坊かな、晴明は何の故に、人の供ならん者をば取らんするぞといへり。法師のいふやう、更にあが君大きな道理に候ふ、さりながら唯許し給はらんと詫びければ、よしよし御坊の人の試みんとて、式神使ひてくるが、やすからぬ事に覺えつるが、他人をこそさやうには試み給はめ、晴明をばいかでさる事し給ふべきといひて、物よむやうにして暫しばかりありければ、外の方より童二人ながら走り入りて、法師の前に出て來れば、その折法師の申すやう、實に試み申しつるなり、使ふ事は易く候ふ、人の使ひたるを隠す事は、更になふべからず候ふ、今よりは偏に御弟子になりて候はんといひて、懐より名簿ひき出でて取らせけり。この晴明、或時廣澤の僧正の御坊に參りて、物申しうけ給はりける間、若き僧共の晴明にいふやう、式神を使ひ給ふなるは、忽に人をば殺し給ふやといひければ、易くはえ殺さじ、力を入れて殺してんといふ。さて蟲などをば、少しの事せんに必ず殺しつべし、さて生くるやうを知らねば、罪をえつべければ、さやう

試み給へば一我法力を試み給へば

の事由なしといふ程に、庭に蛙の出できて、五つ六つばかり躍りて池の方さまへ行きけるを、あれ一つさらば殺し給へ、試みんと僧のいひければ、罪をつくり給ふ御坊かな、されども試み給へば殺して見せ奉らんとて、草の葉を摘み切りて、物をよむやうにして、蛙の方へ擲け遣りければ、その草の葉の蛙の上にかよりければ、蛙眞平にひしけて死にたりけり。これを見て、僧どもの色變りておそろしと思ひけり。家の中に人なきをりは、この式神を使ひけるにや、人もなきに、葎を上げ下し、門をさしなどしけり。

河内守頼信平忠恒をせむる事

昔、河内守頼信上野守にてありし時、坂東に平忠恒といふ兵ありき。仰せらるゝ事なきが如くにする、討たんとて多くの軍起して、かれが住所の方へ行き向ふに、入海の遙にさし入りたる向ひに、家を造りて居たり。この入海をまはるものならば、七八日にめぐるべし、直に渡らばその日の中に攻めつべければ、忠恒渡の船どもを皆取り隠してけ

○今廿二十五、源朝僧朝臣貫平忠恒語參照仰せらるゝ事云云一朝命を隠するをいふ

り。されば渡るべきやうもなし。濱端はまはたにうち立ちて、この濱のまゝに廻めぐるべきにこそあれと、兵ども思ひたるに、上野守のいふやう、この海のまゝに廻りて寄せば日比ひこひ經なん、その間ににけもし又寄せられぬ構へもせられなん、今日のうちに寄せて攻めんこそ、あのやつはぞんじの外にしてあわて惑はんすれ、しかるに船どもは皆取り隠したる、いか  
がはすべきと軍どもに問はれけるに、軍ども更に渡し給ふべきやうなし、廻りてこそ寄せさせ給ふべく候へと申しければ、この軍どもの中に、さりともこの道知りたる者はあ  
るらん、頼信は坂東方はこの度こそ始めて見れ、されども我家の傳へにて聞き置きた  
る事あり、この海の中には、堤のやうにて廣さ一丈ばかりして、直すに渡りたる道あるな  
り、深さは馬の太腹たははらに立つと聞く、この程にこそその道はあたりたるらめ、さりともこ  
の多くの軍どもの中に、知りたるもあるらん、さらば先に立ちてわたせ、頼信續きて渡  
さんとて、馬をかきはやめて寄りければ、知りたるものにやありけん、四五騎ばかり、馬  
を海にうちおろして、唯渡りに渡りければ、それにつきて、五六百騎ばかりの軍ども渡

しけり。誠に馬の太腹たははらに立ちてわたる。多くの兵どもの中に、唯三人ばかりぞこの道は  
知りたりける。残りはつのも知らざりけり、聞く事だにもなかりけり。しかるにこの守殿、  
この國をばこれこそ始めにておはするに、我にはこれの重代の者どもにてあるに、聞き  
だにもせず知らぬに、かく知り給へるは、實まことに人に勝れたる兵の道かなと、皆さよやき  
おぢて、渡り給ふ程に、忠恒は海を廻りてぞ寄せ給はんずらん、船は皆取り隠したれば、淺  
路あさぢをば我ばかりこそ知りたれ、直すにはえ渡り給はじ、濱を廻り給はん間には、とかくも  
し逃げもしてん、左右さうりゆうなくはえ攻め給はじと思ひて、心靜に軍そろへて居たるに、家の  
めぐりなる郎等、あわて走り來ていはく、上野殿は、この海の中に淺き路の候ひけるよ  
り、多くの軍を引き具して、既にこゝへ來給ひ、いかどさせ給はんと、慄おそ聲こゑにあわ  
てていひければ、忠恒かねての支度しどに違ひて、我既に攻められなんす、かやうにしたて  
奉らんといひて、忽たちに名簿なぼを書きて、文夾ふみはさみにはさみてさし上げて、小舟に郎等一人載せ  
て持たせて、向むかへて參らせたりければ、守殿しうてん見て、かの名簿を受け取らせていはく、か

文夾—文を夾む  
杖の如きもの



意文一覽體文

やうに名簿おこたりのあはに意文を添へて出す、既に來たれるなり、さればあながちに攻むべきにあら  
ずとて、この文を取りて馬を引き返しければ、軍ども皆かへりけり。その後よりいとど  
守殿をば、殊に勝れていみじき人におはしますと、いよくいはれ給ひけり。

白河法皇北面受領の下りのまねの事

○此話十訓抄に  
もいづ

これも今は昔、白河法皇鳥羽殿におはしましける時、北面の者どもに、受領の國へ下る  
まねせさせて御覽あるべしとて、立蕃頭久孝けんはのひさたかといふ者をなして、衣冠にきぬ出して、そ  
の外の五位どもをば前驅せさせ、衛府どもをばやなごひ負にして御覽あるべしとて、各錦唐綾  
を著て劣らじとしけるに、左衛門尉源行遠心殊に出で立ちて、人にかねて見えなば目馴  
れぬべしとて、御前近かりける人の家に入り居て、従者を呼びて、やうれ御前の邊にて  
見て來といひて参らせてけり。むごに見えざりければ、如何にかうは遅きにかと、辰の  
時とこそよほしはありしか、さがるといふ定さやう、午未の時には渡らんすらんものをもと思

かねて見えなば  
一前以て人に見  
られなばめづら  
しからざるべし  
と思ひてなり  
御前近かりける  
一院の御所に近  
き  
さがるといふ定

一時刻移るとい  
よともの定、定  
は何々するてふ  
のつてよこの宛字  
なるべし

ひて待ち居たるに、門の方に聲して、あはれゆよしかりつるものかなくといへども、唯  
参るものをいふらんと思ふ程に、立蕃殿の國司姿こそをかしかりつれといふ。藤左衛門  
殿は錦を著給ひつ、源兵衛殿は繡物ぬいものをして、金の紋をつけてなどかたる。怪しうおほえ  
て、やうれと呼べば、この見て來とて遣りたる男、笑みて出で來て、大方かばかりの見物  
候はず、賀茂祭も物にても候はず、院の御棧敷の方へ渡しあひ給ひたりつるさまは、目  
も及びさぶらはすといふ。さていかにといへば、早うはて候ひぬといふ。こはいかに來  
ては告げぬぞといへば、こは如何なる事にかさぶらふらん、参りて見て來と仰せ候へば、  
目もたよかずよく見て候ふぞかといふ。大方とかくいふばかりなし。さるほどに行違  
は、進奉しんぷ不参返ふまへすく、奇怪なり、隨に召し籠めよと仰せ下されて、二十日餘り候ひける  
程に、この次第を聞召して、笑はせおはしましてぞ、召し籠めはゆりてけるとか。

大方とかくいふ  
ばかりなし一言  
語道斷の次第也

藏人得業猿澤池の龍の事

藏人得業一藏人  
は在俗の時官  
なるべし得業  
は學階の名  
その月のその日  
一某月某日  
すかしふせん一  
許りおはせん  
さりげなく一そ  
しらぬふりして

これも今は昔、奈良に藏人得業惠印といふ僧あり。鼻大きにて赤かりければ、大鼻の藏人得業といひけるを、後ざまには言長しとて、鼻藏人とぞいひける、猶後々には鼻藏鼻藏とのみいひけり。それが若かりける時に、猿澤の池の端に、その月のその日この池より龍昇らんするなりといふ簡を建てけるを、往來の者若き老いたる、さるべき人々ゆかしき事かなとさよめきあひたり。この鼻藏人をかしきことかな、我したる事を人々騒ぎあひたり、をこの事かなと心の中にをかしく思へども、すかしふせんとして、空知らずして過ぎ行く程に、その月になりぬ。大かた大和、河内、和泉、攝津國のものまで、聞き傳へて集ひ合ひたり。惠印いかにかくはあつまる、何かあらん、やうのあるにこそ、怪しきことかなと思へども、さりけなくて過ぎ行く程に、既にその日になりぬれば、道も去りあへずひしめきあつまる。その時になりて、この惠印思ふやう、たゞごとにもあら

鼻暗一鼻さき暗  
しの意

じ、我したる事なれども、やうのあるにこそと思ひければ、この事さもあらんずらん、行きて見んと思ひて、頭つよみて行く、大方近う寄りつくべきにもあらず。興福寺の南大門の壇の上に登り立ちて、今や龍の昇るかくと待ちたれども、何の昇らんぞ、日も入りぬ、くらぐくになりて、さりとはかくてあるべきならねば、歸りける道に、ひとつ橋に盲目が渡りあひたりけるを、この惠印、あなあぶなの目くらやと言ひたりけるを、盲目とりもあへず、あらじ、鼻くらななりと言ひたりける。この惠印を鼻藏といふとも知らざりけれども、盲目といふにつきて、あらじ、鼻暗ななりといひたるが、鼻藏に言ひ合せたるが、をかしき事のひとつなりとか。

清水寺御帳たまはる女の事

○今昔十六、貫  
女仕清水觀音給  
御帳語參照

今は昔、便なかりける女の、清水にあながちに參るありけり。年月積りけれども、露ばかりその臉と覺えたる事なく、いとど便なくなりまさりて、はては年比ありける所をも

いりもみ心  
のいさだつこと

身の程の思ひ知  
られて—わが身  
の程のはかなさ  
を知られて

犬ふせぎ—神佛  
の前にある低き  
格子

その事となくあくがれて、寄りつく所もなかりけるまゝに、泣く／＼観音を怨み申して如何なる前世の報なりとも、唯少しのたより給ひ候はんと、いりもみ申して、御前にうつぶし臥したりける夜の夢に、御前よりとて、かくあながちに申せば、いとほしく思し召せど、少しにてもあるべき便のなければ、その事を思召しなけくなり、これを賜はれとて、御帳の帷子をいとよく疊みて、前にうち置かると見て、夢覺めて御燈明の光に見れば、夢の如く御帳の帷子たよまれて、前にあるを見るに、さはこれより外にたぶべき物のなきにこそあなれと思ふに、身の程のおもひ知られて、悲しくて申すやう、これ更にたまはらじ、すこしのたよりも候はど、錦をも御帳には縫ひて参らせんとこそ思ひ候ふに、この御帳ばかりを賜はりて、罷り出づべきやうも候はず、返し参らせさぶらひなんと申して、犬ふせぎの内にさし入れて置きぬ。又まどろみ入りたる夢に、などさかしくはあるぞ、唯たばん物をばたまはらで、かく返しまるらする、怪しき事なりとて、又たまはると見る。さて覺めたるに、又同じやうに前にあれば、泣く／＼返し参らせつ。

そとろなる人  
縁故なき人  
うれ—訴訟

かやうにしつゝ、三度返し奉るに、猶又かへしたびて、はてのたびは、この度返し奉らんは、無禮なるべきよしを誠められければ、かよるとも知らざらん寺僧は、御帳の帷子を盗みたとや疑はんすらんと思ふも苦しければ、まだ夜深く懐に入れて罷り出でにけり。これをいかにとすべきならんと思ひて、ひき廣げて見て、著るべき衣もなきに、さはこれを衣にして著んと思ふ心つきぬ。これを衣にして著て後、見と見る男にもあれ女にもあれ、哀にいとほしきものに思はれて、そとろなる人の手より物を多く得てけり。大事なる人のうれへをも、その衣を著て知らぬやんごとなき所にも参りて申させければ、かならず成りけり。かやうにしつゝ、人の手より物を得、よき男にも思はれて楽しくてぞありける。さればその衣をばをさめて、必ずせんとと思ふ事の折にぞ取り出でて著ける、かならず叶ひけり。

○今昔二十三、  
陸奥前司橘則光  
切殺人語參照  
所おかれ一人々  
に尊敬せられ

大塙—宮城の外  
垣

すもどく—する  
どくにもなじく  
急ぎて歩むさま  
なり  
おれ—故

則光盗人をさる事

今は昔、駿河前司橘季通が父に、陸奥前司則光といふ人ありけり。兵家にはあらねども、人に所おかれ、力などぞいみじう強かりける。世のおほえなどありけり。若くて衛府の藏人にぞありける時、殿居所より女の許へ行くとして、太刀ばかり佩きて、小舎人童を唯一人具して、大宮を下りに往きければ、大塙の内に人の立てるけしきのしければ、恐しと思ひて過ぎけるほどに、八九日の夜更けて、月は西山に近くなりたれば、西の大塙の内は影にて、人の立てらんも見えぬに、大塙の方より聲ばかりして、あの過ぐる人まかりとまれ、公達のおはしますぞ、え過ぎしといひければ、さればこそと思ひて、すよどく歩みて過ぐるを、おれはさてはまかりなんやとて、走りかよりて物の來ければ、うつぶきて見るに、弓のかけは見えす、太刀のきら／＼として見えければ、弓にはあらざりけりと思ひて、かいふして逃ぐるを、追ひつけてくれば、頭うちわられぬと覺ゆれば、

こうしつ—よく  
寫つ  
けやけき—殊勝  
の意

違ひて—被倒る  
と同時に我起ち  
て

しうねく—執念  
ぶかく

はら／＼と合せ  
て—今昔には  
「腹を合せて」と  
あり

俄に傍ざまにふと寄りたれば、追ふ者の走りはやまりて、え留まりあへず先に出てたれば、少し立てて太刀を抜きて打ちければ、頭を中より打ちわりたりければ、うつぶしに走りまろびぬ。ようしつと思ふ程に、あれはいかにしつるぞと言ひて、又物の走りかよりくれば、太刀をもえさしあへず、脇に夾みて逃ぐるを、けやけきやつかなと言ひて、走りかよりて來る者、初めのよりは走の疾く覺えければ、これはよもありつるやうには謀られじと思ひて、俄に居たりければ、走りはやまりたる者にて、我に蹴躓きてうつぶしに倒れたりけるを、違ひて立ちかよりて、起し立てず頭を又うちわりてけり。今はかくと思ふほどに、三人ありければ、今一人がさてはえやらじ、けやけくして往くやつかなとて、しうねく走りかよりて來ければ、この度は我はあやまたれなんす、神佛助け給へと念じて、太刀を矛のやうにとりなして、走りはやまりたるものに、俄にふと立ち向ひければ、はら／＼と合せて走りあたりにけり。やつも切りけれども、あまりに近く走り當りてければ、きぬだに切られざりけり。矛のやうに持ちたりける太刀なりければ、受け

中より通りたり  
一腹の真中を突  
き通したり  
東一柄の意  
走りひいて今  
昔に「走り廻り  
て」とあり

口よくかため  
他言することな  
かれといましめ

盗人ともほしき  
云々今昔に  
「盗人の思ふ様  
にしたるなり  
と」とあり  
行かじはや云々  
「我は行くまい  
と思へど

られて中より通りたりけるを、太刀の束を返しければ、のけさまに倒れたりけるを切り  
てければ、太刀持ちたる腕を、肩より打ち落してけり。さて走り退きて、又人やあると  
聞きけれども、人の音もせざりければ、走り舞ひて中御門の門より入りて、柱にかいそひ  
て立ちて、小舎人童はいかどしつらんと待ちければ、童は大宮をのほりに、泣くく  
往きけるを呼びければ、喜びて走り來にけり。殿居所にやりて、著換取り寄せて著代へ  
て、もと著たりけるうへのきぬ、指貫には血のつきたりければ、童して深く隠させて、童  
の口よくかためて、太刀に血のつきたる洗ひなどしたよめて、殿居所にさりけなくて入り  
て臥しにけり。終夜我したるなど聞えやあらんずらんと、胸うちさわぎて思ふほどに、夜  
明けて後、物どもいひ騒ぐ。大宮大炊御門の邊に大なる男三人、幾程も隔てず斬り伏せ  
たる、あさましく使ひたる太刀かな、互に斬り合ひて死にたるかと思れば、同じ太刀の使  
ひざまなり、敵のしたりけるにや、されど盗人とおほしき様ぞしたるなど言ひのよしる  
を、殿上人ども、いざ行きて見てこんとて、誘ひて行けば、行かじはやと思へども、いか

心得られぬ一人  
人に怪しく思は  
る  
かづらひげ  
をかけたる如く  
生え茂れる鬚  
逆順一原本「箱  
つか」とあり、今  
昔によりて改  
む、逆順は猪の  
毛の逆立てるを  
いふ

あへくらべ云々  
「合戦の意に  
て、闘争して勝  
つ也  
なにがしを使ふ

ざらんもまた心得られぬさまなれば、しぶくにいぬ。車に乗りこほれて、遣り寄せて  
見れば、いまだともかくもしなさで置きたりけるに、年四十餘りばかりなる男のかづらひ  
けなるが、無紋の袴に紺のあらひさらしの襦袢に、山吹の衣の汗衫、よく晒されたる著た  
るが、猪の逆順の後輔したる太刀佩きて、猿の皮の足袋に沓はきなして、わきをかきお  
よびをさして、右向左向物言ふ男立てり。何男にかと見るほどに、雑色の寄り來て、あ  
の男の盗人敵に逢ひて仕うまつりたると申すと言ひければ、嬉しくもいふなる男かなと  
思ふ程に、車の前に乗りたる殿上人の、かの男召し寄せよ、子細問はんといへば、雑色  
走り寄りて召しもて來たり。見れば、高面鬚にて願そり鼻下りたり。赤鬚なる男の血目  
に見なして、片膝つき太刀の束に手をかけて居たり。いかなりつる事ぞと問へば、この  
夜中ばかりに物へ罷るとて、此所を罷り過ぎつる得に、物の三人、おれはまさに過ぎな  
んやとて、走りつどきて參うで來つるを、盗人なめりと思ひ給へて、あへくらべ伏せて  
候ふなり、今朝見れば、なにがしを使ふと思ひ給ふべきやつばらにて候ひければ、敵

し云々―拙者を  
耐つべき便宜乏  
しと思へる故原  
立ちぬるぬ―起  
ちたり居たり

にて仕りたりけるなめりと思ひ給ふれば、しや頭どもを切つて、かくさぶらふなりと、立ちぬるぬおよびをさしなど語り居れば、人々さてくといひて問ひ聞けば、いとど狂ふやうにしてかたり居る。その時にぞ人にゆづりえて、面ももたけられて見ける。けしきやしるからんと、人しれず思ひたりけれど、われと名のるもの出で來たりければ、それにゆづりて止みにしと、老いて後に子どもにぞ語りける。

空入水したる僧の事

百日懺法―百日  
問法華懺法を誦  
する也  
道も去りあへず  
―道路にたちこ  
みて

これも今は昔、桂川かつらがはに身投げんする聖とて、まづ祇陀林寺ぎだりんじにして百日懺法せんぽう行ひければ、近き遠きものども、道も去りあへず拜みに行きちがふ女房車などひまなし。見れば三十餘りばかりなる僧の、細やかなる目をも人に見合せず、ねぶり目にて時々阿彌陀佛を申す。そのはざまは唇ばかり働くは、念佛なめりで見ゆ。また時々そこに息を放つやうにして、集ひたる者どもの顔を見渡せば、その目に見合せんと集ひたるものども、こちお

護役車―下賤の  
者の乗るべき車  
うちまき―散末  
のこと

まだしかなる―  
いまだしにて、  
まだ早しとなり

しあち押し、ひしめき合ひたり。さて既に其日のつとめては堂へ入りて、さきにさし入りたる僧ども多く歩み續きたり。尻に雑役車に、この僧は紙の衣裳袋など著て乗りたり。何といふにか唇はたらく。人に目も見合せずして時々大息をぞ放つ。行く道に立ちなみたる見物の者ども、うちまきを霞の降るやうに投げ散らす。聖いかにかく目鼻に入る、堪へ難し、志あらば紙袋などに入れて、我居たりつる所へ送れと時々いふ。これを無下のものは手を摺りて拜む。少しの物の心ある者は、なかうはこの聖はいふぞ、只今水に入りなんするに、祇陀林へやれ、目鼻に入る堪へがたしなど、いふこそ怪しけれなどさよめく者もあり。さてやりもて行きて、七條の末に遣り出したれば、京よりは優りて、入水の聖拜まんとて、河原の石よりも多く人集ひたり。河端へ車遣り寄せて立てれば、聖只今は何時ぞといふ。供なる僧ども、申のくだりになり候ひにたりといふ。往生の刻限にはまだしかなるは、今少しくらせといふ。待ちかねて、遠くより來たる者は歸りなどして河原人すくなになりぬ。これを見はてんと思ひたる者は猶立てり。それが中に僧のある

たよき一神

が、往生には刻限やは定むべき、心得ぬ事かなといふ。とかくいふほどに、この聖たふさ  
 きにて、西に向ひて川にざぶりと入る程に、船なる繩に足をかけて、づぶりとも入らで  
 ひしめく程に、弟子の聖外したれば、倒に入りてごぶくとするを、男の川へおり下り  
 て、よく見んとて立てるが、この聖の手を取りて引きあけたれば、左右の手して顔はら  
 ひて、くよみたる水を吐き棄てて、この引き上げたる男に向ひて手をすりて、廣大の御恩  
 蒙りさぶらひぬ、この御恩は極樂にて申し候はんといひて、陸へ走りのほるを、そこら  
 集りたる者ども、童、河原の石を取りて、まきかくるやうに打つ。裸體なる法師の河原  
 くだりに走るを、集ひたる者ども受け取りく打ちければ、頭うちわられにけり。この  
 法師にやありけん、大和より瓜を人の許へやりける文の表書に、前の入水の上人と書き  
 たりけるとか。

受け取りく  
順々に

日藏上人吉野山にて鬼に逢ふ事

日藏一三善博行  
の弟  
いらぬき一月々  
し

昔、吉野山の日藏の君、吉野の奥に行ひありき給ひけるに、長七尺ばかりの鬼、身の色  
 は紺青の色にて、髪は火の如くに赤く、頸ほそく、胸骨は殊にさし出でていらぬき、腹ふ  
 くれて脛は細くありけるが、この行人に逢ひて、手を束ねて泣く事限なし。これは何  
 事する鬼ぞと問へば、この鬼涙にむせびながら申すやう、我はこの四五百年を過ぎての  
 昔人にて候ひしが、人のために怨を残して、今はかゝる鬼の身となりて候ふ、さてその  
 敵をば、思ひの如くに取り殺してき、それが子、孫、曾孫、立孫に至るまで、のこりな  
 く取り殺しはてて、今は殺すべきものなくなりぬ、されば猶彼等が生れかはりまかる後  
 までも、知りて取り殺さんと思ひ候ふに、次々のうまれ所露も知らねば、取り殺すべき  
 やうなし、嗔恚の炎は同じやうに燃ゆれども、敵の子孫は絶えはてたり。我一人盡き  
 せぬ嗔恚の炎に燃えこがれて、せん方なき苦をのみ受け侍り、かゝる心を起さどらまし  
 かば、極樂天上にも生れなまし、殊に怨を留めてかゝる身となりて、無量億劫の苦を受  
 けんとするこの、せんかたなく悲しく候ふ、人のために怨を残すは、しかしながら我

しかしながら  
さながらの意



身のためにてこそありけれ、敵の子孫は盡きはてぬ、我命はきはまりもなし、かねてこのやうを知らましかば、かよる怨をば残さどらましと言ひ續けて、涙を流して泣く事かぎりなし。その間に上より炎やうく燃え出でけり。さて山の奥さまへ歩み入りけり。さて日藏の君あはれと思ひて、それがために、様々の罪滅ぶべき事どもをし給ひけるとぞ。

丹後守保昌下向の時致經が父に逢ふ事

これも今は昔、丹後守保昌國へ下りける時、奥佐の山に白髪<sup>した</sup>の武士一騎逢ひたり。路の傍なる木の下にうち入りて立ちたりけるを、國司の郎等ども、この翁など馬よりおりざるぞ、奇怪なり、咎めおろすべしといふ。こよに國司のいはく、一人當千の馬のたてやうなり、たどにはあらぬ人ぞ、咎むべからずと、制してうち過ぐる程に、三町ばかり行きて、大矢の左衛門尉致經、數多の兵を具して逢へり。國司會釋する間、致經がいはく、

○古事談卷四及  
び十訓抄卷四



平五大夫一平致頼  
堅固一朴直

○今昔十九、於  
備西武藏寺齋出  
家語參照  
たうさか一高坂  
の誤か、高坂は  
豐後大分郡に在  
り

ことに老者一人逢ひ奉りて候ひつらん、致經が父平五大夫に候ふ、堅固の田舎人にて子細を知らず、無禮を現じ候ひつらんといふ。致經過ぎて後、さればこそとぞ言ひけるとか。

出家功德の事

これも今は昔、筑紫にたうさかのさへとまうす齋の神まします。その祠に、修行しける僧の宿りて寝たりける夜、夜中ばかりにはなりぬらんと思ふ程に、馬の足音あまたして人の過ぐると聞く程に、齋はましますかと問ふこゑす。この宿りたる僧怪しと聞く程に、この祠の内より侍りと答ふなり。又あさましと聞けば、明日武藏寺にや参り給ふと問ふなれば、さも侍らず、何事の侍るぞとこたふ。明日武藏寺に新佛出で給ふべしとて、梵天帝釋、諸天龍神、集り給ふとは知り給はぬかといふなれば、さる事も承らざりけり、うれしく告げ給へるかな、いかでか参らでは侍らん、必ず参らんするといへば、さらば明日の巳の時ばかりの事なり、必ず参り給へ、待ち申さんとて過ぎぬ。この僧これを聞

あろく一疎々  
にて、少しばかり  
の意

きて、希有の事をも聞きつるかな、明日は物へ行かんと思ひつれども、この事見てこそ何方も行かめと思ひて、明るるやおそきと武藏寺に参りて見れども、さるけしきもなし。例よりはなかくしづかに人も見えず。あるやうあらんと思ひて、佛の御前に候ひて、巳の時を待ち居たる程に、今暫しあらば午の時になりなんす、いかなる事にかと、思ひ居たる程に、年七十餘りばかりなる翁の、髪も禿けて、白きとてもおろくある頭に、袋の烏帽子をひき入れて、もともちひさきが、いとど腰かどまりたるが、杖にすがりて歩む尻に尼立てり。小さく黒き桶に何にかあるらん物入れてひきさけたり。御堂に参りて、男は佛の御前にて額二三度ばかり突き、木樂子の念珠の大きに長き押しもみて候へば、尼そのもたる小桶を翁の傍に置いて、御房呼び奉らんとていぬ。暫しばかりあれば、六十ばかりなる僧参りて、佛拜み奉りて、何せんに呼び給ふぞと問へば、今日明日とも知らぬ身に罷りなりにたれば、この白髪の少し残りたるを剃りて、御弟子にならんと思ふなりといへば、僧、目おしすりて、いとたふとき事かな、さらば疾くくとて、小桶なり

天衆一梵天帝釋  
四天王等をいよ  
随分一分相應

つるは湯なりけり。その湯にて頭洗ひて剃りて戒授けつれば、又佛拜み奉りて罷り出でぬ。その後又他事なし。さてこの翁の法師になるを随喜して、天衆も集り給ひて、新佛の出でさせ給ふとはあるにこそありけれ、出家随分の功德とは、今始めたる事にはあらねども、まして若くさかりらん人の、よく道心起して、随分にせん者の功德、これにていよく推しはかられたり。

宇治拾遺物語 卷第十二

達磨天竺の僧行を見る事

○今昔十二、天竺  
隨摩和尚行  
所々見僧行隨摩  
照

昔天竺に一寺あり、住僧尤も多し。達磨和尚この寺に入りて、僧どもの行ひを伺ひ見給ふに、或房には念佛し經を讀みさまざまに行ふ。或房を見給ふに、八九十ばかりなる老僧の、たゞ二人居て碁を打ち、佛もなく經も見えず。唯圍碁を打つ外は他事なし。達磨件の房を出でて他の僧に問ふに、答へていはく、この老僧二人若きより圍碁の外はすることなし、すべて佛法の名をだに聞かず、仍て寺僧にくみやしみて交會することなし、空しく僧供をうく、外道の如く思へりと云々。和尚これを聞きて、定めてやうあらんと思ひて、この老僧が傍に居て、圍碁打つ有様を見れば、一人は立てり、一人は居りと思ふに、忽然として失せぬ。怪しく思ふ程に、立てる僧は歸り居たりと見る程に、又居た

證果一佛果を證得するをいよ

○今昔四、龍樹提婆二菩薩傳法頭參照

る僧失せぬ。見れば又出て來ぬ。さればこそと思ひて、園碁の外他事なしと受け給はるに、證果の上人にこそおはしけれ、その故を問ひ奉らんと給ふに、老僧答へていはく、年比としごらこの事より外は他事なし、但し黒勝つ時は我煩惱勝ちぬとかなしみ、白勝つ時は菩提勝ちぬとよろこぶ、打つに随ひて煩惱の黒を失ひ、菩提の白の勝たん事を思ふ、この功德によりて、證果の身となり侍るなりといふ。和尚房を出でて他僧に語り給ひければ、年比としごらにくみいやしみつる人々、後悔して皆奪みけりとなん。

提婆菩薩龍樹菩薩の許に參る事

昔、西天竺さいてんぢくに龍樹菩薩りゆうじゆぼさつと申す上人まします。智恵甚深ちんじんなり。又中天竺ちてんぢくに提婆菩薩たいはぼさつと申す上人、龍樹の智恵深き由を聞き給ひて、西天竺さいてんぢくに行き向ひて、門外に立ちて案内を申さんとし給ふ所に、御弟子外より來給ひて、如何なる人にてましますぞと問ふ。提婆菩薩答へ給ふやう、大師の智恵深くましますよし承りて、嶮難を凌ぎて中天竺ちてんぢくより遙々はるか參り



たり、このよし申すべきよしの給ふ。御弟子龍樹に申しければ、小箱に水を入れて出さる。提婆心得給ひて、衣の襟より針を一つ取り出して、この水に入れて返し奉る。これを見て龍樹大に驚きて、早く入れ奉れとて、房中を掃ひ清めて入れ奉り給ふ。御弟子怪み思ふやう、水を與へ給ふことは、遠國より遙々と來給へば疲れ給ふらん、喉潤さんためと心得たれば、この人針を入れて返し給ふに、大師驚き給ひて、敬ひ給ふ事心得ざることかなと思ひて、後に大師に問ひ申しければ、答へ給ふやう、水を與へつるは、我智恵は小箱の内の水のごとし、しかるに汝萬里を凌ぎて來たる、智恵を浮べよとて水を與へつるなり、上人そらにその心を知りて、針を水に入れて返す事は、我針ばかりの智恵を以て、汝が大海の底を極めんとなり、汝等年來隨逐すれども、この心を知らずしてこれを問ふ、上人は始めて來たれども我心を知る、これ智恵のあると無きとなり云々。即ち瓶水をうつす如く、法文を習ひ傳へ給ひて、中天竺に還り給ひけりとなん。

瓶水をうつす如く、佛家に遺瓶といふ語あり、それによれるなり

慈惠僧正受戒の日を延引の事

慈惠僧正良源

水觀三年正月二日入滅 七十三歳近江國人也

座主の時、受戒行ふべき定日例の如く催し設けて、座

主出仕を相待つ所に、途中より俄に歸り給へば、供の者ども、こはいかにと心得難く思

ひけり。衆徒諸職人も、これほど大事の日の定まりたる事を、今となりてさしたる障も

なきに、延引せしめ給ふ事しかるべからずと、謗する事かぎりなし。諸國の沙彌等まで

悉く參り集りて、受戒すべきよし思ひ居たる所に、横川の小綱を使にて、今日の受戒は

延引なり、重ねたる催しに隨ひて行はるべき也と、仰せ下しければ、何事によりて留め

給ふぞと問ふ。使またくその故を知らず、唯早く走り向ひて、このよしを申せとばかり

の給ひつるぞといふ。あつまれる人々、各心得ず思ひて皆退散しぬ。かゝるほどに、未

の時ばかりに大風吹きて、南門俄に倒れぬ、その時人々、この事あるべしとかねて悟り

て、延引せられれると思ひ合せけり。受戒行はれましかば、若干の人々皆うち殺されな

職人―法會の時  
に雜事を取扱ふ  
役人

小綱―僧の職名  
か

ましと感じのよしりけり。

内記上人法師陰陽師の紙冠を破る事

○今昔十九、内記上人内記は在俗の時の官名、中務省に大内記少内記あり法師陰陽師一僧體にて陰陽師なるもの  
被戸の神一書寫の御覆の時生成せる神

内記上人寂心といふ人ありけり、道心堅固の人なり。堂を造り塔を建つる、最上の善根なりとて勸進せられけり。材木をば播磨國に行きて取られけり。こゝに法師陰陽師、紙冠を著て祓するを見つけて、あわてて馬よりおりて走り寄りて、何事し給ふ御房ぞと問へば、祓し候ふなりといふ。何しに紙冠をばしたるぞと問へば、被戸の神等は法師をば忌み給へば、祓するほどしばらくして侍るなりといふに、上人聲をあけ大に泣きて、陰陽師に取りかよれば、陰陽師心得ず仰天して、祓をしさして、これは如何にといふ、祓せさする人もあきれて居たり。上人冠を取りて、引き破りて泣く事限なし。いかに知りて、御房は佛弟子となりて、被戸の神等忌み給ふといひて、如來の忌み給ふ事を破りて、暫しも無間地獄の業をば作り給ふぞ、誠に悲しきことなり、唯寂心を殺せといひて、取りつ

三世如來の御首一僧の頭をさす

きて泣く事おびたどし。陰陽師のいはく、仰せらるゝ事もとも道理なり、世の過ぎがたければ、さりとはとてかくの如く仕るなり、しからずは何わざをしてかは、妻子をば養ひ我命をも續ぎ侍らん、道心なければ上人にもならず、法師のかたちに侍れど、俗人の如くなれば、後世の事いかどと悲しく侍れど、世の習慣にて侍れば、かやうに侍るなりといふ。上人のいふやう、それはさもあれ、いかど三世如來の御首に冠をば著給ふ、不幸に堪へずしてかやうの事し給はゞ、堂造らん料に勸進し集めたる物どもを、汝になん與へん、一人菩提に進むれば、堂寺造るに勝りたる功德なりといひて、弟子どもを遣して材木取らんとて、勸進し集めたるものを、皆運び寄せてこの陰陽師に取らせつ、さて我身は京に上り給ひにけり。

持經者叙實効驗の事

昔、閑院大臣殿冬三位中將におはしける時、瘧病を重く煩ひ給ひけるが、神名といふ所

○今昔十二、名實持經者語參照  
閑院大臣殿一公季をさす註の冬嗣は誤也  
神名一今昔には

「京の西に神明といふ山寺」とあり  
荒見川一紙屋川の一名  
念じて一塔へ忍びて  
蒜を食ひ侍り一蒜は風を治するものなれば食ふなり、されどこれを食へば口臭き故に人に逢はぬ事此頃の風俗たり

壽量品一法華經第六卷の始にあり

に叡實といふ持經者なん、瘧病は能く祈り落し給ふと申す人ありければ、この持經者に祈らせんとて行き給ふに、荒見川のほどにて早うおこり給ひぬ。寺は近くなりければ、これより歸るべきやうなしとて、念じて神名におはして、房の簷に車を寄せて案内をいひ入れ給ふに、近頃蒜を食ひ侍りと申す。しかれども唯上人を見奉らん、只今罷り歸る事かなひ侍らじとありければ、さらばはや入り給へとて、房の蔀おろし立てたるを取りて、新しき寢敷きて、入り給へと申しければ入り給ひぬ。持經者沐浴して、とばかりありて出であひぬ。長高き僧の瘦せさらばひて、見るにたふとけなり。僧申すやう、風重く侍るに、醫師の申すに隨ひて蒜を食ひて候ふなり、それにかやうにおはしまし候へば、いかでかはとて参りて候ふなり、法華經は淨不淨を嫌はぬ經にてましませば讀み奉らん、なでふことか候はんとして、念珠を押し摺りて、側へ寄り來たる程尤もたのものし。御頸に手を入れて我膝を枕にせさせ申して、壽量品をうち出して讀む聲はいとたふとし。さばかり尊き事もありけりとおほゆ。少ししわがれて、高聲によむ聲誠にあはれなり。持經者、目より

大なる涙をはらくと墮して、泣く事かぎりなし。その時覺めて、御心地いとさわやかに残りなくよくなり給ひぬ。かへすく後世まで契りて歸り給ひぬ。それよりぞ有驗の名は高くひろまりけるとか。

空也上人の臂觀音院僧正祈りなほす事

昔、空也上人申すべき事ありて、一條大臣殿に参りて、藏人所にのほりて居たり。餘慶僧正又參會し給ふ。物語などし給ふほどに、僧正の給ふ、その臂はいかにして折り給へるぞと。上人のいはく、我母物ねたみして、幼少の時、片手を取りて投げ侍りし程に折りて侍るとぞ聞き侍りし、幼稚の時の事ならば覺え侍らず、かしこく左にて侍る、右手折り侍らましかばといふ。僧正の給ふ、其許は貴き上人にておはす、天皇の御子とこそ人は申せ、いと辱けなし、御臂誠に祈り直し申さんはいかに。上人いふ、尤も喜び侍るべし、實にふとく侍りなん、この加持し給へとて近く寄れば、殿中の人々集りてこれを

餘慶僧正一元年  
御書に「筑州早良人也、慶元間不動尊云々」とありてこの話出てたり  
一條大臣一餘左大臣の御か、然らば實經なり  
天皇の御子一仁明天皇の御孫常康親王の御子なりといふ

頂より黒煙を出して汗を流して頭上より蒸気の立ち上るを甚しく形容せるなり

見る。その時僧正頂より黒煙を出して加持し給ふに、暫間ありて曲れる髻はたと鳴りて伸びぬ、即ち右の臂の如くに伸びたり。上人涙を墮して三度禮拜す、見る人皆のよめき感じ、或は泣きけり。その日上人、供に若き聖三人具したり。一人は繩を取り集むる聖なり、道に落ちたる古き繩を拾ひて、壁土に加へて古堂の破れたる壁を塗る事をす。一人は瓜の皮を取り集めて、水に洗ひて獄衆に與へけり。一人は反古の落ち散りたるを拾ひ集めて、紙にすきて經を書き寫し奉る。その反古の聖を、臂直りたる布施に僧正に奉りければ、喜びて弟子になして義觀と名づけ給ふ、ありがたかりける事なり。

増賀上人三條の宮に参り振舞の事

○今昔十九、三條天皇太后宮出家語及び續本朝往生傳參照  
三條皇太后一東三條院諸子、一條院の母后

昔多武峰たふのみねに増賀上人とて尊き聖おはしけり、極めて心たけう厳しくおはしけり。偏に名利を厭ひて、頗る物ぐるはしくなんわざとふるまひ給ひける。三條皇太后の宮尼にならせ給はんとて、戒師のために召しに遣はされければ、尤も尊きことなり、増賀こそは誠に

續き物一陰室をいふ

目口はたかりて一呆れて目口を開く

なし奉らめとて参りけり。弟子どもこの御使を嘔りて、打ち給ひなどやせんずらんと思ふに、思の外に心やすく参り給へば、ありがたき事に思ひあへり。かくて宮に参りたるよし申しければ、喜びて召し入れ給ひて、尼になり給ふに、上達部、僧ども多く参り集り内裏より御使など参りたるに、この上人は目は恐しけなるが、體も尊けながら煩はしけになんおはしける。さて御前に召し入れて、御几帳のもとに参りて、出家の作法して、めでたく長き御髪を搔き出して、この上人にはさませらる。御簾の内に女房達見て、泣く事かぎりなし。剪みはてて出でなんとする時、上人高聲にいふやう、増賀をしもあながちに召すは何事ぞ、心得られ候はず、若し穢き物を大なりと聞召したるか、人のよりは大きに候へども、今は練衣のやうにくたくとなりたるものと言ふに、御簾の内近く候ふ女房達、外には公卿、殿上人、僧達、これを聞くにあさましく、目口はたかりておほゆ。宮の御心地も更なり、尊さも皆失せて、各身より汗あえて我にもあらぬ心地す。さて上人まかり出でなんとて、袖かきあはせて、年まかりよりて風重くなりて、今は唯

痢病のみつかまつれば、参るまじく候ひつるを、わざと召し候ひつれば、あひ構へて候ひつる、堪へ難くなりて候へば、急ぎ罷り出で候ふなりとて出でざまに、西の對の糞子糞子につい居て尻をかよけて、椽はんすふの口より水を出すやうに、ひりちらす音高く、臭き事がきりなし。御前まで聞ゆ。若き殿上人、笑ひ言ることおびたどし。僧達は、かゝる物狂ものぐるをめしたる事と誇り申しけり。かやうに事に觸れて、物狂ひにわざとふるまひけれど、それにつけても、尊きおほえはいよくまさりけり。

聖寶僧正大路をわたる事

昔東大寺に、上座法師のいみじく樂しきありけり。露ばかりも人に物與ふる事をせず、慳貪けんこんに罪深く見えければ、その時聖寶僧正の若き僧にておはしけるが、此上座の物惜む罪のあさましきにとて、わざと諍論しやうろんをせられけり。御房何事したらんに、大衆に僧供ひかんといひければ、上座おもふやう、物あらがひしてもし負けたらんに、僧供ひかんとよ

聖寶僧正一傳家  
官班記に「權僧  
正東大寺聖寶僧  
關寺本願上人號  
尊師眞雅弟子太  
政大臣大友皇子  
之後兵部大輔高  
野王男也」と見  
えたる人なり  
上座一僧の役名  
僧供一僧衆に供

果進行するをい  
ふ

かたくあらがふ  
堅く約束す

しなし、さりながら衆中にてかく言ふ事を、何とも答へざらんも口惜しと思ひて、かれがえすまじき事を思ひ廻らしていふやう、賀茂祭の日、眞裸まはだかにて禪ぜんばかりをして、干鮭太刀に佩きて、瘦せたる女牛に乗りて、一條大路を大宮より河原まで、我は東大寺の聖寶なりと高く名のりて渡り給へ、しからばこの御寺の大衆より下部に至るまで、大僧供ひかんといふ。心中にさりともせじと思ひければ、かたくあらがふ。聖寶大衆皆催し集めて、大佛の御前にて、鉦かね打ちて佛に申して去りぬ。その期き近くなりて、一條富小路に棧敷うちて、聖寶が渡らん見んとて大衆皆集りぬ、上座もありけり。暫間しばらくありて、大路の見物の者ども夥しくのよしる。何事かあらんと思ひて、頭さし出して西の方を見やれば、牝牛に乗りたる法師の裸體はだかなるが、干鮭を太刀に佩きて、牛の尻をはたくと打ちて、尻に百千の童わらわつきて、東大寺の聖寶こそ上座とあらがひしてわたれと高くいひけり。その年の祭には、これをせんにてぞありける。さて大衆おのく寺にかへりて、上座に大僧供ひかせたりけり。この事帝聞召して、聖寶は我身を棄てて人を導くものにこそあ



りけれ、今の世にいかでかゝる貴人ありけんとして、召し出して僧正までなしあけさせ給ひけり。上の醍醐はこの僧正の建立なり。

穀断の聖不實露顯の事

昔、久しく行ふ上人ありけり。五穀を断ちて年比としごらになりぬ。帝聞召して神泉苑にあがめすゑて殊に尊みたまふ、木の葉をのみ食ひける。物笑ものわらひする若公達あつまりて、この聖の心見んとて行き向ひて見るに、いと尊けに見ゆれば、穀断こくだん幾年いくとせばかりになり給ふと問はれければ、若きより断ち侍れば、五十餘年に罷りなりぬといふを聞きて、一人の殿上人のいはく、穀断の尿うりはいかやうにかあるらん、例の人には變りたるらん、いで行きて見んといへば、一三人連れて行きて見れば、穀尿を多くひりおきたり。あやしと思ひて、上人の出でたる隙ひまに、居ゐたる下したを見んといひて、疊の下を引きあけて見れば、土を少し掘りて、布袋に米を入れて置きたり。公達見て、手を叩きて、穀糞こくふん聖せいとよばはりて、

○今昔二十八、  
穀断聖人持未波  
疾語參照  
帝一文帝帝なる  
べし、この話は  
文徳實錄卷六齊  
衡元年七月の條  
にもあり

言り笑ひければ逃げ去りにけり。その後は行きがたも知らず、長く失せにけりとなん。

季直少將歌の事

今は昔、季直少將といふ人ありけり。病つきて後少しおこたりて、内裏うちに参りたりけり。公忠辨の掃部助にて、藏人なりけるころの事なり。みだり心地、まだよくもおこたり侍らねども、心もとなくて参り侍りつる。後は知らねどもかくまで侍れば、明後日あさばかりに又参り侍らん、よきに申させ給へとてまかり出でぬ。三日ばかりありて、少將の許より、悔しくぞ後に逢はんとちぎりける今日をかぎりと言はましものをさてその日うせにけり。あはれなる事のさまなり。

樵夫の小童隠題の歌よむ事

今は昔、隠題かくしだいをいみじく興きようせさせ給ひける帝の、算策ひらりかをよませられけるに、人々わろく

季直少將一和大  
物語第百三段に  
も出づ、そこは  
は季直とあり

悔しくぞ云々  
新古今集哀傷に  
出づ

隠題一物の名を  
歌の中にかくし  
てよめるをいふ

詠みたりけるに、木こる童の曉山へ行くとていひける、此頃筆策を詠ませさせ給ふなるを、人のえ詠み給はざる、童こそ詠みたれと言ひければ、具して行く童、あなおほけなき事ないひそ、さまにも似すいま／＼しと言ひければ、などか必ずさまに似ることかとて、

めぐりくるはる／＼ごとに櫻花いくたび散りき人に問はどや  
といひたりける。さまにも似す思ひかけずぞ。

高忠の侍うたよむ事

今は昔、高忠といひける越前守の時に、いみじく不幸なりける侍の夜晝まめなるが、冬なれど帷子かたびらをなん著たりける。雪のいみじく降る日、この侍きよめすとて、物のつきたるやうにふるふを見て、守歌よめ、をかしうふる雪かなといへば、この侍、何を題にて仕るべきぞと申せば、裸體はだかなるよしを詠めといふに、程もなく震ふ聲をさよけてよみあ

○今昔十九、越前守幸忠出家語参照

物のつきたるやうに―銀簀の付きて振ひわたらくやうに

うちほらへども―活本「うちゆるへども」とあり

薄色の衣―紅の薄き色したる衣かいわぐみて―わがね折りに

ぐ、

はだかなる我身にかよる白雪はうちほらへども消えせざりけり

と詠みければ、守まもいみじく譽めて、著たりける衣をぬぎて取らす。北の方もあはれがりて、薄色の衣のいみじう香しきを取らせたりければ、二つながら取りて、かいわぐみて脇に挟みて立ち去りぬ。侍に行きたれば、居なみたる侍ども見て、驚き怪しがりて問ひけるに、かくと聞きてあさましがりけり。さてこの侍、その後見えざりければ、あやしがりて守尋ねさせければ、北山に尊き聖ありけり。其所そこへ行きて、この得たる衣を二つながら取らせて言ひけるやう、年まかり老いぬる身の不幸、年を逐ひてまさる、この生のごとは益ゆきもなき身に候ふめり、後生をだにかでとおほえて、法師にまかりならんと思ひ侍れど、戒の師に奉るべき物候はねば、今に過し候ひつるに、かく思ひかけぬ物を賜ひたれば、限なくうれしく思ひ給へて、これを布施にまらするなりとて、法師になさせ給へと、涙にむせかへりて泣く／＼いひければ、聖いみじうたふとがりて、法師にな

してけり。さて其所より行く方もなくて失せにけり。在所も知らずなりにけるとか。

貫之うたの事

○今昔二十四、  
土佐守紀貫之子  
死闘和歌語参照

今は昔、貫之が土佐守になりて、下りてありける程に、任はての年七つ八つばかりの子の、  
えもいはずをかしけなるを、限なく悲しうしけるが、とかく煩ひて失せにければ、泣き  
惑ひて病つくばり思ひこがる程に、月比になりぬれば、かくてのみあるべきことかは、  
上りなんと思ふに、兒のこゝにて、何とありしはやなど思ひ出でられて、いみじう悲し  
かりければ、柱に書きつけける。

都へと思ふにつけてかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

と書きつけたりける歌なん、今までありける。

東人うたの事

今は昔、東人の歌いみじう好みよみけるが、螢を見て、

あなてるや蟲のしやじりに火のつきて小人魂とも見えわたるかな

東人のやうに詠まんとて、實は貫之がよみたりけるとぞ。

河原院に融公の靈住む事

○今昔二十七、  
川原院融左大臣  
鹽宇多院見給語  
参照

延喜の帝一醍醐  
天皇

今は昔、河原院は融の左大臣の家なり。陸奥の鹽竈の形を作りて、潮を汲み寄せて鹽を  
焼かせなど、様々のをかしき事を盡して住み給ひける。大臣うせて後、宇多院には奉り  
たるなり。延喜の帝度々行幸ありけり。まだ院の住ませ給ひけるをりに、夜中ばかりに、  
西の對の塗箭を開けて、そよめきて人の参るやうに思されければ、見させ給へば、晝の  
裝束麗しくしたる人の、太刀佩き笏取りて、二間ばかり退きて畏まりて居たり。あれは  
誰ぞと問はせ給へば、こゝの主ぬしに候ふ翁なりとまうす。融の大臣かと問はせ給へば、し  
かに候ふと申す。こゝさはなんぞと仰せらるれば、家なれば住み候ふに、おはしますが辱く

すくよかに一ア  
かずかと

所狭く候ふなり、いかど仕ふべからんと申せば、それはいとく異様の事なり、故大臣の子孫の我に取らせたれば、住むにこそあれ、わが押し取りて居たらばこそあらめ、禮も知らずいかにかくは怨むるぞと、高やかに仰せられければ、かい消つやうに失せぬ。そのをりの人々、猶帝ははたことにおはします者なり、たどの人はその大臣に逢ひて、さやうにすくよかには言ひてんやとぞ云ひける。

### 八歳童孔子と問答の事

○今昔十、孔子  
道行童童子問申  
語參照

今は昔、唐土に孔子道を行きたまふに、八つばかりなる童逢ひぬ。孔子に問ひ申すやう、日の入る所と洛陽といづれか遠きと。孔子答へ給ふやう、日の入る所は遠し、洛陽は近し。童のまうすやう、日の出で入る所は見ゆ、洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し、洛陽は遠しと思ふと申しければ、孔子賢き童なりと感じ給ひける。孔子にはかく物問ひかくる人もなきに、かく問ひけるは、凡者にはあらぬなりけりとぞ人いひける。

○此話後撰書鄭  
弘傳の註にもと  
づく

### 鄭大尉の事

今は昔、親に孝する者ありけり。朝夕に木をこりて親を養ふ。孝養の心空に知られぬ。梶もなき船に乗りて向ひの島に行くに、朝には南の風吹きて北の島に吹きつけつ。夕には船に木をこりて入れて居たれば、北の風吹きて家に吹きつけつ。かくの如くするほどに年比になりて、おほやけに聞しめして、大臣になして召し使はる。その名を鄭大尉とぞいひける。

### 貧俗観じて佛性を富める事

邊州一邊土の意

今は昔、唐土の邊州に一人の男あり、家貧しくして財なし、妻子を養ふに力なし、覓むれども得ることなし。かくて年月をふ、思ひ侘びて、或僧に逢ひて、財を得べきことを問ふ。智恵ある僧にて答ふるやう、汝財を得んと思はど、唯誠の心を起すべし、さらば財

も豊に、後世は善き所に生れなんといふ。この人誠の心とはいかどと問へば、僧の曰く、誠の心を起すといふは他の事にあらず、佛法を信するなりといふに、又問ひていはく、それはいかに、慥に承りて、心を得て頼み思ひて、二なく信をなし頼み申さん、承はるべしといへば、僧のいはく、我心はこれ佛なり、我心を離れては佛なしと、しかれば我心の裏に佛はいますなりといへば、手を摺りて泣くく拜みて、それよりこの事を心にかけて、夜晝思ひければ、梵釋諸天來たりて護り給ひければ、はからざるに寶出で來て、家の内豊になりぬ。命をはるに、いよく心佛を念じ入りて、淨土に速に參りてけり。この事を聞き見る人、尊みあはれみけるとなん。

宗行の郎等虎を射る事

きんかい—金海なるべし、慶尚

今は昔、壹岐守宗行が郎等を、はかなき事によりて主の殺さんとしければ、小舟に乗りて逃けて、新羅國へ渡りて隠れて居たりける程に、新羅のきんかいといふ所の、いみじ

南道の南東部にあり

おぼるげにて—容易な事にては罷り逢けぬなりとの意

う言りさわぐ。何事ぞと問へば、虎の國府に入りて人を食ふなりといふ。この男問ふ、虎はいくつばかりあるぞと。唯一つあるが俄に出で來て、人を食ひて逃けていきくするなりといふを聞きて、この男のいふやう、あの虎に逢ひて、一矢を射て死なばや、虎かしこくば共にこそ死なめ、唯空しうはいかでか食はれん、この國の人は、兵の道わるきにこそあめれと言ひけるを、人聞きて、國の守にかうくの事をこそ、この日本人申せと言ひければ、かしこき事かな、呼べといへば、人來て召しありといへば參りぬ。まことにや、この虎の人食ふを、易く射んとは申すなると問はれければ、しか申し候ひぬと答ふ。守いかでかよる事をば申すぞと問へば、この男の申すやう、この國の人は、我身をばまたくして敵をば害せんと思ひたれば、おほろけにて、かやうの猛き獸などに、我身の損ぜられぬべければ、罷り逢はぬにこそ候ふめれ、日本の人はいかにも、我身をばなきになして罷り逢へば、よき事も候ふめり、弓矢にたづさはらんもの、何しかは我身を思はん事は候はんと申しければ、守、さて虎をば必ず射殺してんやといひけれ

よるこび謝禮

ば、我身の生き生かすは知らず、必ずかれをば射取り侍りなんと申せば、いみじうかしこき事かな、さらば必ずかまへて射よ、いみじきよろこびせんといへば、男まこまうすやう、さても何處いづくに候ふぞ、人をばいかやうにて食ひ侍るぞと申せば、守のいはく、如何なる折にかあるらん、國府こくふの中に入り來て、人一人を頭を食ひて、肩にうちかけて去るなりと、この男申すやう、さても如何にしてか食ひ候ふと問へば、一人のいふやう、虎はまづ人を食はんとては、猫の鼠を窺ふやうにひれふして、暫しばかりありて大口をあきて飛びかかり、頭を食ひて肩にうち掛けて走り去るといふ。とてもかくてもさばれ、一矢射てこそは食はれ侍らめ、その虎の在所かりどころを教へよといへば、これより西に、三十四町退きて麻の島あり、それになんふすなる、人恐おそぢてあへてその邊わたりに行かずといふ。おのれ唯知り侍らすとも、そなたをさして罷らんといひて、調度負ひて往ぬ。新羅の人々、日本の人ははかなし、虎に食はれなんと集りて誹りけり。かくて此男は、虎の在所問ひ聞きて行きて見れば、誠に麻の島はるるくと生ひわたりたり。麻の長四尺ばかりなり。その中

三十四町一活字  
本に二十四町  
一本に二十餘町  
とあり

みながち一皆を  
がらにて恐くの

を分け行きて見れば、誠に虎ふしたり。尖矢とさやをはけて、片膝を立てて居たり。虎人の香を嗅かぎて、ついひらがりにて、猫の鼠窺ふやうにてあるを、男矢をはけて音もせて居たれば、虎大口をあきて躍りて男の上にかよるを、男弓を強く引きて、上にかよる折に、やがて矢を放ちたれば、頤おほほの下より項うなじに七八寸ばかり尖矢を射出しつ。虎倒たふさに伏して仆れてあかくを、雁股かりまたをつがひ二たび腹を射る。二度ながら土に射つけて、遂に殺して、矢をも抜かて國府に歸りて、守にかうく射殺しつるよしいふに、守感じのよしりて、多くの人を具して虎の許もとへ行きて見れば、誠に箭みながら射通されたり。見るにいとみじ。誠に百千の虎起りてかよるとも、日本の人十人ばかり馬にて押し向ひて射ば、虎何事なにごとをかせん、この國の人は、一尺ばかりの矢に、錐つらのやうなる鐵てつをすけて、それに毒を塗りて射れば、遂にはその毒の故に死ぬれども、忽にその庭に射伏する事はえせず、日本の人は、我命死なんをもつゆ惜まず、大なる矢にて射れば、その庭に射殺しつ、猶兵の道は、日本の人には當るべくもあらず、さればいよくいみじう恐しく覺ゆる國なりとておぢけ

而興し一名譽を揚ぐ

○此話は欽明天皇六年の藤原巴提便の事を誤傳せしなり

遅く歸りければ一歸りの遅かりければといふに同じ、此語法就草紙にも見ゆ

り。さてこの男をば、猶惜み留めていたはりけれど、妻子を戀ひて筑紫にかへりて、宗行が許に行きて、その由を語りければ、日本の面興したる者なりとて、勘當も免してけり。多くの物ども祿に得たりけるを、宗行にも取らず。多くの商人ども、新羅の人のいふを聞きて語りければ、筑紫にもこの國の人の兵は、いみじきものにぞしけるとか。

遣唐使の子虎に食はるゝ事

今は昔、遣唐使にて唐土に渡りける人の、十ばかりなる子をえ見であるまじかりければ、具して渡りぬ。さて過しける程に、雪のいと高く降りたりける日、歩行もせで居たりけるに、この兒の遊に出でて往ぬるが、遅く歸りければ、怪しとおもひ出でて見れば、足跡後の方から踏みて行きたるにそひて、大なる犬の足跡ありて、それより此兒の足跡見えす。山ざまに行きたるを見て、これは虎の食ひていきけるなめりと思ふに、せん方なく悲しくて、太刀を抜きて、足跡を尋ねて山の方に行きて見れば、岩屋の口に、この

兒を食ひ殺して腹をねぶりてふせり。太刀を持ちて走り寄れば、え逃けても往かでかいかどまりて居たるを、太刀にて頭を打てば、鯉の頭を割るやうにわれぬ。次にまた、側ざまに食はんとて走り寄る背を打てば、背骨をうち切りてくたくとなしつ。さて子をば死にたれども、脇にかいはさみて家に歸りたれば、その國の人々見ておぢあざむ事かぎりなし。唐土の人は、虎に逢ひて逃ぐる事だに難きに、かく虎をば打ち殺して、子を取り返して來たれば、唐土の人はいみじき事にいひて、猶日本の國には、兵の方は雙なき國なりとめでけれど、子死にければ何にかはせん。

或上達部中將の時召人に逢ふ事

今は昔、上達部のまだ中將と申しける、内裏へ参り給ふ道に、法師を捕へて率て行きけるを、こは何法師ぞと問はせければ、年比使はれて候ふ主を殺して候ふ者なりといひければ、誠に罪重きわざしたる者にこそ、心憂きわざしけるものかなと、何となくうち言

こりずまに―不  
然になり、物に  
懲りず問ひけ  
るとなり

事よろしくば―  
罪常の罪ならば

ひて過ぎ給ひけるに、この法師赤き眼なる目の、ゆよしく悪しけなるして睨み上げたり  
ければ、よしなき事をも言ひてけるかなと、氣疎く思召して過ぎ給ひけるに、又男をか  
らめて往きけるに、こは何事したるものぞと、こりすまに問ひければ、人の家に追ひ入  
れられて候ひつる、男は逃けて罷りぬれば、これを捕へて罷るなりといひければ、別の  
事もなきものにこそとて、其捕へたる人を見知りたれば、乞ひ許して遣り給ふ。大方こ  
の心ざまして、人の悲しきめを見るに従ひて助け給ひける人にて、初めの法師も事よろし  
くば請ひ免さんとて問ひ給ひけるに、罪の殊の外に重ければ、さの給ひけるを法師は安  
からず思ひけり。さてほどなく大赦のありければ、法師もゆりにけり。さて月明かりけ  
る夜、皆人はまかで、あるは寝入りなどしけるを、この中將月にめで佇み給ひける程に  
物の築地を越えておりけると見給ふ程に、後よりかきすくひて飛ぶやうにして出でぬ。  
あきれ惑ひて、いかにも思し分かぬ程に、恐しけなる者來集ひて、遙なる山の嶮しく恐し  
き所へ率て行きて、柴の編みたるやうなるものを、高く造りたるにさし置きて、さかし

そのたふ―答の  
字音、返報する  
義

きびは―幼弱の  
義

御徳に―御蔭に  
て

らする人をばかくぞする、やすき事を偏に罪重く言ひなして、悲しき目を見せしかば、そ  
のたふに炙り殺さんするぞとて、火を山の如くおきければ、夢などを見る心地して、若  
くきびはなる程にてはあり、物覚え給はず、あつさは只あつになりて、唯片時に死ぬべく  
覚え給ひけるに、山の上よりゆよしき銃矢を射遣せければ、ある者ども、こは如何にと  
騒ぎける程に、雨の降るやうに射ければ、これら暫し此方よりも射けれど、彼方には人  
の數おほく、え射あふべくもなかりけるにや、火の行方も知らず、射ちらされて逃げて  
去にけり。その折男一人出で來て、如何に恐しく思召しつらん、おのれはその月のそ  
の日搦められて罷りしを、御徳に免されて、世にうれしくこの御恩報い参らせばやと思  
ひ候ひつるに、法師の事は悪しく仰せられたりとて、日比窺ひ奉らせつるを見て候ふ程  
に、告げ参らせばやと思ひながら、我身かくて候へばと思ひつる程に、白地にきと立ち  
離れ参らせ候ひつる程に、かく候ひつれば、築土を越えて出で候ひつるに、逢ひ参らせ  
て候ひつれども、そこにて取り参らせ候はど、殿も御疵などもや候はんずらんと思ひて、



四條大納言一膳  
原公任

かりみさせ給ひ  
て一御座位のこ  
とをいふ  
釣殿一池水に臨  
みて送り設けた  
る殿

こよにてかく射拂ひて取り参らせ候ひつるなりとて、それより馬にかき載せ申して、槌にもとの所へ送り申してけり。ほのくくと明くるほどにぞ歸り給ひける。年成人になり給ひて、かよる事にこそ逢ひたりしがと、人に語り給ひけるなり。四條大納言の事と申すはまことやらん。

陽成院妖物の事

今は昔、陽成院おりのさせ給ひての御所は、大宮よりは北、西洞院よりは西、油小路よりは東にてなんありける。そこは靈すむ所にてなんありける。大なる池のありける釣殿に、番の者寝たりければ、夜中ばかりに、細々とある手にて、この男が顔をそとく撫でけり。けむつかしと思ひて、太刀を抜きて片手にてつかみたりければ、淺黄の上下著たる叟の、殊の外に物怪しけなるがいふやう、我はこれ昔住みしぬしなり、浦島が子弟なり、いにしへよりこの所に住みて千二百餘年になるなり、願はくば許し給へ、此所

いひごと一俗の  
いひごとといふ  
に同じ

水無瀬殿一攝津  
三島郡にあり

かげかた一武士  
の名

に社を建てて齋ひ給へ、さらばいかにも守り奉らんといひけるを、我心一つにてはかなはじ、このよしを院へ申してこそはと言ひければ、にくき男のいひごとかなとて、三度上さまへ蹴あけくして、なえくくたくとなして、落つる所を口をあきて食ひたりけり。なべての人ほどなる男と見る程に、夥しく大きになりて、この男唯一口に食ひてけり。

水無瀬殿むさぶひの事

後鳥羽院の御時、水無瀬殿によるく山より傘ほどの物の、光りて御堂へ飛び入る事侍りけり。西面北面のものども、面々にこれを見顯して高名せんと、心にかけて用心し侍りけれども、空しくてのみ過ぎけるに、或夜かけかた、唯一人中島に寝て待ちけるに、例の光物、山より池の上を飛び行きけるに、起きんも心もとなくて、あふのきに寝ながらよく引きて射たりければ、手答して池へ落ち入るものありけり。その後人々に告げて

火を燈して面々見ければ、ゆよしく大なる鼯鼠の、年ふり毛などもはけ、しふとけなるにてぞ侍りける。

一條棧敷屋鬼の事

今は昔、一條棧敷屋に或男とまりて、けいせいと臥したりけるに、夜中ばかりに風吹き雨降りてすまじかりけるに、大路に諸行無常と詠じて過ぐる者あり。何者ならんと思ひて、部を少し押しあけて見ければ、長は軒とひとしくて馬の頭なる鬼なりけり。おそろしさに、部をかけて奥の方へ入りたれば、この鬼格子押しあけて、顔をさし入れて、よく御覽じつるなくと申しければ、太刀を抜きて入らば斬らんと構へて、女をば側に置きて待ちけるに、よくく御覽ぜよと言ひていにけり。百鬼夜行にてあるやらんと、おそろしかりける。それより一條の棧敷屋には、又もとまらざりけるとなん。

一條棧敷屋一條通に院の棧敷ありし事徒然草に見ゆ  
けいせい一傾城

宇治拾遺物語 卷第十三

上綏の主金を得る事

今は昔、兵衛佐なる人ありけり。冠の上綏の長かりければ、世の人あけをのぬしとなん附けたりける。西の八條と京極との畠の中に、あやしの小家あり。その前を行くほどに夕立のしければ、この家に馬より下りて入りぬ。見れば女一人あり。馬をひき入れて、夕立をすすすとて、平なる小唐櫃のやうなる石のあるに、尻をうちかけて居たり。小石を持ちて、この石を手まさぐりに叩き居たれば、打たれてくほみたる所を見れば、金色になりぬ。希有の事かなと思ひて、禿けたる所に土を塗り隠して、女に問ふやう、この石はなぞの石ぞ。女のいふやう、何の石にか侍らん、昔よりかくて侍るなり、昔長者の家なん侍りける、この家は倉どもの跡にて候ふなりと、誠に見れば大なる礎の石どもあ

○今昔二十六、兵衛佐上段主於西八條見得銀語參照  
上綏一冠の腰はより額へかけて額にて結ぶ、その結びあまりをば上げて耳のあたりにて留むるを上綏といふ、後世はこれを老髪ともいへり

目くせ—目癖に  
て、目のきした  
るをいよ

心も得て—意外  
に思ひて

り、さてその尻かけさせ給へる石は、その倉の跡を島に作るるとて畝掘る間に、土の下より掘り出されて侍るなり、それがかく屋の中に侍れば、搔き退けんと思ひ侍れど、女は力よわし、搔き退くべきやうもなければ、にくむくかくて置いて侍るなりといひければ我この石取りてん、後に目くせあるものもぞ見つくると思ひて、女にいふやう、この石我取りてんよと言ひければ、よき事に侍りといひければ、その邊に知りたる下人の空車を借り遣りて、積み出でんとする程に、綿衣を脱ぎて、たどにとらんが、罪得がましければこの女に取らせつ。心も得てさわぎまどふ。この石は、女どもこそよしなしものと思ひたれども、我家に持ていきて使ふべきやうのあるなり、さればたどに取らんが罪得がましければ、かく衣を取らするなりといへば、思ひかけぬことなり、不用の石のかはりに、いみじき寶の御衣の綿のいみじき賜はらんものとは、あな恐しといひて、竿のあるにかけてをがむ。さて車にかき載せて家にかへりて、うち缺きく賣りて、物どもを買ふに、米錢絹綾など數多に賣りえて、夥しき徳人になりぬれば、西の四條よりは北、皇嘉

うきのゆぶく—  
沼地のざぶざ  
ぶしたる

車かし—車力

御貞—一本に貞  
を定に作るよる

門よりは西、人も住まぬうきのゆぶくとしたる、一町ばかりなるうきあり、そこは買ふとも價もせじと思ひて、唯少しに買ひつ。主は不用のうきなれば、島にも作らるまじ、家もえ建つまじ、益なき所と思ふに、價少しにても買はんといふ人を、いみじきすきものと思ひて賣りつ。上綏のぬし、このうきを買ひ取りて津の國に行きぬ。船四五艘ばかり具して、難波わたりにいぬ。酒粥など多く設けて、鎌又多う設けたり、行きかふ人を招き集めて、この酒粥まるれといひて、その代にこの葦刈りて、少しづつ得させよといひければ、喜びて集りつよ、四五束十束二三十束など刈りて取らす。かくの如く三四日刈らすれば、山の如く刈りつ。船十艘ばかりに積み京へのほる。酒多くまうけたれば、のほるまよに、此下人どもに、たどに往かんよりはこの綱手引けといひければ、此酒を飲みつよ綱手を引きて、いと疾く賀茂河尻に引きつけつ。それより車かしに物をとらせつ、その葦にてこのうきに敷きて、下人どもを雇ひて、その上に土はねかけて、家と思ふまよに造りてけり。南の町は大納言源貞といひける人の家、北の町はこの上綏の主の

し、定は嵯峨天皇の皇子に源定といふあり、河原左大臣融の兄なり、この人のことか  
本體一資本

○今昔二十八、歌謡元輔賀茂祭渡一條大路語、元輔一清原氏、左大臣夏野の玄孫  
あいちかに一人並に體當に

馬ぞひ馬の口取  
後さまにかきて一冠を後の方へ振きやりて

うめて造りける家なり。それをこの貞の大納言の買ひ取りて、二町にはなしたるなりけり。それはいはゆる此頃の西の宮なり。かくいふ女の家なりける金の石を取りて、それを本體として造りたりける家なり。

元輔落馬の事

今は昔、歌よみの元輔内藏亮になりて、賀茂祭の使しけるに、一條大路わたりけるほどに、殿上人の車多く列べ立てて、物見ける前渡る程に、おいらかにては渡らで、人見給ふにと思ひて、馬を痛くあふりければ、馬狂ひて落ちぬ。年老いたる者の頭を倒にて落ちぬ。公達あなみじと見る程に、いと疾く起きぬれば冠ぬけにけり。鬘つゆなし、唯缶を被きたるやうにてなんありける。馬ぞひ手まどひをして、冠を取りて著せさすれど、後さまにかきて、あなさわがし、しばし待て、公達に聞ゆべき事ありとて、殿上人どもの車の前に歩みよる。日のさしたるに頭きらくとして、いみじう見ぐるし。大路



口を張りたれば  
一―手綱にて馬の  
口を引張る也

唐鞍は云々―  
「かくうくも」は  
「かほうべくも」  
の衍か、唐鞍に  
つくる鞍は馬の  
如く平かなれば  
足がかりわるし  
と也

考へやるべから  
ず―今昔には  
「かぞへやるべ  
からず」とあり

の者、市をなして笑ひ言る事限なし。車、棧敷さじきの者共笑ひ言るに、一つの車の方さまに歩み寄りていふやう、公達この馬より落ちて冠落したるをば、をこなりとや思ひ給ふ、しか思ひ給ふまじ、その故は、心ばせある人だにも、物に躓き倒るゝ事は常の事なり、まして馬は心あるものにあらず、この大路はいみじう石高し、馬は口を張りたれば、歩まんと思ふだに歩まれず、とひきかうひき、くるめかせば倒れなんとす。馬を悪しと思ふべきにあらず、唐鞍からくらはさらなる鐙おぶのかくうくもあらず、それに馬は痛く躓けば落ちぬ、それわろからず、又冠の落つる事は、物してゆふものにあらず、髪を能くかき入れたるに捕へらるゝものなり、それに鬢びんは失せにたればひたぶるに無し、されば落ちん事冠怨むべきやうもなし、又例なきにあらず、何の大おほ臣おみは大嘗會だいじやうの御禊みそぎに落つ、何の中納言はその時の行幸に落つ、かくの如く例も考へやるべからず、然しかれば案内も知り給はぬ此頃の若き君達笑ひ給ふべきにあらず、笑ひ給はどかへりてをこなるべしとて、車ごとに手を折りつゝ數へて言ひ聞かす。かくの如く言ひはてて、冠持もて來こといひてなん、取りて

さし入れける、その時にとよみて笑ひ言る事限なし。冠せさすとて寄りて、馬ぞひの曰く、落ち給ふ即ち冠を奉らで、などかく此なしごとは仰せらるゝごとと問ひければ、痴事しんじないひそ、かく道理をいひ聞かせたらばこそ、此公達は後々にも笑はさらめ、さらすは口さがないき君達は、長く笑ひなんものをやとぞ言ひける。人わらはする事役やくにするなりけり。

利延迷神にあふ事

今は昔、三條院の八幡やの行幸に、左京さきやう屬のきくわんにて、くにの利延としのぶといふ者の供奉したりけるに、長岡に寺戸といふ所の程往きけるに、人どもの、この邊へんには迷神まよひがみあなる邊ぞかしと言ひつゝわたるほどに、利延もさ聞くはと言ひて行く程に、過ぎもやらで日もやうやうさがれば、今は山崎のわたりには行きつきぬべきに、あやしう同じ長岡の邊を過ぎて、乙訓川おつくにがはのつらを過ぐと思へば、又寺戸の岸をのほる。寺戸過ぎて又行きも下ゆきて、乙訓川のつらに來て渡るぞと思へば、又すこし桂川かつらがはをわたる。やうく日も暮方になりぬ、

○今昔二十七、  
左京屬利延値  
迷神語參照

すこし―「ナギ  
し」の誤なるべ

し、今昔には、過  
ぎにし柱川を渡  
るこあり

後前見れども一人も見えずなりぬ。後前に遙にうち續きたりつる人も見えず。夜の更けぬれば、寺戸の西の方なる板屋の軒におりて、夜を明して、つとめて思へば、我は左京の官人なり、九條にて泊るべきに、かうまで来つらん、極まりてよしなし。それに同じ所を夜一夜廻り歩きけるは、九條の程よりまよはかし神のつきて、率て来るをしらで、かうしてけるなめりと思ひて、明けてなん西の京の家には歸り来たりける。利延がまさしう語りし事なり。

### 龜を買ひてはなす事

昔、天竺の人寶を買はんために、錢五十貫を子にもたせてやる。大なる河の端を行くに、船に乗りたる人あり。船の方を見やれば、船より龜首をさし出したたり。錢持ちたる人立ちとまりて、この龜をば何の料ぞと問へば、殺して物にせんずるといふ。その龜買はんといへば、この船の人はく、いみじき大切の事ありて設けたる龜なれば、いみじき價な

○今昔九、□人  
以父錢買取龜放  
河語參照

龜首を今昔に  
は「龜五つ首を」とあり

りとも賣るまじきよしをいへば、猶あながちに手をすりて、この五十貫の錢にて龜を買ひ取りて放ちつ。心に思ふやう、親の寶かひに隣の國へ遣りつる錢を、龜に代へて止みぬれば、親いかに腹立ち給はんすらん、さりとて又親の許へ往かであるべきにあらねば、親の許へ歸り行くに、道に人逢ひていふやう、此所に龜賣りつる人は、この下のわたりにて船打覆して死にぬとなん語るを聞きて、親の家に歸り行きて、錢は龜に代へつる由語らんと思ふ程に、親のいふやう、何とて此錢をば返し遣せたるぞと問へば、子のいふ、さることなし、その錢にてはしかく龜に代へてゆるしつれば、その由を申さんとて参りつるなりといへば、親のいふやう、黒き衣著たる人同じやうなるが、五人各十貫つつ持ちて来たりつる、これそなりとて見せければ、この錢いまだぬれながらあり。はや買ひて放しつる龜の、その錢河に落ちいるを見て、取り持ちて、親の許に子の歸らぬさきに遣りけるなり。

## 夢買ふ人の事

昔 備中國に郡司ありけり、それが子にひきのまき人といふありけり。若き男にてありける時夢を見たりければ、合せさせんとて、夢解の女の許に行きて、夢合せて後物語して居たる程に、人々數多聲してくなり。國守の御子の太郎君のおはするなりけり。年は十七八ばかりの男にておはしけり。心ばへは知らず容貌は清けなり。人四五人ばかり具したり。これや夢解の女の許と問へば、御供の侍、これにて候ふと言ひてくれれば、まき人は上の方の内に入りて、部屋のあるに入りて、穴より覗きて見れば、この君入り給ひて、夢をしかく見つるなり、いかなるぞとて語り聞かす。女聞きて、世にいみじき御夢なり、必ず大臣までなりあがり給ふべきなり、返すくめでたく御覽じて候ふ、あなかしこあなかしこ人に語り給ふなど申しければ、此君嬉しけにて、衣を脱ぎて女に取らせりて歸りぬ。その折まき人、部屋より出でて女にいふやう、夢はとるといふ事のあるなり、

ひきのまき人  
吉備國吉備の誤  
寫なるべし

なしあげ給ひ  
昇進せしめ

この君の御夢我等に取らせ給へ、國守は四年過ぎぬれば歸り上りぬ、我は國人なれば、いづもながらへてあらんする上に、郡司の子にてあれば、我をこそ大事に思はめといへば、女の給はんまよに侍るべし、さらばおはしつる君の如くにして入り給ひて、その語られつる夢を露も違はず語り給へといへば、まき人喜びて、かの君のありつるやうに、入り來て夢語をしたれば、女同じやうにいふ。まき人いと嬉しく思ひて、衣を脱ぎて取らせりて去りぬ。その後文を習ひ讀みたれば、唯とほりに通りて才ある人になりぬ。朝廷聞召して試みらるよに、誠に才深くありければ、唐土へ物よくく習へとて遣して、久しく唐土にありて様々の事ども習ひ傳へて歸りたりければ、帝賢きものに思し召して、次第になしあげ給ひて大臣までになされにけり。されば夢取る事は實にかしこき事なり。かの夢取られたりし備中守の子は、司もなきものにて止みにけり。夢をとられざらましかば大臣までもなりなまし。されば夢を人に聞かすまじきなりと言ひ傳へけり。

○今昔二十三  
相撲人大井光遠  
妹強力語参照  
ひきふと一低太  
にて、丈短く肥  
大なり

薩摩の氏長一氏  
長は天下無雙の  
力士なる由三代  
實録仁和二年五  
月の條に見ゆ

第一矢竹

大井光遠の妹強力の事

今は昔、甲斐國の相撲大井光遠はひきふとにいかめしく、力強く足はやく、みめ事がらよ  
り始めていみじかりし相撲なり。それが妹に、年二十六七ばかりなる女の、みめことが  
らけはひもよく、姿もほそやかなるありけり。それは退きたる家に住みけるに、それが  
門に人に追はれたる男の、刀を抜きて走り入りて、この女を質に取りて、腹に刀をさし  
あてて居ぬ。人走り行きて兄の光遠に、姫君は質に取られ給ひぬと告げければ、光遠が  
いふやう、その御許は、薩摩の氏長ばかりこそは質に取らめといひて、何となく居たれ  
ば、告げつる男怪しと思ひて、立ち返りて物よりのぞけば、九月ばかりの事なれば、薄  
色の衣一重に紅葉の袴を着て、口おほひして居たり。男は大なるをこの恐しけなるが、  
大の刀を逆手に取りて腹にさし當てて、足をもて後より抱きて居たり。この姫君、左の  
手しては顔を塞ぎて泣く、右の手しては、前に矢の筈の荒作りたるが、一三十ばかりあ

その御許一妹を  
さす

るを取りて、手すさみに節の本を指にて、板敷に押し當ててにじれば、朽木の柔なるを  
押し砕くやうに砕くるを、此盗人目をつけて見るに、あさましくなりぬ。いみじからん  
兄の主、鐵槌を持ちて打ち砕くともかくはあらじ、ゆよしかりける力かな、このやうに  
ては只今の間に我は取り砕かれぬべし、無益なり、逃げなんと思ひて、人目をばかりて  
飛び出でて逃げ走る時に、末に人ども走り逢ひて捕へつ。縛りて、光遠が許へ具して行  
きぬ。光遠いかに思ひて逃げつるぞと問へば、申すやう、大なる矢の筈の節を、朽木な  
どのやうに押し砕き給ひつるを、あさましと思ひて、恐しさに逃げ候ひつるなりと申せ  
ば、光遠うち笑ひて、いかなりともその御許はよも突かれじ、突かんとせん手を取りて、  
掻い捻ぢて上さまへ突かば、肩の骨は上さまへ出でてねぢられなまし、かしこくおのれ  
が肘脱かれまじき宿世ありて、御許は捻ぢざりけるなり、光遠だにもおれをば手殺に殺  
してん、肘をば捻ぢて腹胸をふまんに、おのれは生きてんや、それにかの御許の力は、光  
遠二人ばかり合せたる力にておはするものを、さこそ細やかに女めかしくおはすれども



手ひろごりて  
つかみたる手の  
開くをいふ

光遠が手戯するに、捕へたる腕を捕へられぬれば、手ひろごりて免しつべきものを、あはれ男子にあらましかば、逢ふ敵もなくぞあらまし、口惜しく女にてあるといふを聞くに、この盗人半死ぬべき心地す。女と思ひて、いみじき質を取りたると思ひてあれども、その儀はなし。おれをば殺すべけれども、御許の死ぬべくはこそ殺さめ、おれ死ぬべかりけるに、かしこう疾く逃けて退きたるよ、大なる鹿の角を膝に當てて、小き枯木の細きなどを折るやうにあるものをとて、追ひ放ちてやりけり。

或唐人女の羊に生れたるを知らずして殺す事

今は昔、唐土に何とかやいふ司になりて、下らんとする者侍りき。名をばけいそくといふ、それが女一人ありけり、雙なくをかしけなりし、十餘歳にして失せにけり。父母泣き悲む事がぎりなし。さて二年ばかりありて田舎に下りて、親しき一家の類兄弟あつめて、國へ下るべきよしを言ひ侍らんとするに、市より羊を買ひ取りて、この人々に喰

○今昔九、  
唐且  
韋麗娘女子成  
羊拉然語事

さいてーす

はせんとするに、その母が夢に見るやう、うせにし女、青き衣を著て白きさいでして頭を包みて、髪に玉の簪一具をさして來たり、生きたりし折に變らず。母にいふやう、我生きて侍りし時に、父母我を悲しうし給ひて、萬をなかせ給へりしかば、親に申さで物を取り遣ひ、又人にも取らせ侍りき、盗みにはあらねど、申さでせし罪によりて、今羊の身を受けたり、來りてその報を盡し侍らんとす。明日まさに頸白き羊になりて殺されんとす、願はくば我命を許し給へといふと見つ。驚きて翌朝食物する所を見れば、實に青き羊の頸白きあり、脛背白くて、頭に二つの斑あり、常の人の簪さす所なり。母これを見て、暫しこの羊な殺しそ、殿歸りおはしての後に、案内申して免さんずるぞといふに、守殿物より歸りて、など人々參物は遅きとてむづかる。さればこの羊を調じ侍りてよそはんとするに、上の御前暫しな殺しそ、殿に申して免さんとして留め給へばなどいへば、腹立ちて僻言なせそとて、殺さんとして吊りつけたるに、この客人ども來て見れば、いとをかしけにて、顔好き女子の十餘歳ばかりなるを、髪に繩つけて吊りつたり。こ

上の御前—主人  
の髪をいふ

食物する人料理人

の女子のいふやう、童はこの守の女にて侍りしが羊になりて侍るなり、今日の命を御前たち助け給へといふに、この人々あなかしこく、ゆめく殺すな、申して來んとて行くほどに、この食物する人は例の羊と見ゆ、定めて遅しと腹立ちなんとて打ち殺しつ。その羊の泣く聲、この殺す者の耳には唯常の羊の泣く聲なり。さて羊を殺して、煎燒さまさまにしたりければ、この客人どもは、物も喰はで歸りにけり。怪しがりて人々に問へば、しかんくなりと初めより語りければ、悲みて感ひける程に、病になりて死ににければ、田舎にも下り侍らずなりにけり。

出雲寺別當の鯨になりたるを知りながら殺して食ふ事

○今昔二十、出雲寺別當押覺食父成鯨肉得現報忽死語參照上つ出雲寺今の上御體社城内なり

今は昔、王城の北、上つ出雲寺といふ寺建ててより後、年久しくなりて、御堂も傾きて、はかしくしう修理する人もなし。この近う別當侍りき、その名をば上覺となんいひける、これぞ前の別當の子に侍りける。あひ續ぎつと、妻子もたる法師ぞ知り侍りける。いよ

かわつ寺一かみつ寺にて、上つ出雲寺をいふ他に勝れて一今昔には「殊に勝れて」とありちうがはしき一風がはしきにて、風雜の意

いよ寺は毀れて荒れ侍りける。さるは傳教大師の唐土にて、天台宗建てん所を擇び給ひけるに、此寺の所をば繪に書いて遣はしける。高雄、比叡山、かむつ寺と、三つの中にいづれかよかるべきとあれば、この寺後は他に勝れてめでたけれど、僧なんらうがはしかるべきとありければ、それによりて留めたる所なり。いとやんごとなき所なれど、如何なるにか、さなりはててわろく侍るなり、それに上覺が夢に見るやう、我父の前の別當いみじう老いて、杖つきて出で來ていふやう、明後日未の時に大風吹きて、この寺倒れなんとす、しかるに我この寺の瓦の下に、三尺ばかりの鯨にてなん、行方なく水もすくなく狭く暗き所にありて、あさましう苦しき目をなん見る、寺倒れば、こほれて庭に這ひありかば、童うち殺してんとす、その時汝が前に行かんとす、童に打たせずして賀茂河に放ちてよ、さらば廣きめも見ん、大水に行きてたのもしくなんあるべきといふ。夢覺めて、かよる夢をこそ見つれと語れば、如何なる事にかといひて日暮れぬ。その日になりて、午の時のするより俄に空掻き曇りて、木を折り家を破る風出で來ぬ。人々あわて

裏板一天井を張ちがして屋根裏を板張にしたる也

あへなん我はー我は取て食はん

て家ども繕ひ騒げども、風愈吹きまさりて、村里の家ども皆吹き倒し、野山の竹木倒れ折れぬ。この寺誠に未の時ばかりに吹き倒されぬ。柱折れ棟崩れてすぢなし。さる程に裏板の中に、年比の雨水溜りけるに、大なる魚ども多かり。そのわたりの者ども、桶を提げて皆掻き入れ騒ぐほどに、三尺ばかりなる鯰の、ふたくとして庭にはひ出でたり。夢の如く上覺が前に來ぬるを、上覺思ひもあへず、魚の大に樂しげなるに耽りて、鐵杖の大なるを持ちて、頭に突き立てて、我太郎童を呼びてこれといひければ、魚大にてうち取られねば、草刈鎌といふものを持ちて、腰を掻き切りて、物に包ませて家に持ていりぬ。さて異魚などしたよめて桶に入れて、女どもに戴かせて我坊に歸りたれば、妻の女、この鯰は夢に見えける魚にこそあめれ、何しに殺し給へるぞと心憂がれど、他童の殺さましも同じ事、あへなん我はなどといひて、他人ませず、太郎次郎童など食ひたらんをぞ、故御房はうれしと思さんとて、つぶくと切り入れて、煮て食ひて、怪しういかなるにか、異鯰よりも味ひの善きは、故御房の肉むらなれば善きなめり、これが汁

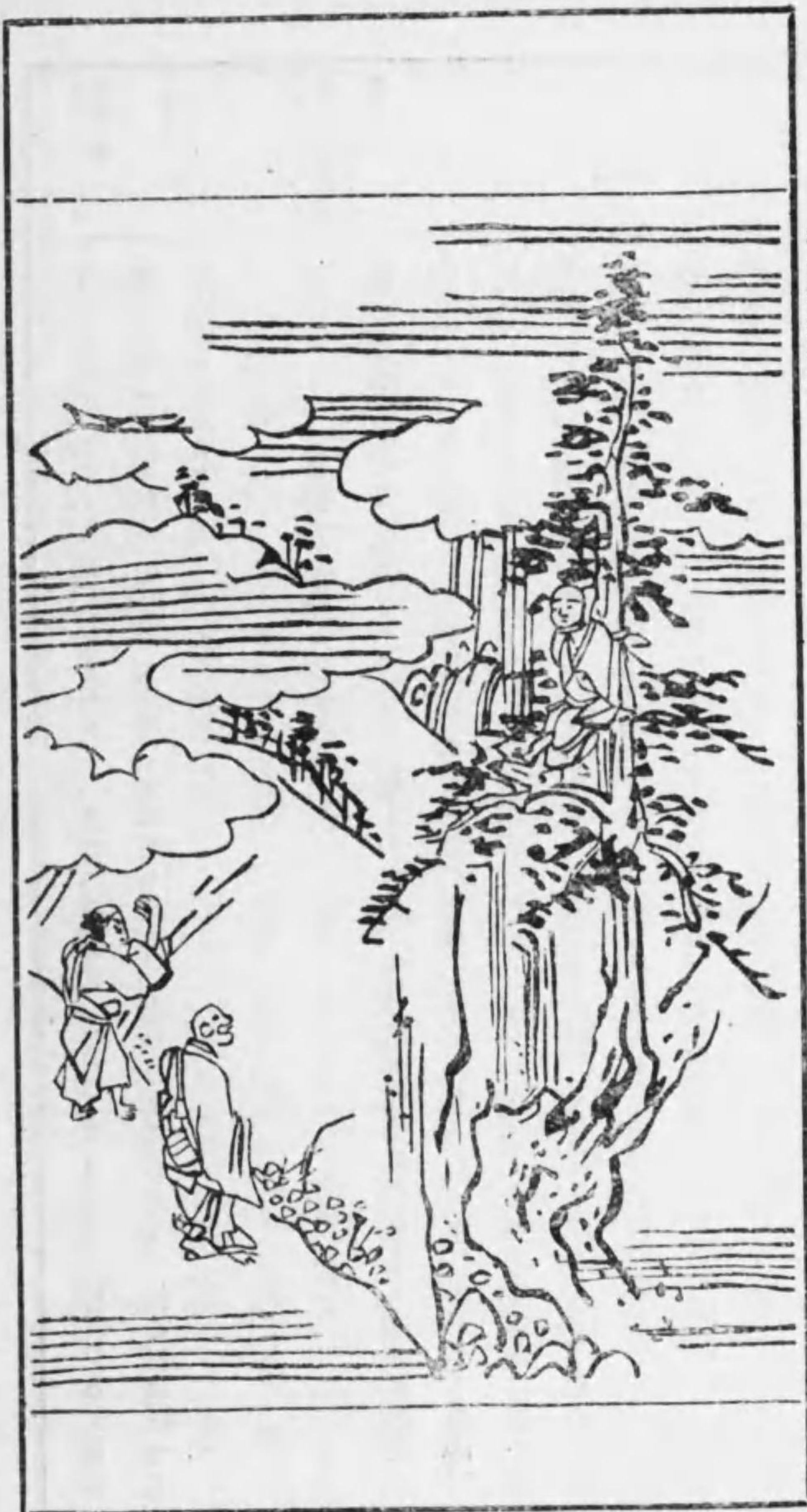
まうくーむせび苦む聖

○今昔二十、伊吹山三條禪師得天狗遊語及び十訓抄參照

すよれなど、愛して食ひけるほどに、大なる骨喉にたてて、えうくといひけるほどに、頓に出でざりければ、苦痛して終に死に侍りけり。妻はゆよしがりて、鯰をば喰はずなりにけりとなん。

念佛の僧魔往生の事

昔、美濃國伊吹山に久しく行ひける聖ありけり。阿彌陀佛より外の事しらず、他事なく念佛申してぞ年經にける。夜深く佛の御前に念佛申して居たるに、空に聲ありて告げていはく、汝懇切に我をたのめり、今は念佛の數多く積りたれば、明日の未の時に必ず必ず來たりて迎ふべし、ゆめく念佛怠るべからずといふ。その聲を聞きて、限なく懇切に念佛申して、水を浴み香を燒き花をちらして、弟子どもに念佛諸共に申させて、西に向ひて居たり。やうく閃くやうにするものあり、手を摺りて念佛申して見れば、佛の御身より金色の光を放ちてさし入りたり、秋の月の雲間より顯れ出でたるが如し。様々



白毫一佛の額上  
にある毛なり

たなびき一た  
なびくの術か

の花を降らし、白毫の光身を照らす。此時聖尻を逆になして、拜み入る數珠の緒も切れぬべし。觀音蓮臺をさしあけて、聖の前により給ふに、紫雲厚くたなびき、聖這ひ寄りて蓮臺に乗りぬ。さて西の方へ去り給ひぬ。さて坊に残れる弟子ども、泣くく尊がりて聖の後世を弔ひけり。かくて七八日過ぎて後、坊の下司法師ばら、念佛の僧に湯沸して浴せ奉らんとて、樵木に奥山に入りたりけるに、遙なる瀧にさし掩ひたる榎木あり、その木の梢に叫ぶ聲しけり。怪しくて見上げたれば、法師を裸體になして梢に縛りつけたり。木のほりよくする法師の昇りて見れば、極樂へ迎へられ給ひし我師の聖を、蘿にて縛りつけて置きたり。この法師、いかに我師はかゝる目をば御覽するぞとて、寄りて繩を解きければ、今迎へんするぞ、その程暫しかくて居たれとて、佛のおはしましよをば、何しにかく解き免すぞといひけれども、寄りて解きければ、阿彌陀佛我を殺す人あり、をうくとぞ叫びける。されども法師ばら、數多昇りて解きおろして、坊へ具して行きたれば、弟子ども心憂き事なりと歎き感ひけり。聖は人心もなくて、二日三日ばかり